世界のどこへでも お好きなときに！

ジャルパックで海外へ行こう！

チーム名	期間	旅費	出発時期
香港・マカオ・台北	7日間	179,000円	毎月
アンコールワットと東南ア	12日間	268,000円	毎月
ハワイ	7日間	299,800円	毎月
ヨーロッパ	18日間	569,000円	3月
ヨーロッパ	23日間	547,000円	2月
中近東・アフリカ	23日間	658,000円	2月
世界一周	19日間	726,000円	3月

ジャルパックのお申込みは太平洋観光へどうぞ！

関西地方の方は緑丘編集部（大阪202局2161）へ御相談下さい

IATA（国際航空運送協会）公認代理店

世界中の航空会社の代理店です。日航，全日空，国内航空はもちろんです

JATA（国際旅行業者協会）会員
ASTA（米国旅行業者協会）会員
PATA（太平洋観光協会）会員
UFTAA（国際旅行業者連盟）

太平洋観光株式会社

本　社／東京都千代田区丸の内2の18岸本ビル　TEL(281) 9864～5
銀座営業所／東京都中央区銀座5丁目2番地　TEL(573)5416 代
札幌営業所／札幌市北二条西三丁目(越山ビル)　TEL(24) 7913

大阪 緑丘十日会

十月度例会

実方学長来阪を機会に十日会に出席を願い母校の近況をうかがう。

さらに戦歿学生碑について名称を「平和記念碑」にしたい意向をもらし、募金協力を依頼する。

今回はマッキンノン先生の京阪神合同パーティーの録音テープの再生により当日の模様をしのびまた出席出来なかった椎名、実方両教授にも聞いて貰う。

緑丘会大阪支部から夫々栄転せられる梅野弥太郎氏（昭九―北海道銀行東京支店長に）や江上芳雄氏（昭三―熊本家裁へ）のご挨拶に、今般取締役就任に決定した東京建物株式会社田代耕二氏（昭八）の挨拶などがあった。

なおマッキンノン先生歓迎会の当日の写真アルバムを公開、希望者には夫々焼増して頒布することとした。

（出席者）
（来賓）椎名先生、実方学長
宮地（大一一）喜多村（大一二）石田、渡辺（昭五）樋山、江上（昭三）玉井（昭四）紀野、梅野（昭九）蓁目、進藤（昭一一）若山（昭一三）山本（昭一六後）角（昭三四）

（上）近況を語る学長

（下）江上最高裁判事

編集後記

★マッキンノン先生特集号（Ⅱ）をお届け出来ますのも、各支部のご協力によるものであり厚くお礼申し上げます。この一冊もまた歴史的な記録として残ることを確信いたします。マッキンノン先生はどんなにかお喜びで楽しい憶い出を胸に秘めてアメリカへ帰られた事でしょう。今頃は懐しいアルバムの頁をめくりながらあの顔、この顔を思い出しておられることでしょう。マ先生、どうぞこの一冊も先生のテーブルに置いて訪問する日本人にお見せ下さい。

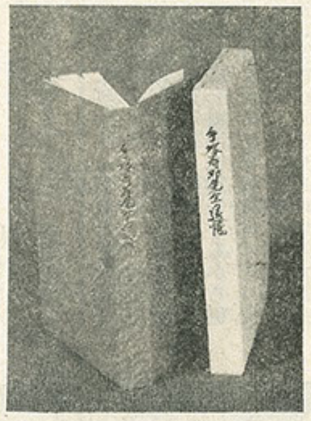
★〝手塚寿郎先生の追憶〟が出来ました装訂は編集子苦心の作です。日本にたった二〇〇冊よりない本です。すでに大部分を発送し、（編集部に十二冊在庫）間もなく品切れです。本を作った経験のある人には二〇〇冊限定版なら一冊幾らになる本かお判りです。活字をはじめから組みますと、一冊千五百円以上でしょうと造本家はいわれます。実費は千二百円かかりましたが、一冊千円で頒布することにきめました。

★糸魚川祐三郎先生他界す。大野前学長より追悼文を寄稿せらる。急拠頁を追加してお届けすることが出来ました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

★増頁のため連載の苦米地英俊日記「戦塵余録」を割愛しましたが、次号からまた連載いたします。

〝手塚寿郎先生の追憶〟発刊

売切れ近し！ ＜二〇〇部限定版＞



〝手塚寿郎先生の追憶〟予約募集中の所完成しましたので予約部数発送完了しました。残部僅少につきすぐ代金引替で申込み下さい。

一冊　壱千円
（送料荷造費一〇〇円別）
（北海道地区）札幌市大通西四丁目一番地　北海道銀行ビル内（TEL 26～一三〇一）シオノギ製薬㈱木村俊也宛
（関東地区）東京都中央区銀座東七丁目六　双葉ビル内緑丘会東京支部　神田正英
（関西以西）兵庫県西宮市清水町一―一六　蓁目英三

アメリカへ運べる位の超過金をとられるそうです。だから市中は混雑しないし、安全だし……」

越崎「あれは全く感じがいいですねえ」

川田「ロンドンやパリでは地下鉄が発達していて、大量の輸送が可能だから、地上はそんなに混雑していない。ローマでは地下鉄は目下建築中。だから車の混雑はすごかったですよ」

久保「地下鉄の役目は大きいですね。ただ日本の地下鉄とくらべると汚たないですね。それに、ロンドンの地下鉄などエスカレーターで下りて更にエレベーターで下って、全く地底を走っている感じ」

村山「東京の地上の輸送はもう限界に来ているわけですから、これからはもっと地下鉄を発達させる方向へ向けることですねえ」

司会「この辺でヨーロッパの食べ物など」

川田「僕が食べもので感じたことは、高いお金をだして日本食をたべることは全く愚であるということですね。出来るだけそこの国の食べ物を味わうことですね」

久保「えー、それはほんとうにそう思いますねー。僕はパンに驚きました。殆んど固くて、日本では到底売り物にならないような固いパンでした」

川田「あちらのパンの観念からいうと、日本のパンは菓子の類に入りますね。ただ、パンが主食ではなく肉とか魚とかの間にたべるほんの添えものですね。ただ肉の味はまづいですね」

越崎「僕は年輩のせいか、ヨーロッパの食べ物は一般に糖分が多すぎて、さすがに終り近くなると塩ザケの茶漬でもほしくなりました」

久保「飛行機の中の食べ物は、どこのでもおいしかったですねえ。それぞれの国の材料を巧みに使っている。日本ののり巻きなど、外国人がおいしそうに食べていました」

川田「飲み物は、デンマークとドイツのビール、それにフランス、イタリーのワイン。お酒というよりは水代りの飲みものでしたね。殊にデンマークはビールの消費量がすごく多いんだが、これはビールは国営事業ですが、その税金で老後の保障とか社会福祉の費用にあてられるのでビールを飲めば飲むほど、ますます自分達の老後が安全だという仕くみですね。全く羨やましい」

久保「空気がカラリと乾いているから、全くビールはうまいですね。もっとも水もよくないですけれど」

川田「スイス以外の水は全くまずいですよ」

越崎「日本のビールとドイツのビールは、味が似ているように感じましたね」

川田「そうですね。僕はドイツで国民酒場をのぞきましたが、古めかしい劇場風の酒場ですがステージには、半ズボン姿のバンドマンが民謡風の曲をかなで、客席では、老いも若きもソーセージをつつき、ビールを飲みながら歌をうたい、ダンスに興じ、まったく開放的に雰囲気をエンジョイしている」

越崎「ヨーロッパへ行って、ビールとワインの飲めない人は気の毒ですねえ」

司会「今年の日本の夏は、ミニ・スカートの氾濫でしたが、ロンドンの本場をごらんになっていかがでした」

川田「ミニ・スカートもさることながら、着る物全般に関しては日本の方がはるかにお金をかけていますね。流行の尖端をいっていますよ。若い人のミニ・スカートも目につきますが、全体にじみで落着いています」

越崎「デパートなんかみても、驚かされることはなかったですね。却えっておくれているみたいですよ」

久保「ただ、アメリカ資本の攻勢は目につきましたね」

越崎「えー、それは、ずいぶ入んっているようですね」

川田「アメリカ資本も目につきましたが、日本製品の進出も目立っていて、日本人として誇らしく思いましたね。ソニー、ホンダ、ヤシカなど知らない人はいなかったし、それと日本の映画も上映されているし、イタリーの田舎町で三船敏郎の名を耳にしたね。現代の日本のことは、かなり認識されているようです」

久保「殆んどの都市の大きな店では、日本円が使えましたね。換算率が少し低くかったが、それでも日本の通貨があのように堂々と使えるのは嬉しかったね」

川田「それはそう思いましたね。ただ、日本の外国旅行の際のドル持ち出しがすくなすぎるため、どうしても日本円を持ち出してそれを全部使うものだから、円価がますます安くなって……。もう少しドルの枠をふやした方が日本円の対外市価を維持できるのではないかと思いますが」

司会「ではこの辺で。どうもありがとうございました」

（文責司会）

緑丘通信

★京都産業大学で英国の世界的歴史家トインビー博士夫妻を招きましたので、東京到着以来お伴しております。とは同校の小林象三教授。そして「大学と市の大講演会の通訳という大役をひきうけさせられ一生の記念となります」との来翰であった。お互に永生きしたいものである。マッキンノン先生の訪日も永生きのおかげであり、赤いチャンチャンコでニコニコ顔はウラシマタローでなくて花咲爺さんである。（12頁参照）

★香港ジェトロ　木下　春雄氏（昭一一）のニュースによると「暴動は相変らずで、一日一五個の爆弾という具合で、このところ一寸またガタガタして来ました。しかし慣れるということはおそろしいもので、すっかりマヒして現地人も私達も〝ああ、バクダンね〟〝そおう〟という程度です。

しかし自由時間には水泳をしていますが、クラゲが多くてチクチクさすので……。

一昨日ヴェトナム帰りの中国人とマンダンしていたら〝サイゴンよりひどいよ〟なんて云っていました。

★昭八菅井長平氏ライオンズ国際協会東洋東南アジア大会に出席、バンコック、シンガポール、香港、マカオ、台北を経て無事十一月二十七日帰国す。

★大一二大久保鹿式氏は九月二十六日から約三十五日間、印度、ソ連、瑞典、西独、オーストラリヤ、イタリー、オランダ、フランス、カナダハワイの各国の地方自治の実態調査を終えて無事十月三十一日羽田へ到着。

★勲三等瑞宝章のマッキンノン先生の写真をこの特集号のトップに掲げたが、長谷川政夫氏（大一四）の撮影によるものである。連絡によると「丁度十月二十一日（土）の朝、ミセス・ギルフオイル（マ先生次女）から電話があって、マ先生が今日はおられますとのことで、午後すぐ国際文化会館に赴き奥さんと先生の写真を撮影しました。珍らしい快晴で写真をとるには少しまぶしいくらいでしたので、先生が少々むづかしいお顔をしております。中望遠（一〇五ミリ）を使ったところ、勲章にピントを合わせたら先生のお顔がピンボケとなってしまい（美人の写真なら自信があるのですが）ました。

コロンビヤ大学同窓会の節、コロンビヤ大学総長カーク博士と吉田さんと挨拶しているのを写し＝吉田さんがコロンビヤ大学から名誉法学博士号を貰った時＝吉田茂元首相の写真が、珍らしく笑顔で写っているのでこれが母校コロンビヤの校友会誌に掲載され、全世界に紹介されました。

今度吉田さんが亡くなられたので朝日新聞の要望で提供しました。」とあった。

穴（二）室谷賢治郎

穴は函館へ移ります。函館の五稜郭の入口に三年程前から小じんまりした展望閣が建てられ、五稜郭タワーと名付けられました。内部のエレベーターに乗りますと、数秒にして百二三十メートルの高さに運ばれ、展望台からの眺めは遠くに臥牛山を、また脚下にオランダ式築城術――白山友正博士の考証によればフランス式――による五稜と外濠とを収め、快哉を叫びたくなります。ところが、折角のこの建物の前に打込んである白い細長い杭に、ペンキで縦に左記の通り書かれています。

GORYOKAKU　TAWA

初めてこのタワーに参りました時、私は案内者の嘗ての教え子永田函館商工会議所専務理事に言ったものです。「私にペンキを貸してほしい。TAWAの箇所をTOWERと改めるか、さもなければそのままTAWAの下にKEを附け足したい。」

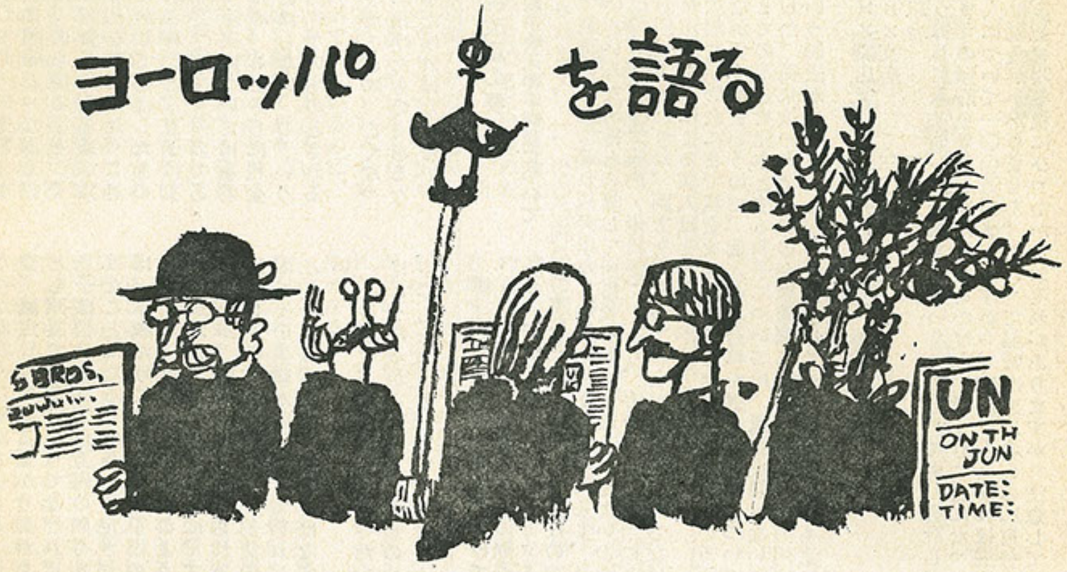
この穴は戦後卒業された方の執筆する穴です。

一の穴を明治生れ、大正生れに独占されて申訳ありませんので、もう一つ設けました。どしどし投稿下さい。

四〇〇字詰原稿用紙　一枚

座談会

ヨーロッパを語る



司会者「小樽の中野製菓株式会社の招待で、去る五月、ヨーロッパをひと廻りしました。一行二十数名のなかに、くしくも緑丘出身の方が四人もおりましたので、今夕お集りいただき旅の想い出などを語っていただきます。季節の宜しきを得たのと、グループの一行が同業者の集りという好都合のため、和やかに愉快な旅をつづけ、エスコートの私も楽しく案内させて戴きましたが、それにもまして、団員の中心でありました皆様が緑丘の同窓の士であったということにあづかること大であったと感謝して居ります。

ひとつ今日は皆様のヨーロッパの想い出話しなど語って戴きたいと思います。

先づ、ヨーロッパに第一歩を印されて、最初に感じられたことはなんでしょうか」

川田「まず、都市美ですね。街並みが整然として、綺麗ですね。日本のように高い建物、低い建物が雑然と建っているのではなく、一つの都市計画のもとに街がつくられ、併も古くからある建物の美を引き立てるような工夫がされている……」

越崎「そうですね。特にパリなど、四階建とか五階建とか高さの規制があって、街並みがそろっていますよ」

久保「それに街じゅう、到るところに緑が多いですね」

村山「そういえば、パリではあの美しいシルエットのエッフェル塔を邪魔するような、高い建物はなかったですね。ローマでは、ヴァチカンが、どこの丘からもすっきりと眺められましたね」

川田「古くからの建物、史跡を大事にしています。フランクフルトでは、ゲーテ・ハウスが戦火でメチャメチャになっても、一つ一つをちゃんと復元している。それから、観光を売りものにしていることだと思います。例えば、ローマの終着駅のすぐ横に、紀元前の城壁の一部がその儘になっていますが、現代の建築の粋を集めた建物と、古代のくずれかかった壁が、少しの不調和を感じさせずに、隣り合っている。却えって、ローマらしい魅力を持っていますよ。日本なら、さしずめ取り壊してしまうところでしょうが」

《出席者》(発言順)

株式会社　川田寛太郎商店　取締役社長
川田　稔　(昭5)

株式会社　越崎商店　取締役社長
越崎宗一　(大11)

中野製菓株式会社　常務取締役
久保　博　(昭12)

寿原食品株式会社　専務取締役札幌支店長
村山喜一　(昭24)

司会　太平洋観光株式会社札幌営業所次長
高崎愛子

越崎「もっとも、レンガと石の建物だから、一度建てると三百年も五百年ももつわけですね。日本の木の建築で百年も経つと、見るかげもなくなるのとでは違ってきますね」

久保「ヨーロッパのどこの都市でも、非常に落ちついた感じがしました。所によっては、古めかしいと云う感じさえ……」

川田「一番近代都市という感じがしたのは、ジュネーブでしたね。あとの都市では、近代的という感じがしませんねえー」

越崎「あの古めかしさが、欧州人の誇りなんですよ。アメリカに対して、歴史とか伝統とかを持っているという……」

久保「しかも、古い建物でも手入れが行き届いていて、窓ガラスはピカピカ光っているし、花の咲いてない窓は一つもなかった。花で石の建物の冷たさをカバーしている。それに干し物が都市では見られなかったです。一つの規制があって、戸外で物干しが出来ないようになっている。洗濯物をみたのは唯一ヶ所、ナポリの裏通りだけでした」

バチカンの前での旅行団

村山「人々の公徳心も違っていますね。道路も家の一部と考えていて朝早くからブラシで舗道を洗っている。紙くず、タバコの吸い殻など捨てないですね」

川田「えーえ。やっぱり小さいときからの躾の問題でしょうね。日本人は家の中は奇麗にしているが、一歩家から出ると、少し位汚してもいいと考えている」

司会「道路のお話しが出てきましたが、交通事情などは……」

越崎「日本に帰って来ると、あまりに道が狭ますぎて……、車と人が多すぎて」

村山「ローマなど結構狭い通路もありましたね。狭いくねくねの道を通り抜けて、パッと目の前に広場があり、噴水があったりして。でも日本ほど道路が狭く感じなかったのは、車は小型を使っているからですよ。大型車は滅多に街の中では見かけなかったねえー」

川田「タクシーの車自体、あまり好いものは使っていませんね。それにタクシーにはチップを払うとか、二人以上で乗るときは、割り増しが取られるとか」

村山「あれは英国でしたね」

久保「イタリー以外では、満員のバス、電車など見かけなかったが、定員制がきちんと守られているようですねー。パリの地下鉄など、定員になると改札口が閉まってしまうし」

川田「それとね、乗り物があまり込まないのは、建物が高層建築化していて住宅が都心に近くあるので通勤の範囲が狭いわけですね。其の為、ラッシュも日本程ではないわけです。やがて日本も高層化して都心に住宅を移すようになるでしょうねー。あちらでは商店街の上は全部住宅用のアパートになっています」

村山「都市では、自分の家を持ち庭のある暮しはまづ見かけないですね」

越崎「それは余程ぜいたくな事なんだよ」

村山「普通の人は殆んどアパート暮しをしているから、自然の欲求として広い公園とか広場があちこちにつくられる」

川田「ヨーロッパの地勢をみると緯度と緑の関係がでてきますね。日本からみると、緯度の高いところばかりですが、メキシコ暖流の影響で暖かいわけです。ただ、高い緯度ですから日照時間が少ないわけです。其の為、太陽を求ゆて緑のある場所に集まるのでしょう。もっとも昼休みが二時間も三時間もあるのですから、その間、すべてのものを停止して太陽の吸収に出掛けていますね」

村山「人々はのんびりとした表情で街を歩いていますね。全く羨やましい。国民性の違いでしょうか」

川田「それもあるでしょう。それと、大体街の中にトラックやダンプカーが走っていないですよ。定められた時間以外は街の中へ入れませんし、ハイウェーなども走っていません。これはトラック専用のバイパスが完備しているからですが、イタリーなどではトラックで或る物資を日中街の中に運び入れようとすると、

毎日新聞連載

慰謝料と贈与など（愛人関係を含む）

＝さまざまな問題＝

北條恒一
（昭一五　税政評論家）

賞与引当金の利用を

経営者は盆と暮れにボーナスを支払う慣習がある。月ごとに倒産の記録を更新している今年も、中小企業の経営者は泣きの涙でその資金をひねり出さなければならない。支払った賞与はもちろん損金にはなるが、支払う以前に決算に際していくらか引き当てる制度ができているのに、それを利用している法人が少ない。それが賞与引当金の制度である。

青色申告のできる法人にかぎって使用人賞与（使用人を兼務する役員の使用人職務に対する賞与も含む）にあてるため、各事業年度で賞与引当金勘定に繰り入れたとき、法定の限度までなら損金にすることができるという制度である。法定の限度はどういう計算をするかというと、暦年による前年中の使用人一人当たりの賞与支給額に、当期の一月一日から事業年度の終わりまでの月数を十二で割った数値を掛け、その金額から一月一日から事業年度の終わりまでの間に支給した使用人一人当たりの賞与の金額を差し引き、それによって算出された金額に当期末現在に在職する使用人の人数を掛けるというきわめて簡単な計算である。ところが、この制度が新しいのでなじみが薄いため利用者が少ないのかもしれないが、利用したほうが税金の節約になる。

このような一般的な繰入れ限度額のほかに法人が賞与の支給規定を設け、そのなかで賞与の支給対象期間をきめている場合には、前記の繰入れ限度額の計算方法による金額よりももう少し多く損金に算入できる計算方法がある。支給対象期間というのは、むずかしく考える必要はない。経営者が賞与を支給しようとするときは、一定の期間の使用人の勤務成績などを評定するはずである。たとえば六月に支給するものは、前年の十二月一日から当年の五月末日までの勤務評定によって支給するというような習慣がある。その期間のことをいっているのである。退職給与引当金にかかる退職給与規定については、税務署長に届け出なければならないという定めもあるが、賞与引当金にかかる賞与支給規定については、別段税務署長に届け出る必要はない。ただし、その規定について役員会で決議し、提示を求められたときすぐ提示できるようにしておけばよいのである。この規定をつくるくらいなんでもない。いずれの方法によれ賞与引当金勘定を設けたときは、これを貸借対照表の負債の部に、流動負債または引当金として、科目を明示して記載しなければならない。（五月十五日）

慰謝料と贈与の問題

人間の暮らしにはさまざまなスタイルがある。父親が死亡して五年もたってから、父親の愛人だった人から、人を介して慰謝料を請求された。自分もその女性の存在を知っていたので、二百万円の現金を渡し領収書をもらい、今後一切迷惑をかけないという一札をとった。その二百万円の金はどこから生まれてきたかというと、父親が死ぬ少し前に伯父に現金を預け息子が一人前になったら渡してくれと頼まれていた金だったのである。どうやら息子も一人前になったので、伯父はこれを渡し定期予金にしていたが、よせばよいのに息子は自分の名前の預金にせず、架空名前の預金にしていた。こうしておけばわかるまいというサル知恵である。

「天網恢恢（テンモウカイカイ）疎にして漏らさず」というが、息子の商売について税務調査があり、金融機関の預金もれなく調べられた。ある日突然、普通預金に二百数万円が入金し、数日にして払い出されている。調査にあたってその出所なにが証拠になるかというと、遺言書、確定日付のある預かり証がもっとも確実である。そうでなければ、息子は伯父から二百万円の贈与を受けたことになる。贈与と認定されれば、本税だけで三十六万五千円の税金になる。ところが、前記のような確証がない。そういうときに、すこし弱いが、証拠として認められるのは預金通帳の記録である。伯父の通帳にその事績が記録されていれば、どうやら認められ、贈与とはならない。

ところで、慰謝料をもらった女性はどうなるかというと、父親の生存中にもらおうと死亡後もらおうと、いずれも贈与税の課税対象になる。日本国中どこにいようと追いかけてくる。父親が生きているときは、正式の婚姻関係にある妻と同じ程度の寄与を父親にしてくれたかもしれないが、税法はわが国民の常識に照らして同情しない。ただし正式の婚姻関係にあった配偶者の一方がもらった慰謝料は非課税になる。（五月二十九日）

〈税務調査は滅多にない〉
――しかし綿密になるだろう

があるこの税務調査にもいろいろの種類があるが、そのなかで一番手ごたえのある調査は、実地調査である。特に法人税にかかる実地調査は、最近、深味を増してきている。表面的なことをひと通り調べるというのではなく、これはと思う案件についてはとことんまで追究する。

この実地調査の頻度が三年に一度ぐらいであったが、今年から頻度がさがるようである。これは真面目な納税者にはよいが、大口でしかも悪質な脱税を徹底的に追究することに、国税庁の方針がきまったからである。このことは従来でもやっていたことではあるが、今年からはさらに広域的に脱税追究しようということになった。頻度がさがったとはいえ実地調査にぶつかったところは、時間的にも余裕があるので、調査そのものは質的に綿密になることを覚悟しなければなるまい。

納税者にとって、税務署の調査ほど不愉快なものはない。何ごとによれ調べられること自体圧迫感

と払い先を追求しても、口を割らない。預金先に数日間陣どった調査担当の税務職員は、あらゆる手をつくして預け入れの源資が架空名義の定期予金であることを究明した。これは売上金をごまかして蓄積したものであろうと追求されると、息子は初めて事実の一切を告白したのである。筋のとおる事実については税務当局もこれを認め、ことさらに税金を重課しようとはしない。こういう時は、営業に関係ないものとされるのである。

ところが困ったことに、亡くなった父親が伯父に預けたものであるなら、その証拠がなければならない。

銀行等金融機関にお金を預けていると利子がつきます。その利子については総額の十五パーセントを源泉徴収されます。一、〇〇〇円の利子だと一五〇円が税金なのです。ただし、利子の収入はそれ以外になんの税金もかかりませんし、また、ほかのいろいろな所得と合算して所得税を計算しなくてもよいのです。たとえば、給与所得（報酬・俸給等）があり、そのほかに配当による収入が五万円以上のときは、両方を合計して税金を計算しなおさなければなりません。利子による収入はその必要がありません。

しかし、少額な預貯金にまで税金をかけることは、貯蓄奨励という面から酷ではなかろうかというので、個人の場合にかぎって一人について一〇〇万円までの預金を元本とする利子については、税金を掛けないことになりました。従来は一人で一つの金融機関にかぎって一〇〇万円までの元本という制限がありましたが、今度はいくつの金融機関でもよいのです。

A銀行××支店　五〇万円
B銀行××支店　三〇万円
C信用組合　二〇万円

というようにしてもよいし、金融機関はいくつであっても、合計して一〇〇万円までの預貯金の利子には税金をかけないですむことになって います。一人について一〇〇万円までですから、家族五人とすれば五〇〇万円までは税金がかかりません。といって無暗に家族のものに自分の預金をわけると、贈与税にひっかかるおそれがありますから注意して下さい。

〈所得税改正の要点〉
利子収入の非課税について

大切な取得価額の算定

商法では、会社が取得した固定資産について、取得価額または製作価額をつけなければならないと規定している。どこからどこまでが取得価額、または製作価額であるかという点については具体的にきめていない。また、企業会計原則でも取得価額主義をとっている。この取得価額等を正確にキャッチしないと、減価償却費の計算に影響するとともに、税務調査のときに紛議の種となる。

他から購入したものについて、引取運賃を初めとして、そのものを事業の用に使用することができる状態にするまでの支出金額が取得価額になる。会社が自分で建設、製作または製造したものについては、そのためにかかった原材料費、労務費、経費および使用するために直接かかった費用が製作価額となる。このように文字に書いてしまえば簡単なことだが、実務上は、これを正確に記録してキャッチすることがむずかしい。特に建設による取得の場合は、思わぬ費用が支出される。そこで通常行なわれる記帳整理の方法は、新たに「建設仮勘定」を設定し、関連する費用を一切そこに投入し、いよいよ使用開始するときに、その内容を検討して資産勘定にするものと、そうでないものとに区分して経理することが望ましい。

工場の建設や拡張のために現地に駐在、または滞在する使用人（臨時雇も含む）の給料や福利厚生費は、取得価額に含めなければならないし建設に直接関連して支出された寄付金や交際費なども、もちろん含まれる。最近、やかましくいわれる公害補償費で、建設後に支払うことを予定していたものも算入しなければならない。ただし、毎年支払う補償金は除かれる。他人に建設工事を請負わせたとき、予定した工期よりも早く完成したときに値増金を払うことがある。また予定した工期より遅れて引渡しが行なわれたときに違約金をとることがある。工期が短縮されれば、それだけ会社が利益を得ることにもなる値増金は、取得価額に入れなければならないことになっている。違約金をとった場合は、請負代金から違約金の額を差引いた金額を取得価額としてもよいし、また、差引かないで雑益に計上してもよい。

取得価額に入れても入れなくてもよいものに、固定資産の取得のための借入金の利子、割賦購入資産の購入代金のうちに含まれる利息相当分がある。これらのものを算入するかしないかは、企業の判断にまかされている。いずれにせよ取得価額の算定は慎重にしなければならない。（九月二日）

糸魚川君と私

小樽商大初代学長　大野純一

糸魚川祐三郎先生

松商学園短大学長。十一月十日午前十時半心筋こうそくのため長野県松本市相沢病院で死去。七十才。
自宅は松本市清水二丁目三の一、喪主は長男、直祐氏。
〝手塚寿郎先生の追憶〟に寄せられた原稿が絶筆となる。
先生の生涯は小樽高商時代（大正十一年四月二十一日講師、大正十二年十二月十七日教授、昭和十七年七月十日文部省転出。二〇年間の母校勤務）が一番ながく、横浜高商教授、和歌山大学長、松商学園長など歴任。今秋の生存者叙勲で勲二等瑞宝章を受けていた。

銀行へ入ったので、東京高商専攻部で一緒になり、一緒に小樽高商に赴任し、それ以来四十数年の親しい友であった。

私が五月末東京に移って来てから二度電話を貰った、「東京か松本かで逢おうぢやないか、いつでも都合のいい日、都会のいゝ場所を指定して呉れ」と云うのであった。私は病後のからだで初めての東京の猛暑にあってまいってしまい六月から九月一杯殆んど寝たり起きたりの日を暮していたので「もうしばらく延期して十月か十一月かに拙宅に泊りがけで来て欲しい」と約束してあったのだ。十一月に入ってから私も健康をとりもどしたので十一月の六、七日頃打合せの電話をしようと考えていた。それなのに突然の電話で、もう二度と再び逢えないことになったのだ。私は残念で残念でたまらない。この気持は今も抜けきれないでいる。

彼はクリスチャンらしくない、クリスチャンであり、学校の新米講師時代には学生と共にY・M・C・Aの下宿に住んでいた。その頃の学生は西野嘉一郎君、田中修吾君等であった。その中にクリスチャンならざる私ももぐり込させて貰った。それであの頃のクリスチャン学生諸君とは特に親しくなって今でも逢えば当時の話に花が咲くのである。

こんな頃からの思い出はいくら書いてもつきない程であるが、その中で私の胸にいつまでも強く刻みこまれているものを一つ丈け述べて四十数年の変らざる友情に対する感謝の意を表することとしよう。

それは昭和二十一年二月頃のことであった。私が召集解除になって六ケ月もしないうちである。文部次官から何月何日時に文部省に出頭され度しと云う電報を受けとった、しかし、あいにく私は風邪を引いて熱が出ており、かつ当時の交通事情は何日もかゝって切符を手に入れ、汽軍は窓から出入してはじめて乗り降りするあの地獄のような有様であったので、私は東京行きを断る積りで飯川文三さんに相談した。

飯川さんは栗林汽船に交渉して日本に貸与されているアメリカの戦標船に便乗するよう頼んで呉れたので熱をおかして室蘭まで出かけ、そこから芝浦まで大きな食糧入りのリュックサックを横において二晩夜をあかし漸く目的地についた。当時糸魚川君は横浜高商の校長であった。私はリュックをかついで横浜磯子の糸魚川君の官舎を訪れ、事情を話して泊めて貰うことにした。

糸魚川君は「そんな電報が行ったのなら多分大臣と面接することになるだろう。その髭と頭髪では失礼だから散髪に行ってこい」と云うのである。私は風邪のため髭も頭髪もボウボウとしていたのであった。私は彼の言に従って街へ行ったが、その日は折悪しく横浜中の床屋の定休日であった。私は帰って来て今日は駄目だから髭だけそって行くことにした、と云った。出頭日は明日に迫っていたのであった。すると彼は「よしそれでは僕が頭をかってやる」と云って二階の縁側の日当りのよいところで、首に風呂敷を当てゝチョッキン、チョッキンとかって、遠くから見たり、近くから見たりして「うん、これで良い」と自分でうなずいた。多分虎がりであったかも知れないが私にとってはどんな形になろうと彼の温い心に心中で涙の出る程有り難い思いがした。

果して翌日、文部省で安倍文部大臣にお逢いすることになり、校長の命を受けたのであった。私は糸魚川君に頭をかって貰った温い友情は死ぬまで忘れることは出来ない。これは彼の温かい友情の一つ丈けをとって紹介したのであるが、緑丘で結ばれた彼と私の心のつながりは互にこの世を去っても切れるものではないと固く固く信じている。

余談―その後糸魚川君に逢ったら笑い乍ら次ぎのような話をして呉れた。その後、間もなく長男の直輔君が学校へ行ったところ友達が真面目な顔をして「君のおとうさん床屋さんだったの？」と聞かれた相である。二階の散髪を友達が下から見たのである。勅任官を散髪屋と間違わせて申しわけない話である。

その直輔君も今は阪大の先生で猿の心理学とかを研究し一年の中半分位は山の中の猿を観察している。そして数年前には渡米して立派な業績を世に出している相である。

彼はお父様が人間に示したような温かい心を猿にまで拡げて立派な大学者になることであろう。

読者の声

小樽商大旧本館　正面建造物

移設存置運動について

過日、同期の鎌谷勤君と札幌市郊外下野幌団地の室谷賢治郎先生新邸に、新居拝見がてら先生を訪問、いろいろ歓談したが、談たまたま母校本館の保存問題となり、首題のような運動を提唱すべし、という結論になった次第である。

即ち

一、これまでに緑丘誌などに、たびたび、旧校舎を惜しみ移設存置すべし、という声があった。

一、新校舎完成の暁には、旧校舎はこれを破壊し、ただの廃材とするだけという。まことに惜しむべきことである。

一、昭和11年秋、天皇はこのバルコニーから、校庭における学生の野試合を親しく天覧あらせられた、由緒ある建物である。

一、明治建築の官立旧制高専の建物は戦災などにより消滅、現在は小樽以外にはない。故に「明治建築の高専校の建物を見たいならば、小樽へ来い」というぐらいにしたい。

一、せめて、正面玄関、バルコニー、塔屋、らせん階段、二階会議室などの最少限を残し、二階会議室には学校の歴史的資料を展示する資料館とすべし。

一、愛知県犬山市の明治村に移設してはどうか、との声もあったそうであるが、大変な費用もかかることでもあり、また同村には既に金沢の旧第四高校の講堂、札幌郵便局があり、学内に存置するのがよろしい。

故に右の移設は学園内にする。

◎これが実現の方法

一、緑丘誌を通じてキャンペーンしていただく。

一、緑丘会本部にこの問題をとりあげていただく。

一、緑丘会理事長に仮称「小樽商大旧本館存置期成会」会長になっていただく。

一、現校舎建築請負業者に移設の見積りをしてもらう。

一、緑丘会各地支部を通じて寄附を募る。

一、業者に格安に奉仕していただく。

なお「恩師マッキンノン先生をはるばるアメリカからお招きすることに、あれだけのことが出来たわが緑丘会、そして札幌藤女子大学の牧野キク学長より〝地の塩である〟と激賞を受けたわが緑丘会である。

同窓生諸賢に訴える！

これの実現は必ず出来ると堅く信ずる。」というのが、われわれ三人の一致した意見であった。

同窓のみなさま、どうぞ右ご検討下さいますようお願い申し上げます。

（昭一三　戸谷太通三）

尋ね人と「緑丘」

かねて「緑丘」誌上で尋ね人しておりました同期卒業生具島又喜君の消息を「緑丘」誌上で見たからといつて我々大正十二年会当番幹事田島正太郎君が本籍役場に照会して分かったからとわざわざ知らせて呉れました。それによると昭和三十五年六月二四日東京・浅草田中町で逝去されたそうでがっかりしましたが、でも消息が判明しましたので喜んで居ります。早速山梨大学の井上政次名誉教授にも知らせてやります。

それにしても御誌「緑丘」は実によく効きます。実は万に一つも希望は持たなかったのですが、溺れる者はワラをもつかむ気持でお願いしたのですが、こうもよく効くとは思いませんでした。感謝あるのみです。

（大一二　菅野祐治）

〝手塚寿郎先生の追憶〟を手にして

今回の「手塚寿郎先生の追憶」の編集は今日までにおける圧巻の最たるものであろうと私は信ずる。他にご自分としてのご本職をもちながら「よくもここまでに」との感懐は豈私のみならんや。その苦心、苦労の跡は全頁を通じてあふれでている感がします。

（大一一　四谷宗義）

早速拝見しまして、その出来ばえのすばらしさに感謝の気持で一杯になりました。佐々木周一理事長の序にある通りのなみなみならぬご苦労に改めて重ねて感謝の意を表します。今頃この値段でこんな立派な本になるなど一寸考えられない位です。

（大一五　西川正己）

この「追憶記」は偉大な経済学者としての手塚先生を、また人間味あふれる手塚先生の人間像を浮彫にするものとして、この上もない文献と存じます。

（森山書店）

恩師近況

戦歿学生慰霊のための平和記念塔の建設発起を喜ぶ

加茂儀一先生

十月五日の椿山荘へ出席のあと、翌日関西に飛び七、八日に大阪府知事、同市長中馬氏の肝入りで中島公会堂で世界連邦大阪大会を開き、千名以上の会員が集り、盛会でした。

八日夕、市長の好意で大阪湾を一周し、施設の見学をさせていただきました。明日（十一日）からまた茨城、千葉、石川へとまいります。

万国博では世界は一つの考えから大いに宣伝するつもりで、十一月は東京朝日新聞の主催で世界連邦の講演会を開きます。益々悪化していくこの世界情勢の中で、せめて人類のヒューマニズムだけは守りぬきたいと念願してすべてを犠牲にして戦っております。

私の主唱していた戦没学生の慰霊のための平和記念塔の建設が今度発起された由、私の願望の一つがここでもかなえられていくのを喜んでおります。

近くまたパリへ飛ぶことになるかもしれませんが、これもみな手弁当です。自分のためでなしに走り廻っていると案外疲れないものです。

緑丘余話

名残りはつきず

緑丘人のご親切に感謝しつつ

マ先生は日本を去る

八月二十三日、私が日本に着きました時、私はただただ浦島太郎のような気がすると申しました。けれども北海道に二週間余りも旅行し、なつかしい高商の教壇に立ち、関西、九州方面をまわり、日本国中の都市で同窓会が催され、大勢の昔の教え子達に会っている中に浦島太郎と大変大きな相違がある事に気が付きました。その相違というのは私の場合は玉手箱の蓋を取る必要がないという事を悟った事です。

どこへ行きましても私達は非常に情の深い、心のこもった暖かい気持で迎えられました。いろいろの思い出話をうかがっている中にこれ程までに皆様が私の事を考えていて下さったと本当に人間の情の深さに私達は感動いたしました。

その暖かいお心づくしは私の教え子達だけに限らず、隣人の方々或は子供達の同級生、或はただ「ロバのおじさん」として親しみを感じていらした当時のお子さん達が成長した現在、各都市でお会いし、お手紙を下さったりして、胸のつまる程心のつながりのふかい事を悟りました。

この美しい皆様の心、師弟愛、隣人愛の強さ、出来る事なら全国の皆様一人一人にお礼を申し上げたいのでございます。

日本を去る日が近かづき名残惜しい気持で一杯でございますが、こうして私達を日本へ招待して下さった緑丘会同窓生の皆様に心から感謝致すと同時に**私達は身体こそこの土地を離れても心はいつまでも皆様と共にある事をお忘れなく。**

アメリカにお出かけ下さるかたはどうか私どもの家へお立寄り下さるようお願い申し上げます。本当にいろいろ有難うございました。

ダニエル・ブルック・マッキンノン

このたびマッキンノン先生ご夫妻の来日、母校訪問ひきつづく各地の同窓各位との再会に関しましては全国の皆様の大変なお世話になりまして、誠にありがとうございました。お蔭様で、当初予定の行事も十月十二日をもって無事に終了致しました。先生ご夫妻は、その後もなお深まり行く日本の秋をたのしまれたうえ、去る十一月十二日夜九時羽田発、機嫌よく帰国されました。皆様にさようならをゆうのはつらいからと、いちいちのご挨拶はされませんでしたが、日本こそ、わが故郷と、くりかえし言っておられました。企画から事業実現にあたり、渉行係としていろいろ不行届や失礼のあったことをお詫して、ここにご報告とお礼を申しあげます。

昭和四十二年十一月二十日

「マッキンノン先生招待」進行係

大谷敏治　中島与市　神田正英

"苦米地先生はここに生きています"

勲三等瑞宝章伝達の日

マッキンノン先生にたいする勲三等瑞宝章伝達式は、十月九日午後三時、文部省大臣室で行なわれた。定刻先生ご夫妻は、令嬢リンコナさんを伴い、会員大谷氏に案内されて虎ノ門の同省、大臣官房人事課に姿を現わした。係官にみちびかれて、大臣室へ。入口で草野義一氏と一緒になる。大きな机のうしろに本棚、その横に日章旗。黒のスーツの劔木文部大臣が、立ちあがって固い握手。大机の上には、黒塗りの大きなお盆のなかに勲記と勲章の函。

やがて大臣が勲記をよみあげられた。「米国人ダニエル・ブルック・マッキンノンの功績を……」よみ終って勲章のはいった函をわたされもう一度握手。係官が蓋をあけて、さん然と光る勲章を、首にさげる。文相とマッキンノン先生、あらためて握手、そして劔木大臣はこう言われた「永年小樽高商、小樽商大のためにつくして頂いてありがたい、またバークレーで多くのお国の人や、日本からの研究者、学生たちに、いろいろ教えてくださって、日米親善につくされてありがたい。どうか体を大切にされて、これからもご尽力をお願いします」これに答えてマッキンノン先生、「勲章をいただいて光栄です。」文相「苦米地さんは、私もよく知っています、惜しい人を亡くしました。」マッキンノン先生、自分の胸をさして、「先生はここに生きています。」その後、大臣は、先生ご夫妻と、草野さんを交えて歓談しばし、そして記念撮影。秋の陽ざしが、大臣室にあたたかく流れる。やがて秘書官室でマッキンノン先生は受領書に署名されて伝達は終った。

草野さんの帰られたあと、先生は勲章をつけられたまま、文部省の大玄関に立った。ひとりで、また夫人と、記念の写真。在職二十有七年、心ならず追われたものの、いまこうして栄誉にかざられて立つ、その胸中はいかに。そのあと外務省儀典長室を訪ねて、礼を言い、さらに車をはしらせて、宮内庁へ。坂下門から参入して、玄関の赤いじゅうたんを踏み、記帳台に。紫の分厚い鳥の子紙の署名簿に天機奉伺、うす桃いろのは、御機嫌伺い。それぞれ英文でしたためて御礼言上。つづいて松の緑映える白い石垣を背景に、再び記念の撮影。この日秋の空はあくまでは晴れて風もない。もう先生が悪夢になやむことはあるまい。

ちなみに、今回のこの栄典授与には、実方学長はじめ佐々木理事長、草野義一氏の特別のあっせん、加地幸一氏、進藤孝二氏、津久井久雄氏らの厚い配慮があったことを報告せねばならない。

慰霊碑か 平和記念碑か 名称未だ決まらず

戦歿学徒の碑に関する常任理事会開く

十一月四日母校学長室で「慰霊碑に関する緑丘常任理事会」を開催。左の通りの結論を得た。

一、碑建立常任委員会を結成する

委員長　佐々木理事長
副委員長　実方学長
構成メンバー　緑丘会役員全員
各支部長
関係教授

二、別に実行面の徹底を期す為に建立実行小委員会をつくる

委員長　札幌緑丘会池田副支部長
副委員長（建立業務担当）
松尾教授
副委員長（募金推進担当）
植田常任理事（昭一六前）
会計　島谷喜明（昭一八）
構成メンバー　戦死者の率の高い昭一六―一九位の中から約二十名選出（在札幌の年度幹事を中心として）

三、今後の問題

①速かに小委員会の完成をまって碑の様式見積および募金の推進を両副委員長を軸として進めていく

②もちろん碑の計画については最終的には再度緑丘常任理事会ならびに建立常任委員会の承認を得てから実行に移す。

③碑の正式名称を決定する。

一、平和記念碑

二、緑丘戦歿卒業生慰霊碑

一、と二、とでかなり意見が別れた慰霊碑という言葉を使用することについては在学生に対する配慮から実方学長は難色を示し、一方当日集った若手卒業生は慰霊碑と呼ぶことを主張していた。

④碑の除幕式の時点のめどをつける一部には四十三年八月十五日案も出ている。

叙勲に輝く 緑丘三氏

昭和四十二年秋の叙勲

勲二等　瑞宝章　糸魚川　祐三郎（元教授）
勲三等　瑞宝章　君島　興一（大一一）
（元川崎汽船社長）
勲五等双光旭日章　上野　彦太郎（大九）
（記載もれがございましたら御知らせ下さい）

skin dew

朝と　お休み前に
5分間だけさいてください
スキン・デューに含まれた
天然の成分コラゲンが
あなたのお肌に
栄養としめり気を与え
1日中うるおいをたもちます

Paris・London・New York
Helena Rubinstein
ヘレナ・ルビンスタイン

食事をする間もない有様。

上村東京支部長乾杯の音頭

美青年といわれてテレる

伊藤整氏歓迎のことば

昭5、6、7合同でマ先生を箱根仙石原観光ホテルに招く

昭五、六、七年の有志二十六名はマッキンノン先生夫妻、リンコナ夫人、大谷先生を箱根仙石原観光ホテルに招き、北村幹事（昭五）は東京を午後一時出発してドライブ、五時ホテルに到着。

午後七時から開宴。北村幹事の司会で自己紹介、歓迎のことばをのべ日本各地の旅行の報告をする。

リンコナ夫人から挨拶あり、続いてマッキンノン先生ご夫妻も挨拶される。井藤氏（和歌山）の祝電披露があって、日英語交じりのジョークスピーチがはじまる。

終始なごやかな喜びと笑いの雰囲気の中に時間を忘れ、楽しい語らいが十一時過ぎまで続いた。

十日早朝富士の景観またよし、連日日本晴に恵まれ、マ先生を楽しませるに申分ない。朝食会は和食で解散パーティー。ここでマ先生ご一行と別れる。先生夫妻は早雲山ケーブルから湖の海賊船で秋の一時を楽しみ、山の上ホテルの昼食後東京へ。

六野先生再び立って思い出を語り、続いて伊藤整氏は「チャタレー夫人」など書いておりますと前置きしてあいさつ、続いて「英語に強くなる本」の岩田先生はマッキンノン先生と机を向い合わしていた仲、懐旧の情をこめて物静かに語る。

舞台ではアトラクションの奇術がはじまる。松旭斎静花姉妹があざやかな芸を見せてくれる。屋台のそば屋、すしや、サントリーコーナーなど入れ替り立ち替りで白いテーブルの回りの人々も動いていたがもう二〇〇人を超過する会場熱気で夏の夜を思わす。さすがのマッキンノン先生も椅子に腰をおろして奇術に見入っていた。九時もすぎた頃これらの人々は大きな輪になって校歌が椿山荘の大庭園にこだましていた。

大谷敏治氏の閉会の辞でこのマッキンノン先生ご夫妻歓迎パーティーを閉じた。東京支部未曽有の盛会。

リンコナ・ギルフオイル

東京都品川区小山七丁目三の二〇

父のうれしい顔を横からジッと見つめていますと、私までが胸が一杯になり緑丘会の皆様に対するお礼の言葉が何を言っても足りない気持です。本当に皆様は父のためになんと立派な事をして下さったのだろう。又父が長生き出来た事が何と幸せな事だっただろう。又たまたま私が日本にいてこうして二度と味わえないと思った父と一緒の旅が実現出来て私までが皆様の喜びを分ち合う事が出来る等、本当に感慨無量でございます。心から皆様にお礼申し上げます。日本語で思う存分表現出来ないのが残念ですが、私の喜びとそれにも増して父達の感激と喜びをお察し下さいませ。

マッキンノン先生招待費会計報告書

資金総額

寄附金	1,739,491	（内訳）小樽扱　583,000
利息	32,465	札幌扱　306,000
		東京扱　850,491
合計	¥ 1,771,956	

収支一覧表

詳細別記の通り

資金	1,771,956	
印刷通信費		158,691
旅費		37,600
先生小遣		50,000
御土産代		19,500
各地支出額		1,389,368
合計	¥ 1,771,956	¥ 1,655,159
差引現金残高		¥ 116,797

残金は緑丘戦没者平和記念碑建設資金に寄附いたしたいと思います。

各地区別支出額

	当初予算	決算	増減
東京	848,000	805,908	△ 42,092
北海道	331,400	285,760	△ 45,640
関西	114,000	117,000	3,000
金沢	30,000	30,000	0
九州	45,000	45,000	0
中国	30,000	45,000	15,000
中部	46,000	50,700	4,700
静岡	0	10,000	10,000
合計	¥ 1,444,400	¥ 1,389,368	△ 55,032

私信　マッキンノン先生の東京パーティについて

NI君、冠略

蓁目君が写真を撮らうとして、グラグラとあぶない椅子の上に乗ったので、俺はそれを押えてあげた。

大勢の同窓生が、旧師を囲んでいるので、後ろからでは、椅子に登らなければダメなのであった。

マ師の会に出席したのだが、俺はそんなことをしただけで、小雨の止んだ会場から帰った。

同師の、往年の日本引き揚げの事情などが、ドラマチックなものだったから、でもあるまいが、何十年も経ってから、このように、この人を招くという秀抜な企てをしたのは、誰かは知らない。俺は、その主旨の案内状を見て、指定された最低の拠出金を出しただけの、いわば野次馬であった。

東京での歓迎会は、それまでに各地を回って来、おしまいのもので、この老人は、大分、お疲れの様子であった。しかし、このような招きに応じて、やって来た以上は、こりや疲れても仕方のないことだろうと思う。それでも、昔のことを『アッそうだったな、マッキンノンの調子は、こうだったな』と回想させた。御本人の演説もあって、俺は何ということもなく感銘した。昔のことをこんな形で想出すというのは、良いものだったな。

この企画をした有志の方々に、俺は敬服の思いを抱いた。

商業学校の生徒が、卒業しての後は、ザツカケない銭勘定の生涯を行きながら、たとえばそれが、浪花節の浪漫であったところで、それはそれで良い。

商人（我々は、商人なのであるのだが）にも、ロマンチシズムの花が当りまへの事だが、ちやんとあったということ、その花の色を、今更しみじみと見たような気がする。

実はね、俺は、高商出なんで、物のあわれとか、風流には縁のない、丁稚小僧の大きくなったものなんだよ、というような、引け目を、それとなく覚えたり、口にしたり、たとえば、ちょっとした別な分野の人々と交はる時に、思はず、色に出ることなど、あるのだったな。

本当は、勿論そうぢやない。他の誰にも劣らず、花鳥風月を、本式に賞でているのだな、我々は。今回の挙に、大なり小なり参画した我々は大した風雅の士ではないか。俺もその中の、漂たる一人であったことを悦びたい。

マッキンノン師の息子さんと親交のある、文芸春秋のM氏は、私はこのような述懐を、先日新橋の呑みやで話して聞かせたら、彼は、固より部外者ではあったが、そうだ、そうだと答えながら、大したモンダなあと嘆息していた。

（昭二　中沢生）

開会を待つ緑丘人（椿山荘大広間）

夫妻歓迎パーティー

十月九日　東京支部　於椿山荘

十月五日雨曇りの椿山荘に午後五時頃にはマッキンノン先生に二十五年振りでひとめお会いしたいと続々緑丘人が集った。

六時前にはマッキンノン先生ご夫妻が見え、ロビーに少憩、上村東京支部長、佐々木理事長と挨拶を交わす。

緑丘編集部が京阪神合同パーティーや神戸支部パーティーの二冊のアルバムを持参してお渡しすると当時の模様を回想しながらご夫妻でながめておられた。次女リンコーナさんはせめて日のある中に椿山荘のお庭を見せて上げたいとの希望で小雨煙る椿山荘を興味深げに野口正二郎東京副支部長の案内で廻られた。

会場の大広間には六時にはもう六、七十名の同窓が集まっていた。六時半、大谷敏治氏開会のあいさつではじまる。ご招待の経過、八月二十三日に来日して以来本道はじめ、関西、北陸、九州、広島、名古屋、静岡までの歓迎パーティーのことなど話され、佐々木理事長はマッキンノン先生が苦米地先生のご発意で招待の実現を見たのであるがこれはマッキンノン先生のご人徳によるものであり、苦米地先生の御心労御努力また同窓諸兄のご協力を衷心より感謝する旨歓迎の挨拶をかねてお礼を述べられ最後にマ先生が英語教育を通じ日米親善に努力された功績により叙勲の事が同窓の草野、加地、進藤、津久井氏はじめ沢山の方々で今交渉中であることも附言された。

次に大野元学長は歓迎のことばとしてマッキンノン先生からのお手紙で心臓をいためられて大変弱っておられる事を知り心配していたが今度は同じ病気で私の方がフラフラになってしまった。幸いいま奇蹟の二人が此処に再会することを喜ぶと前置きして、戦争中マ先生宅へ隣組の一員として座布団や茶碗を持ち寄って集ったことがあるが何時もマ先生と一緒に登校した私に「戦争がはじまると思うか」との問いに対して「戦争など起る筈がない」と云った。それがついに戦争となりマ先生には大変ご迷惑をかけたことをここでお詫びし度いという。

小雨の椿山荘庭園を見物

六神パーティーアルバムに見入る夫妻

大谷敏治氏の開会の辞

佐々木理事長の挨拶

マッキンノン先生ご

また戦後文部次官田中耕太郎氏と年金の交渉に当りかっての功労に対して、その実現を見た最初の人がマ先生であり、この年金を皮切りに各大学の外人教授にも出すことができるようになったのであると語られた

大谷敏治氏の司会でマ先生招待の菅谷重平氏が、英語であいさつをする旨を紹介。所が私の英語では皆様がお判りにならぬでしょうからとやはり日本語で語られ、（一同どっと笑う）マ先生の計画には、苦米地先生、大谷先生が努力されたことに感謝の意を表し、マ先生は、緑丘の宝物であると賞讃。また日本の戦前と戦後の比較や学生時代の英語教育のことなどにも及んだ。

二人の歓迎のことばのあとマッキンノン先生胸をつまらせて短かく感謝のことばを答える。続いて八木勇平、野口正二郎両東京副支部は、花束、トランジスターラジオを夫々たづさえてマ先生ご夫妻に贈呈する。在京板倉誠氏ほかの祝電を披露し、東京支部長上村甚四郎の乾杯で開宴となった。

草野義一氏からマッキンノン先生へ勲三等瑞宝章が政府から授与される事が六日の閣議で決定するがその伝達が九日にある旨のうれしい予告があり、一段と高い拍手が湧いた。森正臣氏、蒔田栄一氏、マッキンノン先生のゼミナールの一人、重見多喜蔵氏など挨拶すればビールをつぐ手をやすめて緑丘人が囲む。蒔田氏は英語で「マッキンノン先生が髪があって美しい青年だった……」と語ればマ先生すかさず美青年のゼスチュアをして一同を笑わす。マ先生は

菅谷重平氏の歓迎の辞

花束、トランジスターの贈呈風景

ながら…午後一時過ぎ無事福岡入りしました。日活ホテル（東中洲繁華街）で休憩をとり、緑丘支部からの贈物「博多人形」を先生のお好み作品を選んで貰うことにしました。支部では、あらかじめ「春宵」という題名の芸者の立姿の作品を用意して居ったのでしたが、先生曰く……先生らしいジョークです。

「芸者は一人居るから二人も要らない」…夫人を指さしながらです、私も夫人もリンコナさんも笑いました。先生の好みで「弟の髪を刈っている子供兄弟」が選ばれました。エキゾティックな日本情緒溢るる作品です。知日家以上の先生らしい好みと言えましょう。

午後四時私の会社アンコール・ビルにご案内して、緑丘会員坂本芳弘（経理部長）、谷口真一君（四〇年入社、セールスマン）他、社の幹部にも紹介して固い握手を交はし、先生の来訪を心から喜び、敬意を表した次第でした。

「先生は九州は初めての旅ですか」の問に、即座に「ハンドレッドフォース」（百四回目）と答えられた。側のリンコーナ夫人が、何を言い出すか解らないから、かつがれないようにと笑っての半畳が入いる。先生はいとも真顔で、

「大正三年初めて日本に来た当時下関から週二回、門司の浅野セメント工場に英語を教えに一年余り通ったので、それを計算すると今度が百四回目だ！」然り先生のお答はオーバーではなかった。

社の外語出身の人事課長（六八歳）が日本での「老人の日」ナショナルホリデーの話から、ソ連に一六三歳の老人が現存して居る新聞記事の話など出た。

阿蘇にて

天草にて

熊本城を前にして

カ州のオークランド市と福岡市は姉妹都市で、そのオークランド市長と有志一行が十一月に十五人福岡市を訪問する予定を話すと、姉妹都市のことはよく知っておられた。

最後に「先生はこれからの余生を如何に過ごされますか」の問に対、リンコナ夫人が、なかなか難しい質問だと言われ、先生も姿勢を改めて、

「自分も七七才の老人だが、パークレー市には市長と十五人の委員から成る老人福祉委員会があるので、老人ホームの世話に奉仕する」と語られた。酒もタバコものまず摂生しておられる、アノ引き締った体格のマ先生は、この分なら百歳までは太鼓判と我社のスタフの下馬評でした。蓋し「性磊落、よく食い、よく眠る」これがマ先生の健康法ではなかろうか。而し禁酒、禁煙！

少憩後〝山の上ホテル〟にご案内、くつろいでいただき、入浴、今日の旅塵と疲れを落してもらいました。この夕、六時より福岡在住の十三人の会員による「ワーム・レセプション」を催し、主客最良の交歓、師弟愛の極致と誇称して憚らない時を過しました。この「ワーム・レセプション」でも、タバコをすすめても辞退して、その害を説き、酒も飲まずただ「イート・オール」の健啖ぶりでした。レセプションの挨拶は昔なつかしのゆっくりした英語でなされたので一同よく解ったことと思う。

「私の英語は判り易いから下手クソだ」「他の教授のは判り難かかったから上手だ」とよく当時の学生が批判したのを耳にしたが、自分はつとめて解るように教えたことを今も正

（二〇頁へ続く）

広島で 中国・四国地区合同パーティー

マッキンノン先生御夫妻を広島にお迎えしたのは九月二十九日の夕方でした。岩国の吉田弥之助氏（大七卒）の案内で、錦帯橋、安芸宮嶋の日本的風景を味われて元気な御様子で新広島ホテルに着かれました。

私共、中国、四国地区同窓会支部としては、先生を囲んで一夜昔話をしながらくつろいでもらおうと泊られるホテルで歓迎パーティをもちました。

先生はすこぶる上気嫌で、長途の旅行にもかかわらず今日集まった教え子たち一人一人と名前を呼びながら握手をし、席上では日本語と英語をまぜながら、小樽時代の想い出を語られ、中でも雪の坂をそりですべり下りたこと、当時の小樽の街並店の名前をスラスラ懐かしそうに思い出したり、小樽で知りあった人達が結構アメリカに住んでいること、なかでも傑作だったのは苫米地先生の想い出を語られた時の南京豆の話で、下関で先生がデパートに買い物された時「東京豆下さい」といったところ女店員がわからず、先生がこれですよと指さしたのをみて「それはピーナツですが…」と訂正されましたとおっしやった時は、爆笑の渦となりました。

パーティも和気靄々とすすみリンコナーさんの独唱「枯葉」もあり素晴らしい一夜でした。

先生の発言の中で印象深かったのは「自分はスパイ容疑者として帰されたのではなく、無罪がわかってから帰されたのであり、それをいっておきたい」と話されたことでした。新聞紙上にとりあげられた紹介記事が現在も尚、事の真相を正確に伝えていないことに抵抗を感じておられる御様子でした。

尚、当日は遠く島根県の若林周五郎氏（大十二卒）、今治の原島義美氏（昭二卒）はじめ、岡山より村岡英一氏（昭八卒）尾崎央男氏（昭九卒）和田益太郎氏（昭十三卒）の三氏も出席され、地元では前記、吉田氏、林雅己氏（大十二卒）等九名の同窓生の人達が集りました。

外に占部岩太郎教授の奥さんの占部きよこ氏、マ先生がカリフォルニヤで日本語を教えていた頃の生徒のトマス・T・アオキ氏夫妻（ABC動務のドクター）が特別に御出席されました。

前列左より　原島氏，吉田氏，アオキ氏奥さん，林氏，アオキ氏，マ先生御夫妻，若林氏，リンコナさん，占部さん
後列左より　狭田氏，上山，前山氏，尾崎氏，和田氏，渡辺氏，平木氏，赤谷，村岡氏，前野氏

小樽高商時代のテキストブック（原島氏持参）アルバム（林氏持参）にサインされる先生

翌日は、広島市内の縮景園、比治山をみて名古屋へと旅立れました。先生の今後の御健康を祈りたいと思います。

（赤谷記）

静かな庭園縮景園にたたずまれる先生御夫妻

「緑丘」刊行書品切れ案内

「緑丘」が刊行しています左の書物はいずれも品切れですのでお申込みをいただいても送附出来ませんので悪しからず。

一、「苫米地英俊先生記念号」二〇〇部限定版
一、「浜林生之助先生 追憶記念号」
一、綴込表紙

≪原稿送附上の御注意≫

「緑丘」原稿は一行十六字です。四〇〇字詰原稿用紙又は二〇〇字詰原稿用紙ご使用の節は下の四段をあけて御執筆下さい

マッキンノン先生はこはく丸（別府）が入港して乗船が開始されるや最後まで岸壁に残り、あと二分で出航というのに乗船するのがいやだというヂェスチュアーを示す。リンコナー夫人、マッキンノン夫人はすでに乗船した。

高橋正也君は赤・青・黄のテープを用意して三人に夫々数本を渡したが、マ先生乗船と共にタラップがおりて船は岸壁を離れた、テープを切る間もなく。マ先生は上甲板に上りさかんに別れの手を振った。船は方向転換を開始すると岸壁の見える甲板へ走って来るのが見える。下にはハンカチを打ち振る二人の夫人。遠去かって行く船からはマ先生のハンカチが力一杯振られていた。船は完全に尻を向けて走っている。マ先生の姿はもう見えないが白いハンカチだけがいつまでも振られていた。

緑丘会福岡支部

マ先生夫妻歓迎パーティー

（二二頁からの続き）

しいことと思っている」また、「大正三年初めて日本に来て山口県豊浦中学（旧制五年制）に英語教師として職を奉じた頃、生徒と九州へ一日旅行を計画したとき、外人である私を護衛するためと言って槍と楯を持ち出したりしたことは事実だが今昔の感に堪えない」との思い出話があった。

尚、此の夜閉会後、マ先生ご夫妻とリンコナさんは揃って、アメリカ領事館の友達を訪問されるなどの忙しさでした。

九月二十七日

今日は朝ホテルに行って、お三人と共に博多駅に向い十時A・M発列車で下関への三人と固い固い握手を交わし、手を振り合ってお別れしました。

今日（二十七日）午前中下関着、細川信四郎氏他下関在住の会員に迎えられ「山陽ホテル」投宿、夜は歓迎会が催され午後は亡き夫人の故郷である長府、豊浦を訪ねしみじみ往時を偲ばれることでしよう。ゆかり深い豊浦高校の校長や教え子とも懐しの再会をされる予定と語られました。

あとがき

もう一日あれば福岡市内や郊外太宰府天満宮など案内したかったのですが、次の日程があるので案内役として心残りでした。戦争さえ無かったらマ先生は当然日本で一生を過ごされたことであろう。此の度の訪日によって恩響を超え、戦後日本の発展を親しく見、日本情緒にひたり五十日間のランダム・ハーベスト（心の旅路）を楽しまれたことであろう。就中、日本全土に在住活躍して居る教え子達―緑丘会員に迎えられてその愛情にひたり満足されたことであろう。「会者定離」と言いますが、更にマッキンノン先生の寿（いのちなが）を念じて稿の結びとします。

営　業　科　目

日立商品
各種変圧器
各種電動工具
業務用ホイストモートルブロック
用電熔接機
電気品

日立汎用機
電送排圧縮機
各種搬送機械
ホイストクレーン
各種ポンプ
風機

日立冷凍機
各種冷凍機
各種暖房機
除温機ショーケース
冷機応用品一般
パッケージ型空調機

電気工事
冷暖房設備
低圧配電設備
高圧受配電設備
電気配電相談
各種工事設計施工

日本電氣機器株式會社

取締役社長　天野雅司（大正15年）

本　社　大阪市北区曽根崎新地2の50　TEL(361)8871～9
神戸出張所　神戸市兵庫区西上橘通り1の1　TEL(56)5306

前列向って右より　木村徹郎氏（T11）　馬場清義氏（S3）　リンコナさん　マッキンノン先生　マッキンノン先生御夫人
後列向って右より　谷口真一氏（S41）　畑信太郎氏（T14）　頭山禎介氏（S16）　萩尾英彦氏（T12）　矢野正郎氏（S12）　坂本芳弘氏（S16）　向田辰男氏（S11）　塩田正典氏（S11）　渋川光太郎氏（S4）　釣谷光博氏（S13）　諸岡栄氏（S7）

マ先生にお伴して

緑丘会福岡支部長　馬場清義

九月二十四日

車で福岡を発ち、その宵の別府埠頭にマ先生ご夫妻、リンコナさんのお三人をお迎えして、かねて予約の観海寺「杉の井ホテル」に師弟再会のよろこびを語り合いました。眼下に泉都別府の秋の灯、秋の湾を眺めながら。老師には曽遊の別府でもあり、一入今昔の想いに耽けって居られた様でした。

翌二五日（月曜）の朝は秋気の中を山々の紅葉黄葉を車窓に見ながら「九重高原」の山並みハイウェイをドライヴ、阿蘇五岳を登り中岳の噴火口を見おろし、秋晴れの天を見上げ、老師はご満悦でした。火口までの坂道を先生は常に先頭で私や運転手（会社の若いセールスマン）も、そのお元気ぶりに驚き入った次第です。

既に草もみじせる「草千里」の広野を賞でつつ阿蘇を下山、一路熊本をパスして天草五橋に到り点在する島嶼と海を綴る五橋それぞれの型と色彩のおもしろさを観賞し、我国架橋技術の優秀さに先生も感じ入って居られました。

熊本の「ホテルキャッスル」に安着しましたが、この日はなかなかの強行日程でしたが老師は元気で私のほうが却ってヘトヘトという有様でした。この夜は熊本在住の会員立石一郎氏、河内氏（天草町長）と晩餐を共にして師弟水入らずで昔話の花を咲かせました。

明くれば二六日（火曜）は快晴、水前寺公園に到り、日本代表的名園の美を観賞（水と布石の妙、湧き水の清冽無比）、つづいて熊本城を見物、老師は城のてっぺんより森の都と称ばれる熊本の市街を眺め、今日登った阿蘇五岳や、有明海を隔てた雲仙の山容に眼を移して名残りを惜まれる様でした。城の天守を降りられるとき階段の一つ一つを数えつつ降りきって一三七段と言っておられた。それ程に疲れを知らず旅をエンジョイしておられました。熊本見物を済まして午前十時、一路福岡に直行しました。

熊本城見物では、復元した城を飽かずうち仰ぎ、加藤清正のイマージネーション（計画・創造力）に感じ入り、幾度もイマージネーションの語が出ておりました。数々の宝物、遺物～細川家蔵に興味をそそられた様子でした。陳列品の中に鍵（かすがい）を見つけて「豆腐にかすがい、糠に釘か」と言って智家ぶりを発揮し、アメリカには「くさび」は無い。日本のカーペンターは頭が良いと賞められた。また、熊本にゆかりのある夏目漱石の「草枕」を語るなど、なかなかの蘊蓄ぶりでした。

福岡へ向う沿道田園のたわわに実る稲穂の中を、日本の秋色を楽しみ

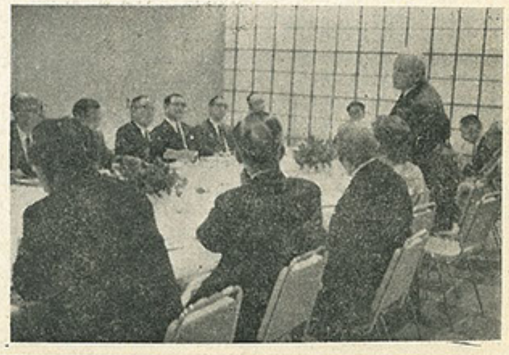
君ケ代・アメリカ国歌交歓合唱の
神―戸―支―部

九月二十二日
金沢から帰られた翌日、大木弘基氏（大一三）邸を訪問したマ先生夫妻を神戸支部長湊静男、幹事長本間広松両氏はかねて打合せの午後三時に同邸へお迎えに行く。神戸オリエンタルホテル一泊。

九月二十三日
湊支部長、水島弘氏（昭八）は神戸市木戸教育委員長と共に初秋の六甲をドライブ、白鶴美術館で静かに中国古代青銅器と鏡展を観賞する。
午後六時、緑丘会神戸支部歓迎パーティー。於オリエンタルホテル。中村賢二郎先生ほか十五名。
本間幹事長の司会でWel come Mr. McKinon の一声で開会。
まず湊支部長立って歓迎の辞をのべ「戦後新らしく生れ変った日本を見て帰っていただき度い。
神戸市とシャトルは姉妹都市であり、神戸市教育委員長が昨年シャトルを訪問の時、はからずも令息リチャード・マッキンノン氏に一方ならずお世話になり、その御恩返えしにもと本日六甲山の御案内をいただいた。本日は神戸支部の有志が先生をおしたいしてここに集ったので、なごやかな一夕をゆっくり過ごしたい」と。

マ先生は本間司会者の漫談をお願いしますという願いに答えて「マンダンは man 男です。小樽高商には三人の中村先生がおった。
中村和之雄 American Nakamura
中村賢二郎 Einglish Nakamura
法学の中村 Japanese Nakamura
」と本日臨席の中村賢二郎先生に当時の母校の状況を思い出させるかのような思いやりを示した後、マ先生が日本で逮捕されて第二交換船でニューヨークに入るまでの経過を語られた。
本日東京から来た二女リンコナ夫人もこのパーティーに参加され、「父が交換船で送られている時、アメリカで母の死亡の知らせを受けた。私は当時日本語の教師をしていたが、その日は早く家に帰るよう同僚の教師にすすめられたが、生徒は私に日本の国歌を唄えという。戦争中のさ中にあって、アメリカで君ケ代を私は唄いました」と、異国にあって母を失った時の憶い出を語った。
湊支部長は**京阪神支部からの贈り物**として、来神の記念に「母校の油絵」（墓目氏の描いた）を贈呈したい、とマッキンノン夫妻に告げ、記念品の贈呈を行った。
マッキンノン夫人は、このようにみんなのご好意にあまえて私まで日本にご招待を受けたことを感謝します、と英語でご挨拶される。
テーブルについて、食事中にラビットのことを話すと思い出したようにマ先生は「ここにいるリンコナにみんなの試験の点数をつけてもらった。リンコナも幼なかったから興味をもって協力して貰うように
もう少し勉強せよ　スクール
気をつけよ　ツリー
まだまだ（スロー）ラビット
と出来・不出来のA・B・Cの代りに判を作っておさせたのです」とウイットに富んだ所をチラリと解説。
リンコナー夫人に〝枯葉〟を唄うことを所望。フランス語と日本語を一章節毎に交じえて、のどのよい所を聞かせて貰った。
八家要氏（昭七）は学生時代の思いでを語って
『昭和四年一年C組のマッキンノン先生の最初の試験は、幾つかの質問を先生が口述し、その答を書いて出すものだった。三十四年前のことであるが、忘れ得ぬ第一問は
「私は何国人ですか」
であった。初めて聞く外人教師の英語に耳をそばだてながら、私は何のためらいもなく
You are a Scotch.
とやってのけた。次の日、講義に現れた先生曰く「先日の答案に諸君の中で私のことを〝ケチン坊〟（これは日本語だった）と書いたものがいます。」とのことである。よそごとの如くに聞いていた私は次の言葉に驚いた。
「私はAmerican であって Scotch ではない。Scotch とはケチン坊のことである……云々」から例の面白い漫談に転じて行った。先生のケチ漫談を怪我の功名で引張り出したのは私だった。』
という。
大阪高裁の江上判事（昭三）は軍教事件の憶い出を語り、軍事教練を一日サボル事に決めたが、その日はマ先生のテストのある日なので山上グランドから下りて来るなり明日は一日ストライキをするがテストだけは受けることを告げたらマ先生に激励された、など話すや思い出したかのように肩をすくめる。水垣敏正氏（昭五）は一九三五年アメリカで映画を見ていた時、ニュース映画の中にヒットラー、ムッソリーニが出て来た時に観客が指笛を吹きならしていたが、さすが日本の天皇陛下が現われると静かになった。アメリカ人というものは日本に対して独・伊とは異った感情をもっていたかも知れぬ。」と当時のアメリカ人の対日感情の一面を語り、終戦の予言のことにも及ぶやリンコナー夫人はケネディーの死を予言した女の方が居りましたと、予言物語にも話が及んだ。マッキンノン先生は最後に、本日の感激を次のように述べられた。
Though our bodies may return to America, our hearts will remain with you always.
名残りはつきないが時間も大部経過し、君ケ代とアメリカ国歌の交換で緑丘会神戸支部マ先生歓迎パーティーの幕を閉じた。

（出席者）
マッキンノン夫妻、リンコナー夫人
中村賢二郎先生、墓目緑丘編集担当
竹村蔚（大一一）、湊静男（昭三）、江上芳雄（昭三）、水垣敏正（昭五）、近藤恭成（昭五）、八家要（昭七）、本間広松（昭八）、室秀夫（昭八）、水島弘（昭八）、江口武雄（昭一一）、中川春雄（昭一三）、高橋正也（昭一五）、柳沢孝栄（昭一六）、堀尾茂（昭一六）
◎中井商店（八幡製鉄特約店）社長中井千代太郎氏特別参加

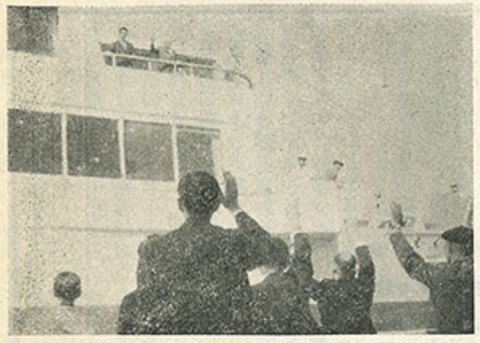


マ先生の挨拶

湊支部長挨拶

贈呈の油絵に見入るマ先生（神戸新聞掲載）

リンコナさんは枯葉を唄う



マ先生ご夫妻別府へ

先生神戸港から別府へ、船上から何時までもハンカチを振りながら

九月二十四日いよいよ京阪神の旅を終え、早朝八時四〇分神戸港を発つこととなった。雲一つない神戸の港からは六甲山系の山なみがくっきり浮かんで見え、一寸冷え込んだ朝であった。
港にはもう沢山の船が汽笛を鳴らし静かな油を流したような海の上を小波を立てて行き交っていた。
湊神戸支部長は二人の令嬢と共にマ先生夫妻、リンコナー夫人をオリエンタルホテルに迎えて第三突堤に姿を現わした。もう港には水垣、本間、高橋（正）、水島、中川、墓目、江上、黒羽、堀尾など緑丘人が見送りに来ている。

《名古屋金曜会》

A先輩へ

名古屋市昭和区伊勝町二の五三
劒物二三男

Aさん、あなたが名古屋を去られてから早いものでもう〇ケ月にもなりますね。Aさんを中心にできた名古屋金曜会はあいかわらず続いていますよ。全国でも、若手ばかりの緑丘人が集まる会を持っているのは、この名古屋金曜会をおいて、そういう意味からも改めて、ほんとうにいいものをわれわれに残していって下さったと、Aさんのこの会設立とその育成に払われた努力に対し深い敬意を表します。

左から（後）中島，黒川，木村，佐藤，加藤
（前）高橋，宮崎，剣物，加藤

さて、少しはなしは古くなりますが、今日は去る八月二三日の金曜日に聞いた金曜会の模様を出席者一同のカラー写真を添えてお知らせしたいと思います。

日本一暑いといわれる名古屋の夏も終りかけたこの日、一同は名古屋駅にほど近い大東海ビル地下の「香楽」に集まりました。今夜の幹事役の高橋氏の勤務先の拓銀駅前支店がこのビルにある事から、さしずめ幹事のホームグラウンドといったところです。この日は例月にくらべ参会者やや少なく九名でしたがいつものようにビールで、のどをうるおし、出される料理をつつきながら、めいめい身近なはなしに、あるいは想い出ばなしに花を咲かせました。三井建設の加藤氏からは、先日実方学長を迎えての名古屋緑丘会の会の模様についてのレポートがあり、特に学長の緑丘建学の抱負を一同泌みじみきき、はるか遠い小樽の母校の丘に想いをはせました。何とかわれわれでお役に立つことがあったら微力年らお役に立ちたい、より優れたる後輩の多数輩出されることを切望するという気持が一同にひしひしと伝わったひとときでした。また仕事と一諸にヨットでも相変わらず頑張っている東海銀行の佐藤氏からの、コラーサ号の鹿島郁夫氏との対談のレポートもありました。瀬戸で自営の陶磁器の輸出に、今や第一線でバリバリ大奮斗中の加藤氏からは、身近な船積書類の手続上のはなしとかあるいは銀行に対しての日頃のウップンなど極めて実感のこもったはなしがあったりしました。またこの日は新顔に三菱商事の中島氏も参加され、フレッシュなムードをかもし出してもらいました。そして近いうちに長崎大学あたりの若手卒業生と、旧商高系の卒業生同志としての合同ミーティングをしようじゃないかとか、若手の北大OBとの合同会をやろうじゃないかとか、いろいろなアイディアも出たりして、和気アイアイのうちにおひらきとなりました。この日の出席者は次の九名です。昭和三十三年卒宮崎芳郎（日本郵船）。昭和三十四年卒加藤利雄（自営）高橋実（北・拓）劒物二三男（リコー）三十六年卒佐藤充弘（東海銀行）加藤一幸（三井建設）三十七年卒黒川領平（太平工業）木村仁一（横河電機）三十九年卒中島俊夫（三菱商事）

Aさん、こんな工合にあなたがこの名古屋を離れても、金曜会は健全です。そのうちAさんをお招きしての会も開けたらなあと思います。

では、そのうちおめにかかれるのを楽しみにしつつ今日はこれにて失礼いたします。

八・二八　水害のお見舞いありがとうございました

佐藤正夫（昭五）

謹啓　ますますご清栄の程、何よりとおよろこび申し上げます。

さて、去る八月二八日の羽越集中豪雨による関川村（新潟県）の大洪水につきましては、早速お心のこもったお見舞いの品々とはげましのお手紙をたくさんいただきました。ほんとうにありがとうございました。

同窓各位のご芳情に対し厚くあつくお礼申し上げます。

ご案内の通り全村にわたり壊滅的大被害を受けましたので、当時は、全く孤立無援の有様で、食糧その他の緊急物資はすべてヘリコプターにより輸送してもらいました。

その後国道一一三号線も一本線ですが開通し、国鉄米坂線も「坂町」から「えちご片貝」まで通ずるようになり、村内もようやく落ちつきをとり戻しました。

しかし、未だに泥と流木に埋っている部落もあるのです。

全国から寄せられましたあたたかいご同情とはげましに報ゆるべく、村の一日もはやき復興に懸命の努力をいたしております。

今後とも何かのご指導を偏えにお願い申し上げます。

時節柄せっかくご自愛なさいますようお祈りいたします。

先は右「緑丘」紙上をお借りいたしましてお礼旁々ごあいさつ申し上げます。

敬具

帖佐猛君（大一一）の死を悼む

黒川吉雄

八月廿日の夜十時五十分心筋硬塞のため発病僅か五十分で急死されたとの知らせを受けた時は只呆然とするのみでありました。

帖佐君は大正十一年卒業と同時に北海道拓殖銀行に入行し累進して浦河支店長、函館支店副支配人の要職に就き金融人として将来を嘱望されたが大戦末期に期する処あって事業界に転じ室蘭木材その他各種の事業の経営を担当して縦横の手腕を振ったが必らずしも君の意図する如く進まなかったものの如く加えてその間にご家庭の不幸もあったりで君にとっては波瀾に満ちた期間であったがその間些かも弱音を吐くことなく常に明るい態度で終始されたのには密かに感嘆し敬意を表した次第でした。

超えて卅八年請われて室蘭信用金庫専務理事に就任後は水を得た魚の如く豊富な経験と卓抜な企画力とを発揮して着々業績進展の実を挙げて内外の信望と期待を集められ愈々之からと云う時に突如として今回の急変を見たことは誠に惜しみても余りある事で哀悼に堪えず謹んでご冥福をお祈り致します。

（四二、九、一八）

帖佐君を悼む

宮地邦介

彼は小樽在学時代小軀温順な学生だったので腕白者の私とはあまり親交なく卒業後もお互に絶えて音信なく僅に緑士会の消息誌（杉山昌作君編集）によって紙上見参していただけだったが昨秋十一月緑丘誌編集者墓目君が渡道、室蘭に立寄られた折栗林徳一氏の紹介で帖佐君と同席、たまたま私の拙著「はがくれ紀行」が話題となり、彼から其の割愛方を申込んで来た。もとより私は四十五年来の御無沙汰をお詫びし喜んで拙著を謹呈した。彼からは折返し御丁寧な御礼状を頂いた上、道名産の柳魚（シシャモ）が沢山届けられ懐しく味賞したことだった。全く恐縮の至りで早速御礼状を差上げたのは勿論だがこれが彼と私との音信の最初であり最後となろうとは夢にも思わなかった。このなまなましい追憶の橋渡をして貰った墓目君の好意は今となっては単なる偶然ではなく神仏の啓示の如くに感ぜられ、彼の悲報を聞いて驚愕と無常感に打ちひしがれ暫らくは部屋中をウロウロと歩き廻った。

憶うに彼の生涯は必らずしも平担な道ではなかったように聞いていたが晩年室蘭信用金庫専務理事に抜擢され天性の才腕を十二分に発揮されたこと尤より緑丘人の暖い血のつながりによるべきも一面彼の人柄と人徳の然らしむるところと推察している。

彼以って冥すべく只管その冥福を祈ってやまぬ。

私は悲報を聞いて早速御遺族の方々にお悼みの手紙を認めた。ややあって彼の二女服部佐和子さんから御礼状を頂いたがその文面には、「私は父猛の二女ですが、昨年ガス中毒に遭い夫を亡くし東京の病院で治療を続けておりました。六月十六日に退院し父のもとへ息子（二才九ケ月）と共に来まして二ケ月余り生活を共にいたしました。まだ中毒の後遺症が残っておりますので通院しておりますが父も私の病気を心配いたしてくれ私の頭痛がうつったなどと申したりしました。

何んとか親孝行をしたいと思っておりましたのにあまりにも急でしたので今もなお父と一緒にいることができたならと今は亡き父のことを思って涙の止まることがございません……」と書いてあり、彼もこのお嬢さんとまだいたいけなお孫さんを心に残して逝ったことだろう。人生流転とは申しながら全くお気の毒の至りである。このお嬢さんとお孫さんは目下叔父にあたる栗林忠平様方（室蘭市海岸町二丁目四の一六）に身を寄せられ今もって御通院中とのこと、ご再起を祈ってやまぬ。

彼の近影並に葬儀の写真は佐和子さんに送って頂いたことを附記しておかねばなるまい。

帖佐君の葬儀の模様

いもりぼりから車は能楽堂へ、宝生流の能舞台をみて、再び四高健児の碑の前に立つ、庄山、谷口、牧野氏等とこゝでわかれ、富岡氏が案内の上、車は金沢を午後二時半出立、車は加賀路を一路南へ走る。左手に白山連山、両側は早場米で名高い加賀平野の真只中を走る。小松の富岡邸の茶室で小休止、高校へいっているお嬢さんが薄茶をたてる。

英語の勉強は耳に手をたてゝ声を出してやりなさい。など熱心に語られる。こゝを出て車は今夜の宿泊、山中温泉の河鹿荘に午後五時到着する。四囲の静寂さに旅のつかれを存分にいやされた。先生よ、いつまでもご長命で尚一層のご健勝を祈り北陸路の歓迎記を終る。

マッキンノン先生御夫妻のお伴をして

昭四臨卒　栂　健

一、京都で

1 Wonderful arrangement

2 立　札

3 つくばい

4 中秋の名月

5 I can run

二、金沢で

A Perfect day

三、福井で

1 永平寺まで

2 瑞雲閣で

3 I can speak English little

4. 可愛いいちやないの

5. 福井駅で

6. お伴を終って

＝☆＝☆＝☆＝☆＝

一、京都で

1 Wonderful Arrangement／

かねて緑丘編集部から御連絡をいただいていたように九月十七日午後四時京都ホテルで日本新薬の小田島和夫氏と共に御待ちした。程よく東京から大谷先生御夫妻もお見えになったので「これは何とすばらしいアレンヂメントだ」と云っておどろきよろこんでいられた。私はこの時両夫人に始めてお会いしたわけである。

2 立　札

十八日は京都観光の日だ。待望の桂離宮の拝観が午前十時から許される。最初の拝観者は外人グループ約二十名が中心であり、案内係も英語で解説をし、質疑にも応じてくれた。丁度一時間位そぞろ歩きしながら造園の美をかんしょうした。この離宮庭園内ではどの地点からどの方向を眺めても立派な絶景になるように構築されているということだった。

この園内入口に「無断撮影禁止」の立札があったが、一行の中には写真をとる者がいたので先生はこの事が気がかりらしかった。係に尋ねると「よろしいです」との事だったので、その事を告げると「立札には禁止と書いてあった」とくりかえしていられた。しかしそれから後は、快く写真にも入ってもらえて安心した。

ところが今度は金閣寺の入口に「犬をつれて入ることおことわり」という意味の立札の前で立ちどまってしまわれる、何事ならんと傍へ近よって見ると「犬をつれて来た人は、こゝで紐をといて入ればよいだろう」と云って苦笑していられた。

3 つくばい

龍安寺では庭園と外界との境の壁がとても気になられたらしい。裏庭のつくばいの石が「吾れ唯足ることを知る」という文字の型にしてあることは今日の案内役をつとめられた日本新薬の神田氏の解説がなければ見落してしまったであろう。

観光ロードをドライヴしながら比叡山ホテル、展望台、根本中堂、大講堂を歴訪、大講堂の山路では、折りから降り始めた雨をさけるために

I am only seventy-seven years old, I can still run. といゝながら子供のようにはしやぎまわっていられる。後から奥様が「いつもこんな調子ですよ」と云った工合でゆっくりついて行かれた。

4 中秋の名月

雨上りの中秋の名月を、水音も清い鴨川べりから打眺めようとは、しかも豪華な衣裳につゝまれたあどけない舞妓の祇園小唄や紅葉の舞のアトラクションを加えて、それこそ今月今夜のこの月は終生忘れることがないであろう。

5 I can ran

十九日午前八時三十二分は金沢行特急白鳥が京都発の時刻だ。私は八時から駅でお待ちしていた。やがて森下社長も見えた。ところが先生達の姿が二十分になり二十五分になっても見えない。二十八分になってやっと車が見えた。幸い一番ホームだったので走りこんだ。この時御夫人のことが気になったので手を差し出したが I can run. といゝながら馳けこまれた。考えて見れば小男の私の手では却ってじゃまになる位だったのかも知れぬ。とにかく、古い都へのあわただしいお別れだった。

二、金沢で

1 A perfect day

予定通り午前十一時五十分、金沢駅着、ホームでは石川支部の方々とのなつかしい対面。暫らく休憩の後市内散歩、前夜の雨に洗われたためか卯辰山の松の緑、青い空はサンフランシスコのそれとそっくりだった。帰り道で旧四高校舎に立ちよった。おそらく一番なつかしまれたのは、この建物だったであろう。あそこには寮があった。あそこには何が建っていたと次々に思い出されては足を止められる。その当時に縁もゆかりもない現在の管理人にまで言葉をかけ挨拶をしていられた。リチャードの学校、それが自分の学校でもあるかのようであった。リチャードが不本意ながらこゝを強制退去される時、配ぞく将校が涙を流して云ったそうだ。「こんな仕打ちになったのは政府同志のやり方の相違の結果だ。日本人のすべてが、それに同意しているわけではない…」これは先生から聞いていた話である。

赤いレンガの旧四高校舎にただずんで正に感慨一しお深いものがおありのことだったであろう。（因みにこの校舎は目下郷土博物館に改装の工事中であった）

この散歩を終られてホテルに入るとき、夫人はつぶやいていられた。

This is a perfect day／

三、福井で

1 永平寺まで

十七日京都でお会いした時に「永平寺のことはリチャードから聞いて知っている。一度訪ねて見たい」とのことであった。十八日鴨川を車で渡っている頃西陣織りの話になって夫人は「織物の製造工程は見たことがない」と云っていられたので「何れ適当な所を見られるように心掛けましょう」と申上げておいた。そしてこの機会に是非共この二つの希望実現のためにも福井へ立ちよって貰らいたいと思い、「白鳥」の車中で excellent manager である大谷先生の御力も借りてプログラムに組入れていただけることになった。

今日二十一日はまさに、この事が実現する日である。私共は一家総動員で早朝からお待ちしていた。ところが山中温泉出発が予定より三十分おくれたことゝ、福井まで三十分位と思っていたのが約一時間かゝったので予定より一時間おくれて到着された。従って一服していただく暇もなく、あたふたと永平寺に向って車を走らせることになった。それでも狭い屋敷を一まわりされて、先生を最初のゲストとして迎え入れたいと思って工事に取りかゝった一室がまだ未完成のまゝなのも見とどけて下さった。

車中では一九二九年の私共の卒業記念のアルバム等を中心に、先生も小樽の往時を偲んでいられた。永平寺着は十一時半だった。

2 瑞雲閣で

こゝでは嘗ってリチャードを案内したように一泊して早朝の勤行を見ていただきたかったが、それが出来ぬので、せめて雲水の精魂をこめて調理した精進料理を召上っていただきたいと、前日お寺へお願いをしたが只今御祥忌前で多忙のため「一切の賓客をおことわりしている」との事であったが、マ先生の事なら新聞でも読んで知っているからというので、到着時刻も十一時半までと指定されて受け入れていただくことができたわけである。

永平寺で

瑞雲閣の一室における精進料理としばしの憩いとはおそらく先生御夫妻には二度とない清遊となったことであろう。給仕の雲水君から、雲水の禅林入学手続き、修業カリキュラム、修業後の処遇、進路など様々と質問をしていられた。そして桑港では自分は「老後対策委員をしているのでし」と附け加えていられた。

3 I can speak English little

食後程なく黒衣のうら若いニコヤカな雲水君が現らわれて Good afternoon／I can speak English litte, but I'll try to guide you…と案内を始められた。法堂、仏殿、山門、僧堂、食堂、浴室、東司を七堂伽藍という、これは大陸から伝来した様式で、現在日本でこれだけ揃っている所は余り多くないということだった。十三時半、こゝを辞去するに際して、この雲水ガイド君は「自分からのプレゼント」だと云って "Eiheiji Temple" なる写真入り英文ガイドブックをお二人に贈ってくれた。お二人も、この若々しい生き生きした爽やかな物腰にはすくなからず好感を持たれた様子であった。

4 可愛いいちやないの

織物王国を自認する福井ではどうでも、織物工場をオミットするわけにはいかぬ。それに御夫人の御希望もあったので近郊の織物工場へ案内した。こゝは主として輸出用の室内装飾織物を生産している所である。さすがに工場内で御夫人の質疑がつきなかった。この工場の若い従業員は通信教育をうけているので一言英語でしゃべって貰うことにした。教室へ入られるとすぐ I'll tell youa story. Here is a window. Here is an old man. としゃべりながら黒板に画をかいて行かれる。……ところが残念、話途中で時間切れになってしまった。そのまゝ教室を出られて、顔を紅らめて「可愛いいちやないの」と叫んでいられた。

5 福井駅で

福井駅へ向う車の中で今度は夫人がこの働らきながら学ぶシステムに興味をもたれたらしく次々に質問をしていられた。丁度発車十五分前に福井駅着、奥出君（昭十七卒）が待っていてくれた。

"I hope, Mr Toga, You will come to San Francisco with your wife." "I hope so, too"

これがお別れのごあいさつだった。

十五分延着の「雷鳥」が到着すると、小松から乗車された大谷先生が停車を待ち兼ねた様子で車の出入口に飛んで来られて、御夫妻を指定席へ案内された。

6 お伴を終えて

京都、金沢、福井のお伴を終って何の事故もなく予定通りに、いやそれ以上に立派に遂行されて、こんなよろこばしいことはない。

そして各地の同窓各位が示された母校愛、師弟愛には深い感銘を新らたにした。それにしても、マッキンノン先生御夫妻が御高齢を意とせず、予定通りに行動されたことに対しては、「本当に御苦労様でした」と御礼を申上げたいと思う。

それから車の乗り降りや、雨傘を手伝ったりしながら、直接にこの身体で感じた事は、先生の腕は細いが御夫人の腕は太い方だった、ということだった。そして今もその実感がこの手になつかしくよみがえってくるのである。

語りかける者、もう四十年前に帰って悪童善童ムードが満溢している。

会場の入口には大きくマッキンノン先生夫妻歓迎緑丘会の立て札がばらの花に映え、大きくロの字型に並べられた席の窓越しには加賀百万石の夜景がひろがる、先づ当番県の牧野石川支部長より先生ご夫妻歓迎の挨拶がのべられ、次いで山口福井支部長より私は在学中レッスンは不勉強であったので、どうか今日は三十分でも一時間でもレクチャーをお願いしたい、先生の大きな歩調は変りませんねえとユーモアたっぷりの挨拶、更に飯野富山支部長より富山在住の緑丘同窓の会員名簿を読み上げ私ら三人が代表して先生の許に馳せ参じたと挨拶、大谷氏より、先生夫妻をおむかえした経違と北海道各地の歓迎模様を話され、愈々先生のご挨拶が始まった。一瞬しーんとした中で、"Kanazawa is very dear"

四高健児の像の前で

張りのある昔日のレッスンと何も変りない語調で一語一語感慨深げに話し出される。会場の方しろに黒板が欲しかったなあと思う。

リチャードマッキンノン氏のことや、長女のこと次のお嬢さんのこと緑小学校から庁立高女へやろうとしたが断髪が気に入らず私立の処へいれた。今は何をしている等、先生をとりまく近況を語られ（以下別欄参照）傍らの夫人を抱くようにして紹介され、再び今日金沢へつくなり四高、卯辰山を見物してきたが、なつかしさで何とも言葉でいい表されぬ郷愁である。今日皆さんに再びまみえ私も本当に嬉しいと三十分間に渉りレクチャーがあり、万雷の拍手の中に席につかれた。そこへビールが注がれ、全員起立、先生の歓迎と長寿を祝し、併せて母校の発展を祈り乾杯、次いで令息リチャード・マッキンノン氏の四高の保証人であった小松市の富岡専次郎氏（大一〇）を皮切りに一同、自己紹介をかねマッキンノン先生とのふれあい想出を交々語った。

机をのり出して先生／と先生の著書を手にしてくる者、絶句する者、先生の自宅へ入りびたって戸棚の中まで手をつゝこんだ者、先生の宅で盃を出され裏にマッキノと署名入りのいわくをきかされた者、平尾教授に頼みこんで首尾よく金沢から小樽へ進学した強者英作文の出題の木魚、茄子、胡瓜、になやまされなつかしがった者、肉といふ字をとびとびにかゝれて〝にくらしい〟と読まされた者、先生の地獄坂の上り降りを子供心にみていた者。先生のこと

《心暖まる金沢の一夜》

夜五時から都ホテルで、金沢・福井・富山三支部合同の歓迎パーティが開かれた。総勢二十一名。真っ白い布でおおわれた卓上に、北国に珍らしいバラの花が紅をほこり、明るい灯のもとに、レポーターのシャターがなりつづける。参会者の自己紹介、先生についての思い出ばなしひとわたりの後、先生の言葉。

「小樽は私に、いちばん思い出が多い。長府の土地もなつかしい、そこは私の最初に日本に来た土地、そして尊敬する乃木将軍の生れた土地だから、しかし、この金沢も私には、貴重な土地である。ここの旧第四高等学校に私はひとりの男の子リチャードを入学させた。四年の時受験に連れてきた。美事失敗。次の年、どこを受けるかと訊いた、四高！ また受けた失敗、三度目、首尾よく合格、入学式につれてきた駅頭に、汚い格好の若者達、よれよれの袴、あついぼうばの高足駄（高あつば＝マッキンノン先生はおぼえていた）袖のちがれそうなかすりの着物。いまならフーテン。しかし、その心のきれいなこと、優しいこと。私はここにいる富岡さんを保証人にたのみ、庄山さん（昭三、英語臨時教員養成所出）をお友達に頼んで、安心してお任せした。リチャードも強制帰国させられた。ハーバードに学び、文学博士の学位をとり、今はワシントン大学の日本語日本文学の主任教授、日本にも何遍も来た。娘も、長女ベッティは、戦後二度来日し、貴重な日本研究の図書文献をバークレーの大学のために集め、今は、同大学の先生と幸福な結婚して、自分の近くに住んでいる。子供がひとり。次女リンコナは、エール大学で日本語を七年も教え、いまは結婚して日本にいる、夫は某日米合弁会社の駐日代表重役である。自分はあの日、教壇から連行された、札幌で判事さんは、皆さんにやってもらったあの宿題のノートブック、写真を貼りつけて、英語の質問や答をかいてもらったあのノートが、けしからんとゆう。それから横浜へ、転々とうつされ、三年目に、第二回交換船でかえされた。香港、上海、そしてポルトガル領のゴア、そこで帰された日本人と交換、それからアメリカを廻って、ブラジルのリオ・デ・ジャネイロ、そしてニュー・ヨーク、八十二日の長いながい旅。その船の中でこの、隣りの人と毎食事ごとにテーブルが一緒であった、相寄る魂。ニューヨークには、さきにかえされた三人の子供が迎えてくれた。

次女リン・コナの誕生日―それはエーグ・リンカーンの生れた日であるが――にその日、娘が、パパ、私にこのヘーゼルを母と呼ばしてほしい、といった。そして二人は結婚した。なつかしい日本に戻ってきて、大学で講義や授業もして、そしてこうして皆さんに会えて、いまは、もう忌はしい記憶、いやな思いは、なんにもない、ただうれしい、ありがとう。」先生ご夫妻の長寿と繁栄を万才で祈って散会したのは八時半。北の国の秋も、ほのぼの心あたたまる一夜であった。

（大谷敏治記）

は伝説的にきいているという最年少者、花園公園でロバにのった先生をなつかしむ者、西田氏、卜部氏、そしてR・マッキンノン氏の赤ふんどしに繋って高商プールで泳いだ者、小樽はニギナカな処と先生口調で云い出すもの、了いには先生失礼ですが、おいくつですかという者まであらわれ、先生はさかんに米寿の前の七十七の喜寿を英語で説明される。就中その模様を老年、壮年の二人を抽出し当日の話を綴ると。

（左より）神沢、飯野、マ先生、山口、富岡

神沢重治氏（大十一年）

（北陸銀行取締式、北陸代行社長歴任、現在砺波市教育委員長）

〝先生／ リヤードマッキンノンさんと先生が四高をえらばれたことは全く卓見であったといえます。あの四高の赤煉瓦建物は富山の佐藤工業が明治期にたてた潔作であり、石川県金沢市とも有識者各位はすべてその面影を永遠に残そうとして大そう大切にしているものです。今日三たび先生が金沢の街を訪れ、四高を訪ねられ明日もう一度行きたいと仰言る胸中は私どもにも判るようです。徳川幕府第一の大名前田百万石の城下町にふさわしい四高はご子息の心のふるさとであり感慨いか許りかと存じます。

あのいまわしい開戦のあの日から時移り再び春がめぐってき大平洋が文字通り大平の海として先生と私たちの心の連りを保っていることは極めて幸せなことと思います。最後に、先生のお名前のマッキンノンを日本字で書くと、松、金、ノンであり松はおめでたい松竹梅のパインであり、金はゴールド、ノンはノンストップで、誠に慶ばしいお名前であり先生がいつまでも長生きされることを心からおいのりいたします。

黒木敏雄氏（昭十五年）

（東洋経済新報金沢支局長から酒伊繊維工業に招かれ現在会社管理部長、染色便覧に染色の原価計算等かきまくっておられる）

〝マッキンノン先生、失礼ですが、貴方はスコットランドの出身いやご先祖の方はスコットランド生れでないでしようか〟〝YES〟

いやこんな失礼な質問をしましたのは他でもありません。私が昨年渡欧しましたとき、Mc という名がスコットランド地方で極めて多かったからです。私などはさしずめポリネシヤ人の先祖をもっているのではないかと思います。最近読んだ本で「子供は父親と母親から生れる――その父親と母親はそのまた父親と母親から生れるとこうしてジエネーシヨンを20世代遡って参りますと祖父は約一〇四万人になる」キリスト誕生のとき全世界の人口が二億人といわれておりますが人類の生存の歴史は五万年前とすると案外私もスコットランドの血が流れ先生と同じ祖先をもつともいいうる。そういった親しみで今日先生と再会出来、本当にほのぼのとした明るさを感じます。どうぞお元気で、再度三度、ご来沢下さるようお壮健で――

宴はたけなわである。北陸一の酒食料品問屋専務の谷口氏の寄付のビールがポンポンとあく、最後にレディイラーストの日本原則によりヘーゼル夫人がたちにこやかに "I thank you very mach very very mach for your warm Leseption" と謝辞をのべられ、今野武君（昭三八）のリードで一同緑丘校歌を斉唱、声高らかに健腕いだく五大州の歌声が加賀のお城にこだました。次いで今日の先生との感激の対面、先生への謝辞を差上げた処、先生も本当に満足気に大きな声で差上げた辞を披露され、最後に飯野富山支部長の発唱で先生のご健康と母校の発展をいのり万才を三唱した。ときに午後八時、名残りはつきず大谷氏よりの母校各恩師の消息等をきいた。

九月二十日朝、都ホテルへ迎えに行く、とても良い部屋でぐっすり眠ったよと元気におりてこられる。金沢の守護神である前田利家公をまつる尾山神社へ詣で兼六園内成巽閣へ案内する。谷口氏と共に写真をとったり中日新聞の記者に応待したり、特別にお願いした案内人に従って書院造りの建物に入る。金沢の巽の方角にあり、前田家代々の護主の鎧かぶと、衣裳等に先生夫妻は感歎されている。一巡絵葉書など差上げ門前に出ると、牧野支部長等が遅れた遅れたと迎える。兼六公園の案内は、〝公園を良くする会の事務局長新蔵正氏に願う。空は澄み、常盤の緑に映えて秋の兼六園の風情も一入である。

〝幽水、宏大、眺望、人工、水泉、蒼古〟の六勝をとって白河楽翁が名づけた公園内を一木一草に至るまで説明がある。マッキノン先生夫妻も全く熱心で、私は時間のおくれるのを気にしながらも、望湖台、雁行橋七福神山、根上りの松、霞ケ池と案内をする。最後に芥川龍之介が物をかいたという小亭でしばし足をとどめ、RMC氏と同級生の待つ園内の三好庵に至る。

緑から見おろす泉水滝の音がひびく、由緒ある茶席では美しい令嬢の着物姿が古風な、中に色どりをそえる。話は令息マッキンノン氏につきる。

一時半車は石川門から城内に入り金沢大学（前身四高）の本部に立寄り歓談、枯れかゝったすゝきの合間に、三十間長屋の土塀跡がみえる。

声

（朝日新聞声の欄から）

〝ロバの先生〟に感謝

お世話になった娘とともに

奈良県・斉藤亮子（主婦・40）

中学二年の長女が、級友と法隆寺へ行ったときのことです。日曜日なので、大ぜいの観光客の中から外人を見つけて、英会話の勉強をするのだ、と張切って出かけた娘が、お昼すぎ顔を紅潮させて帰ってきました。はじめて声をかけた米国の老紳士が、とても親切にお相手をして下さった上に、並んでうつしたスナップを学校あてに送って下さるのだそうです。

同行の日本人の方が「こちらは私の恩師です。新聞にこの方の記事が出ていますよ」と、おっしゃったそうなので、さっそく新聞を買ってきました。それをみて驚いたのは、偶然娘が声をかけた老紳士とは、本紙の「青鉛筆」にも紹介された〝ロバの先生〟として慕われた、元北海道小樽高商の英語の先生、マッキンノンさんでした。

太平洋戦争のさ中、スパイ容疑で強制送還された先生を、全国の教え子たちがポケットマネーを出し合って日本に迎え、二十五年ぶりになつかしい師弟の対面をしたという、この心暖まる新聞記事を切抜いて、娘は写真といっしょに大切に残しておきたいといっております。

たどたどしい娘たちの呼びかけに心よく応じていろいろとご親切にしていただいて、ほんとにありがとうございました。先生が、死ぬまでにぜひもう一度行ってみたいとまで切望なさった日本も、いよいよ秋本番。教え子たちの暖かい思いやりに合わせて、深まりゆく日本の秋を、心ゆくまで味わって下さい。いつまでもおすこやかに。〝ロバの先生〟ありがとう。

この新聞記事を見て大阪支部から歓迎会のパンフレットと記念品も添えて送りました。

☆　☆

柿の実も色づき、平和なここ斑鳩の里にも秋が深くなってきました。

この度は、朝日紙〝声〟に投書致しました拙文がお目にとまり、本日は又、貴重な記念品をお送り下さいまして、有難く厚く御礼申上げます。

同窓会の方々のなさいましたこと大変にご立派なことで、日本人の心意気のようなものを感じ、うれしく存じました。サンケイ紙、十六日は朝刊でマ先生歓迎パーティのご様子くわしくご様子くわしく拝見し、師弟の情は幾年経ってもかくありたいものと、尊いご教訓を頂いたような気がいたします。

マ先生も、なつかしい北海道の山や川をごらんになり、また日本の各業界の第一線で立派にご活躍の教え子の各位に再会されて、さぞ御満足のことと、そのお喜びのご様子が空港でのメッセージの中にあふれているようですし、〝ロバ〟にまたがった若き先生のお姿、大変ほほえましく拝見いたしました。

新聞で皆様方のことを拝見いたしましても、そのまま見すごしていたかも知れませんのに、法隆寺で、娘がお目にかゝったこと、また、私の投書がお目にとまり、このパンフットを、お送り頂けたのも、何かのご縁かも知れません。

同窓会の方々が、マ先生をお忘れにならないように、私も娘も、先生のお名前と皆々様のこの度の美しいお話は、いつまでも忘れることは出来ないと思います。

娘は、英語をしっかり身につけて将来は、それを役立てるような仕事がして見たいとのこと、英会話も上手になって、法隆寺を訪れる外人の方に、お寺の説明をして案内して差上げたいと申しております。

色々とありがとう存じました。マ先生はじめ、同窓会の方々にもよろしくお伝え下さいますように。御厚志のほど、大変うれしく、御礼申上げ度く、乱筆にて失礼いたしました。娘とともに、厚く御礼申上げます。

十月六日

斎藤亮子
恵津子

斑鳩の里　法隆寺

喜寿の祝のマ先生

（写説説明）
（前列左から）
山口　秀雄（大12）　神沢　重治（大11）
六谷　敏治（大10）　ベーゼル夫人
マッキンノン先生　飯野　直義（大10）
牧野　茂（大12）　富岡専次郎（大10）
（中列左から）
栂　健（昭4）　庄山　隆吉（昭4）
八島　勝己（大14）　佐藤　良二（昭20）
谷口　博夫（昭3）　亀井　裕（昭24）
（後列左から）
清水　淳（昭17）　奥出　博（昭17）
黒木　敏雄（昭15）　上野　誠二（昭25）
今野　武（昭38）

マッキンノン先生を北陸に迎える

昭24　亀井　裕　記

九月十八日、昨夜の雨もカラリと上り北陸路には珍しい澄んだ秋空である。特急白鳥号はすべるように午前十一時五十分到着、ホームに出迎えた牧野支部長（大十二年）富岡専次郎氏（大十年）谷口博夫氏（昭三年）と降車口に駆け寄る「ご機嫌よう！」とホームに降り立たれた先生夫妻、明治人の出迎え三人とも眼にウッスラと涙が光り先生の眼もうるむ。

大きなトランクを持とうとした私の肩に温い両手がおかれる、思わずジーンとしてくる。固い固い握手、三〇年前の先生が少しも変らぬ愛のまなざしでこゝに立たれる。すぐ駅頭の都ホテルへ、同行された大谷敏治氏（大十年）と栂健氏（昭四年）と共に、取り敢えず旅装を解いて貰う。さぞかし準備されたであろう牧野支部長らの英語の歓待も途中でつまってしまう。STOP／ご苦労様でした。どうか日本語でと相変らずユーモアたっぷりの声にしばし笑声がロビーに響く、スケジュールを、大谷氏と打合せて、昼食、先生は一刻も早く令息リチャード・マッキンノン氏の学舎四高を訪れたいらしい。

一時半、会社の車二台に分乗、泉鏡花の碑がある天神橋から卯辰山へ遠く内灘の浜から日本海が、そして加賀百万石の城下町のたゝずまいが眼下一面にくりひろげられる。徳田秋声の碑のあたりで車をおりたち松林をしばし歩む先生、ようこそきていただいた。卯辰山は一名、夢香山ともいう、先生の感慨もいかばかりかと思う。写真をとったり、松林を歩いたりして、小坂神社の方から降り車は緑の街並みを一路四高へ、赤煉瓦の明治の建物はそのまゝ街の中心をなし、じっと見つめつづける先生夫妻に長い木蔭が重なる。四高健児の像の前でスナップをとり、四高の管理人と二階の資料室へ、幾多の俊才を輩出した、この建物は県市でも佐藤工業KKの手になる歴史的建造物として大切に扱っている。あの忌わしい年の十二月八日、リチャド君もこゝから連行され、交換船で帰国させられたのである。昔の校庭は昨年中央公園として多くの老木の下は一面芝生、二〇〇米ほど離れて合同庁舎の六階建がしょうしゃな姿で新旧の対照をみせる。草むらには秋の虫の音もする。名残り惜しそうに四高を出て都ホテルで休息される。

五時、都ホテルのロビーは緑丘生が次々と集ってきた今日の歓迎同窓会は富山から五名、福井から六名、地元から十名の二十一名であるが、五時二〇分欠席は三名で始めることとする。ロビーにおりてこられた先生を一斉にとり囲む、どこかのレポーターとカメラマンがシャッターをきる。先生は一人一人にうなづき、夫人は師弟の交換風景をじっと眺めておられる漸く加賀路におちる夕陽は茜色に歓談のひとときをてらす。「どうぞどうぞお年寄りの方は前の方のお席へ」と記念撮影を了る。出口で黒木氏より「亀井君今日だけはお年寄りという言葉は慎めよ」と注意される。成る程白髪の先輩もやゝ前かがみの先輩も全くステューデントムードで早くも同窓会場入場前に廊下で先生の手をとるもの、夫人に

京都支部

9月17日～18日

古都の秋

桂離宮を訪ねる

九月十七日夕京都ホテルにマ先生を迎うる記

今日はマッキンノン先生が大阪よりあり奈良を経て入洛される日である。私は森下京都支部長の代理として先生をお迎えすべく京都ホテルに向った。

夏、渡米の際、サンフランシスコのシェラトン・パレスホテルで先生のお元気な風ぼうに接しさいてい福井嘉一氏と一杯かけつつ梅かに再会できる機（昭四）ら緒に今やし待（大正十三）午後四時頃、大木氏（昭四）と一緒に遅れて梅子夫人、大谷先生の先導でマッキンノン先生夫妻が御到着になった。御夫妻、大谷先生、生夫妻がお疲れの御様子も変らず、先生は御元気で相変らずお抱きあって再会を喜んだ。氏は肩を姿にはお感激した。早速ホテルの二階ロビーで、ユーモアに満ちた先生の過のお話し、中心の一時間、御休息にしたお話し、明日の御案内を楽しいたのしの、京都打合せをめ、簡単にして五時に別れを島記）

桂離宮にて（左から大谷先生夫妻マ先生夫妻梅氏）

前日の奈良観光に引続き、マッキンノン先生御夫妻には、九月十八日京都観光に出かけられた。同行は、大谷先生（大正十年卒）ご夫妻、梅氏（昭和四年卒）及び神田（昭和三十六年卒）の五名、車二台に分乗し朝九時三十分、宿舎の京都ホテルを出発し、桂離宮へと向った。

竜安寺にてしばし沈黙

連日の強行スケジュールに拘らず先生ご夫妻にはお疲れのご様子も見せられず、美と芸術の極地と言われる離宮の建築、大庭園を熱心に観賞され、しばしば専門ガイド（英語での説明）に専門的な質問をされるなど、日本の史話は勿論のこと、その他建築、庭園などへのご造詣の深さに、一行、感じ入った次第でした。

約一時間の桂離宮参観を終り次の竜安寺に向う車中にて、先生の曰く「あそこのガイドさんは非常に良く説明しておられたが、残念ながら、生きた英語とは言えないネ」と。当時、先生の教えを受けた一行も、身に覚えありしか、ニヤリ。

竜安寺では有名な石庭の前に立たれ、しばし沈黙。石との対話をなされてか。仏遺教経の「知足の者は貧しといえども富めり、不知足の者は富めりといえども貧し」との教えにも頷かれ、方丈の東にある石造手水鉢（つくばい）の「吾唯知足」（われ唯足るを知る）の文字をメモしておられた。竜安寺を終え、次はマッキンノン夫人が特に希望された金閣寺に向った。夫人は、三島由起夫の小説「金閣寺」を読まれ、特別な興味を持たれたご様子でした。

金閣寺の後は、北白川から田谷峠を経て比叡の山襞を縫って、四明ケ岳山頂までのドライブ。古杉老松と琵琶湖の景観とが交錯する比叡山ドライブウエイ、その見事な眺望に御夫妻も驚嘆され、非常にお喜びのご様子。途中、山腹にある比叡山観光ホテルにて昼食をとられ、山頂の展望台へと向われた。車を降りて展望台までは若干の上りの坂道、一同、ご夫妻がお疲れになってはと、手をお貸しするのをご覧になり、先生曰く「私は、たったの六十二才ですヨ（I am only sixty two years old）」と。これには一同ギャフン。掛念されていた山頂の霧も、展望台に着く頃には全く晴れ上り、展望台から一望に見渡す京都市内、洛北、琵琶湖、大津市内などの展望に一ときを過された。しかし、さすが八四〇米の標高では肌寒く、風邪などめされてはと、次の延暦寺根本中堂へと向った。

「消えずの燈明」のあるこの根本中堂では、居合わせた僧侶の説明する天台宗、最澄の教えに耳を傾けられ不明の点を何度も聞き返されるなど先生の日本の仏教に対する真剣な態度に、僧侶共々、一同、恐れ入った次第でした。かれこれするうちに、時間も過ぎ、明日の予定に差支えがあってはと、そこから直接ホテルまでお送りし、京都の一日を終えられた。

（神田　記）

アトホームの歓迎会

京都・東山にのぼる仲秋の名月を観る

マ先生夫妻には連日のハードスケジュールに、そろそろお疲れの出る頃との配慮から、森下京都支部長には極めて内輪な、しかも如何にも京都らしい趣向を、との企画にて、昼間京都観光を終えてほっとひと息の先生夫妻を、京都ホテルからお迎えして、四条大橋の西畔、鴨川沿いの料亭に、プライベートな一席を設けてひとときの歓を尽すこととなった。

マ先生ご夫妻をかこんで

とき　九月十八日午後六時半から

ところ　京、西石垣ちもと

ひと　マッキンノンご夫妻、大谷先生ご夫妻、森下支部長ご夫妻　梅健氏（福井市昭四）　山村（昭十二）もご招伴を頂いて計八名

このちもとの主人は一生を京の味に打ちこんで、今は枯淡の身を静かにロータリアンとして送っておられる人、また女将は現鳴治郎丈の実姉に当る。二階広間は、私共八名のために異国の賓客を迎えるにふさわしいたたずまい、東の方紅灯をきらきらと映して鴨川のせせらぎは、これ天然の雅楽と聞え、その彼方薄墨の東山の連峯は雄大な一幅の名画の感あり。マ先生には既に滞日一ケ月近く完全に嘗ての日本語を取り戻しておられる点を見抜いてか、支部長の歓迎の挨拶も流暢な日本語を以て、膝をくずした肩の凝らないなごやかな気持ちで、お疲れの出ませぬ様と気を配られる。

当主の腕を振った純京料理にも、次々と器用に箸を動かされる夫妻には何の杞憂もなく座がはづんでいった。席に侍べる美妓、舞妓もさすがに外人の接待に場慣れたもので、初めの心配をよそに話題は次から次へと豊かに流れてゆく。だらりの帯をヒラヒラと祇園小唄の舞のひとこまは、この夜の情緒に花を添えて何よりのご馳走ともなり、舞妓を囲んでの記念写真も支部長秘伝の撮影である。

斯くて舌づつみの間を、和英折衷の日米対抗頓智教室まで飛び出す始末、日本語の機微を捉え、会語のギャグを解する先生の日本通には、居あわす一同、今更感じ入る態であった。当夜は恰も観月の夜に当り、折柄、雲間を分け出でて満面を現わして東山にかかる仲秋の名月は、マ夫妻の旅情を慰めることよなき引出物となり、縁端に足を進めて「月みる月はこの月の月」とフルムーンを観賞したのであった。

席上、森下支部長からはマ先生へ記念に巧美つくした西陣織のテーブルクロスを贈られ、筆者も聊かの心をこめて京扇子秋のもみぢの舞扇を贈りマ夫人に喜んで頂いた。

予定の八時半もいつしか過ぎて、月も中天高く上りし九時前に、木屋町高瀬川の畔に一同名残りを惜しみつつ、明日からのご旅程をお元気に進められます様願いながら、再びホテルへご夫妻をお送りしたのである。この時、フロントから箕面の中井千代太郎氏のメッセージを伝え聞き、子供の様に雀躍して嬉しさを現して居られたお二人が如何にもほほえましく眺められた。

翌十九日朝、京都駅に森下支部長外在京の緑丘人歓送の中に、次の北陸路へと介添えの梅氏にバトンをつないだ。

（山村　記）

広告マッチと美術印刷・紙工品

株式会社　三優社

京都市下京区寺町通松原下ル

TEL (36) 8171 (代表)

取締役社長　山村太兵衛（昭12）

是非一度皆様からの御用命を……特別奉仕

何処でも出て行けといった。あとで野添英語教師から抗議があり、あの児玉（マ先生はコドモと呼んだ）は一〇哩の道を毎日走って登校しているがあの日は朝食をとらなかったのでハングリーとアングリーの聞き違いが判ったが日本語でいえば判ったのに……。

二年後最終学位をとるためカルフォルニア大学へ行った頃初代渡辺小樽高商校長はYMCAを通じて若し小樽へ来る意志があるなら来て欲しいとの要望で赴任したのであるとその経過を述べたあと渡辺校長が或る日英語教師を校長室に集め今朝グッドモーニングと廊下で会った学生に云ったのにその学生は返答ができぬこんなことでは困る。もっと熱を入れて仕込んでくれと云ったエピソードなどを話す。

最後に小樽で逮捕されてから（昭一七・二）一八年横浜一九年九月第二交換船で上海―香港―フイリッピン―サイゴン―ゴア（インド西海岸）―サンフランシスコ―ニューヨークへ上陸したその経過と現在の令息、令嬢の消息を伝えて、（長男リチャードはワシントン大学で日本語教授長女ベティ・エリザベスはカリフォルニアの家の近くに住むカリフォルニア大学教授の夫人）次長リンコナは東京在住）

日本に御招待下ったことに対し心からお礼を申し上げると挨拶を結べば会場われん許りの拍手に湧く、次いでマ先生夫妻に対する花束贈呈が神戸支部長湊氏令嬢姉妹によって行なわれた。新聞社カメラマンからポーズの注文が出てパチリ。

京阪神支部から真珠タイピン、真珠ブローチの贈呈を大正八年卒湯川励氏代表して手交、またもや新聞社カメラマンからポーズの注文。「ニッポンノセイカツムツカシイネ」と云いつつ席についた。

西谷作太郎氏（昭一三）寄贈になるコサージュを夫人の胸につけた頃、大正年代を代表して大久保鹿式元大阪支部長から「苦米地先生の提案でマ先生をお招きすることに決ってから二年もみこしを上げないのは健康を害したのでないかと心配した。しかし今ここで若々しい力強い姿に接し心からお喜び申し上げ何時までも若々しくそして日本へ二回三回と訪問してほしい」と挨拶。

昭和初期を代表して山本京都大学教授（昭二）は「先生の国民服に似たポケットの多い洋服を思い浮べ今もなお日本語が日本人以上に上手なことや令息子女のご成長を知り誠にうれしい。私たちの気持ちを汲んで短かいが楽しい一夜を過ごされ、思い出話を語っていただき度い。尚ノートは満州で生活した自分には唯一の残されたノートであり計らずもそれが今マ先生にお見せすることの不思議なご縁を思いこのノートにより自分の子供に英語の学び方を教えていき度いと思う。何時までもお元気であられますことを祈ります」と結び、昭和中期の代表として木村章三氏（昭一三）立って次の様に述べる。

「この今回の招待ということは誠にすばらしい出来ごとで他の人々から、うらやまれている。はりのある金や銀の鈴の音の様なすばらしく若い三〇年前の声を聞いた。会社では職業柄英語会話を習っているがテストの結果はよい成績で三〇年も使用しなかった自分がこの様な成績（学校時代よりよい成績）をとった事は先生の教育法のすばらしさのおかげである。先生が招待にすぐ応じなかったのはもっと日本が復興してから見てやろうとしたのでないかと感ぐったが次に日本へ見える時はもっと立派になっているであろう。それは我々がもっともっとそのためにはげむであろうから」と。

京都支部長　森下弘氏の挨拶

マ先生夫人の挨拶

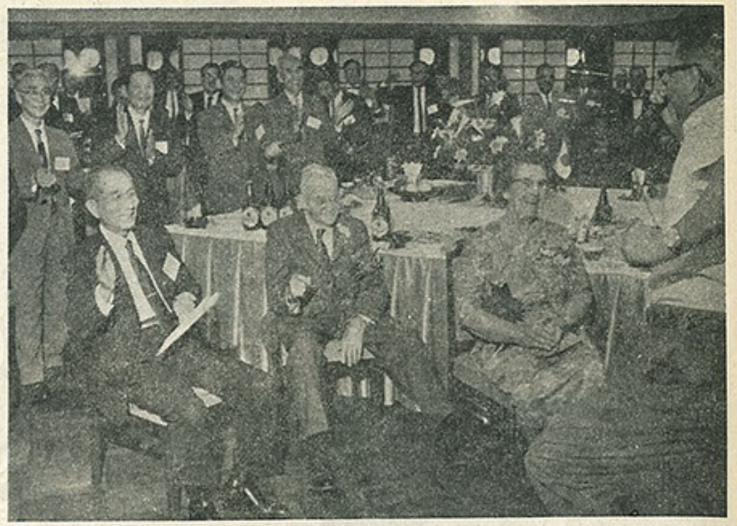
第二部

第一部が終って第二会場へ向う頃秋の日はとっぷり暮れていた。第二会場には校歌が流れ、京都支部長森下弘氏（大一四）の開会の挨拶によって第二部パーティーがなごやかな雰囲気をかもし出した。

森下氏は「先ほど皆さんが申されたので何もこれ以上申し上げることはありませんが、今後先生にはまだまだ全国をお廻りになるスケジュールがあり、どうぞつつがなく日本の旅を続けられますことを心からお祈り申し上げます。今晩はごゆっくりおくつろぎ下さって皆様とご歓談下さいますように。明日は奈良をご見物になって京都へ入られますが京都ではご自由にショッピングをなさるなど、私達は干渉しないつもりでおります。」と思いやりある挨拶に続いて乾杯。

マ先生を囲み、次々に名乗りをあげる緑丘人は互に堅い握手を交わしつつ自席に戻るが順番を待つ風景も見られた。マ先生夫人からは招待感謝の挨拶が英語でなされた。

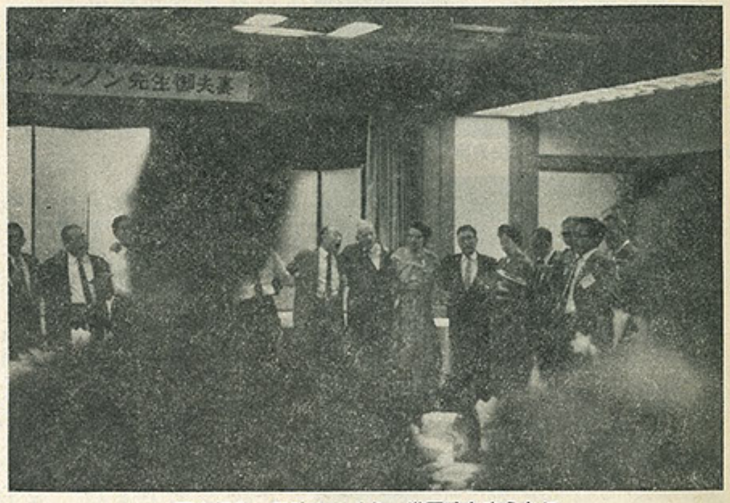
琴のかなでる調べに聞入るご夫妻日本舞踊にじっと見入るご夫妻宮地邦介氏（大一一）の正調博多節に続いて蟇目英三氏（昭一一）のソーラン節など会場にひびく。ソーラン節が終るやマ先生すかさず「デカンショヨヨヤッテ」と注文する。小池輝男氏（昭一一）はすすめられるまま、舞台に上って「デカンショデカンショで半年くらすヨイヨイあとの半年……」と唄えばマ先生満足気に靴の先で拍子をとるというなごやかな場面を展開した。


「いもを掘る手にバットを握りサイサイ……」歓迎会最高調

昭九藤井幸男氏はすすんで「いもを掘る手にバットをにぎり、サイサイ」と昔なつかしい音頭をとって手を振り足をならしての活躍に満場手拍子と唱和が続いた。

やがて円陣が作られてマ先生ご夫妻もその円陣の人となり進軍歌の大合唱がはじまった。恩愛の情一すじにこの進軍歌、この校歌のこだまの中に全てがマ先生歓迎の声となり、再会を期待する以外なにものもなかったといえよう。

神戸支部長湊静男氏は「新しい日本を見てお帰り願いたいそして再びお元気で再会する日をお待ちする」と結んで名残りつきない本日の歓迎パーティーの幕を閉じた。


肩を組み　円陣をつくり　進軍歌も高らかに

当時の歓迎会アルバムを作り神戸支部歓迎パーティアルバムとともに椿山荘における東京支部歓迎会の日にマ先生に二冊お届けしました。

緑丘編集部

マ先生ご夫妻歓迎懇親パーティー収支精算書

緑丘会京阪神支部

昭和四二年九月三十日

収入の部 内訳		金額	支出の部 内訳	金額
讃助会費	30名	287,500—	マ先生御夫妻への贈物	30,500—
10,000—	27名		太閤園支払い及び飲食代	227,896—
5,500—	1名		印刷代(案内パンフレット外)	36,030—
5,000—	2名		通信費及び発送代	12,100—
2,000—	1名		記念品代	29,500—
一般会費	30名	72,500—	謝礼	13,000—
2,500—	29名		雑費	16,605—
2,000—(同伴)	1			
サッポロビール広告代		20,000—		
利息		89—		
合計		382,089—	合計	365,631—
差引残高		16,458—		

残金は緑丘誌編集部に寄附致しますから御了承下さい。

いただきました一六、四五八円はマ先生へ贈呈のアルバム代写真代と神戸支部歓迎会場でマ先生へ贈呈の油絵代に充当させていただきました。緑丘編集部

た。これ程私の事を覚えていて下さるのかと、私どもは感動した。

私の教え子ばかりでなく、昔の隣人、私の子供の友人、お子さんたちやいろいろな人たちから手紙をいただいて、心のつながりが強くなった。

全道の皆様にお礼を言いたい。私たちを、日本に招待して下さった同窓生にお礼を申し上げたい。

私の身体が離れても、心はここにある。

アメリカに来られる人は、ぜひ私の家にお立ち寄り下さい。

どうも有難うございます」

最後に学園讃歌 When I came を合唱し、村川先輩の音頭で、マッキンノン先生ご夫妻と皆の幸せを祈って、万才を三唱し散会した。

このあと、われわれ昭和13年組4人は、先生のご健康を祈り、別の所でまた盃を上げたが、その席で鎌谷、多賀、大津の三君は、こもごも「あの最後の日本語の挨拶には、ジーンときて涙が出そうになった」と言った。

（戸谷記）

ちゃぼあやめ

あの花には別にちゃんとした名前があるのかもしれない。でも私たちは昔からちゃぼあやめと呼んでいる。いわばあやめの小型で、ほんとのあやめをそっくりそのまま五分の一ほどに縮めると、ちゃぼあやめになる。私の知っている限りでは白い花と葉のがあって、実家の門から玄関までのふみ石の両側に、夏近くなると、思わずしゃがんで手をふれたくなるほどかわいい花を、ぜいたくに咲かせていた。

戦争前に札幌へ主人と二人で越して行った時も、戦争がすんで小樽のこの家へ帰ってきた時もちゃぼあやめを移し植えて、やっとわが家の思いをしたことだった。

そのちゃぼあやめが、バークレイのマッキンノンさんのうちの庭に咲いていた。季節のないカリフォルニアのあの辺で、ちゃぼあやめは咲く時期をどうして悟るのか知らないけれど、とにかく日本と同じ姿で咲いていた。

日本のちゃぼあやめを、アメリカの庭に咲かせているマッキンノンさんは、私の父の同僚だった。戦争中収容所に強制収容になるまで二十五年もの間、小樽高商の教授をしていられた。戦争とは別に、日本と日本人の善意を信じるマッキンノンさんは、自分の住むバークレイを小樽、となりのオークランドを蘭島、向かいのサンフランシスコを札幌と呼んで暮らしていられる。マッキンノンのおじさまが筋子がたべたいと言っていられる…と偶然同じ町にある加州大学にいる長女から手紙がきたので、さっそく柏（かす）づけを一箱お送りしたが、今小樽高商の卒業生の有志の方々が、マッキンノンさんを小樽に招く運動をしていられることはほんとうにうれしい。ことしのちゃぼあやめの時期はすぎたけれども…。

（故毛利昭子）

故郷に錦を飾ったマ先生

菅野祐治（大一二）

今度二十五年ぶりに来日したマッキンノン先生は全国八千の緑丘同窓生により到る処、心温まる歓迎を受け感激されたことと思うが、その内一番喜ばれたことは九月四日と六日に母校で講義の機会を与えられたことであろうと思う、二十五年前ともあろうにスパイの容疑で米国に強制送還された先生が見事母校に錦を飾り得たのである。

以下は私のざんげ話である。

私も教室でマッキンノン先生から教わった一人であるが、正直な話どうもその授業に好意が持てなかった。どの時間に出て見ても、質問質問と先生に質問する事許り要求されて、反対に先生から教へられるということがない。当時我々は生意気盛りで知識慾に燃えていたのである。一言でもよい、自分達の知らない事柄を先生方から学び取りたいのである。それに我々の日常生活から取材して簡単な幼稚な質問を発する事を求められるのである。何て下らない授業だろうと、不満で仕様がなかったのである。実は自分が馬鹿だったのである。我々にとって一番大事な事は英語を聞く事であり、英語を話すことであった。英文学を勉強することではないのである。他の外人の時間にも英語は聞くことはできる。然し、英語を話す機会はマ先生の会話の時間以外にはないのである。だからマ先生ができるだけ自分はしゃべらずに、我々に語らさせようとなさったことは当然のことなのである。この当然のことが当時の私にはどうにも合点が行かなかった。そして下らない授業だと勝手にきめこんでサボったり、代返して貰っていった。だから簡単な英語を話すこと、聞くことがてんでできない。そのために英語の先生も途中で止めて、進駐軍に九年も勤務してスポークンイングリッシュを初めから勉強し直さねばならないことにもなったのである。今私は当地のガイドとしては一番古手である。その私の一番苦手とすることは、英語を話すことであり英語を聞くことである。マ先生が折角苦心して、我々に英語を話すように努力して下さった時に、何故そのように努力しなかったかと、今日になって後悔している次第である。

京阪神合同　マ先生ご夫妻歓迎パーティー

同窓生夫人の参加でなごやか倍加

珍らしや　マ先生「デカンショ」を所望

九月十六日午後六時から　於太閤園

ORANGE AND GRAPE

A Nationa

No. 16028 OSAKA (C)

The McKinnons chatting with former students.

Reunion With US Teacher

IN TODAY'S ISSUE:

PAGE 2—U.S. using a new TV-guided missile in Vietnam.
PAGE 3—Five young people in car arrested after breaking through eight checkpoints and hitting a policeman.
PAGE 5—This week's instalment of the "Whence History Began" series, describes a visit to Yasnaya Polyana where Tolstoy's immortal masterpieces were born.

英文毎日から

二、三、四十年振りでマッキンノン先生にお会いできる喜びを胸に秘めて、九月十六日太閤園で開催の京阪神合同歓迎パーティーの開会一時間前にはもうすでに十数名の緑丘会員が集まって来た。

マッキンノン先生もまた五時十分には夫人と共に大木弘基氏（大一三）の案内で太閤園に入った。

一平方米大のサインボードには「歓迎、マッキンノン先生ご夫妻、Why not ask ?」と中心にコシック体でデザインされていた。その左上方にマ先生はマジックペンでサインをすると、その下に夫人がサインする。

初秋の松林に囲まれた大庭園の椅子に腰を下ろすとドッと親しさに、交々挨拶に出てマ先生の握手の堅さに皆まず驚く。その中にあってマ先生は古いノートに目を据えて喰い入るように見つめていた。

このノートこそ四十四年前クエスチョンの宿題に応じて山本安次郎京都大学経済学部教授若かりし日にマ先生に提出したノートであった。先生は大正末期の教壇にあった日の事を思い出していたかも知れない。

大谷敏治先生夫妻も見えた。開会の六時も近くなる頃、毎日新聞社、英文毎日、朝日新聞社、サンケイ新聞社など新聞記者やカメラマンも続々くり出して来た。

京阪神合同歓迎パーティーは緑丘人の夫人同伴によってマ先生ご夫人をつとめてねぎらうよう配慮され、すでに同窓夫人を交えて百余名の集いである。

第一部

大阪支部若山幹事長の朗々たる司会により第一部の幕を上げた。

葦目副支部長開会の挨拶、マ先生招待計画具体化以前苦米地先生令嬢故毛利夫人より交渉のあった事、昭和七年母校正門前ロバ上の先生の肖像（小樽・鈴木三七氏提供）の額入り写真三枚の贈呈などあって、石田支部長の歓迎挨拶に入った。

マ先生をお迎えする喜び、今回招待に尽力された大谷先生に対する感謝のことばのあとマ先生には心ゆくまで関西の初秋を楽しみ日本を行脚して帰国願いたいと結ぶ。

次いで大谷先生からマ先生ご招待の経過について二〇年前教育改革時、即ち小樽商大か北大合併かの時のイールズ博士との対話からはじまって単独大学にしなければならぬ理由の一つに伝統あるこの高商の卒業生が海外に活躍しているのは提出した教授名簿の中の数々の外人講師の献身努力に負う所も多く、その名簿の筆頭にダニエル・ブルック・マッキンノン先生の名が記録されていた。といい、さらに緑丘前号に記載の経過発表をされた。さらに附言して東京から小樽まで同行した折の正式母校訪問経過を伝える。

さていよいよ待望のマ先生の挨拶となった。通訳は大木氏。

「コンナニタクサンノガクセイイタラ、ガクセイノホウカラマンダン・マンダントサケブノニ、ソレダケカワッテキタワケダナ」

「ドウユウワケデ、モウスコシニホンゴツカッテクレナイカト、ヨクキカレル—ガ、ワタシノ、エイゴニキキナレタカタガタニ、ニホンゴヲマズクテモオキキニナッテモ、ナツカシイデワナイデショウカ」

さてこれから英語で力強くゆっくりとはじまった。要旨をお伝えしよう。

「どうして日本へ来たかと聞かれるが、一八六〇、七〇、八〇、九〇年代は日本政府の英語の重要性が宣伝され、会話ができ書ける者は誰れでも先生になれた。一九〇〇年代にはじめてニューヨーク国際YMCAができて優秀な人が日本に派遣され出した。マ先生はハーバード大学を出て、一九四〇年に選ばれて日本へ来た。

最初の学校は豊浦中学校（山口県長府）で乃木将軍も配出された学校である。或る日教室でテキスト三二頁を開けよといった時学生がみんな開けているのに前列三番右側の学生が唯一人開けないのでどうしたのかと尋ねると「アイアムアングリー」という。憤慨した先生は長府は景色のよい所だからダンノウラでも

マッキンノン先生御夫妻歓迎会緑丘会札幌支部

1967. 9. 14　於ローヤルホテル

札幌のマッキンノン先生ご夫妻歓迎会出席記

はるばるアメリカより遠来の、恩師マッキンノン先生ご夫妻歓迎会は九月十四日（木）午後五時半よりローヤルホテル10階手稲の間にて行なわれた。

＜控え室風景＞

定刻緑丘会員たちは、3階控えにて幹事から渡されたカナ文字で書いた名札を胸に、先生のお出ましを待つ。

同ホテルに宿泊中の先生が、やがてエレベーターから出て来られた。

お！　なつかしや！　マッキンノン先生、ようこそ！　ロバ先生

皆は六尺下って師の影を踏まざるが如く、先生を遠巻きにしたような形。近くの大先輩が次々、先生と握手をし話をされている。

先生の頭髪は真白く変ったが、30年前と余り変ってはいない。顔色は昔より血色もよく、とてもご健康のようだ。

やがて、こちらへ歩いてこられる。われわれ同期の4人は、昭和13年卒業とご挨拶申し上げれば、先生はThis is my brainと言われて、一九〇〇何年が大正昭和何年に当るか、を書いてある小さなカードを見せてくれる。そして昭和18年の人がいるかと訊かれ、なつかしげに彼等の二三人と話される。

先ず写真室で、先生ご夫妻を中にして、記念写真を撮り、10階の歓迎会場へ移る。

＜歓迎会場にて＞

司会は金吉氏（昭8）により

一、君が代（見れば先生も唱っている）と校歌合唱で始まり

一、招待者紹介、先生の連絡係安宅氏（大14）によって招待者が紹介される。

先ず、先生の奥様（横浜に嘗て約25年滞在し共立女子神学校の先生をされた。現在教え子が道内にいる）

次いで、大黒マチルドさん、藤女子学園大学長牧野キク女史、同助教授安井女史、苫米地先生のお孫さん毛利彩（アヤコ）子、晴子のご姉妹、その他数氏と、去年より13ケ月自転車で世界一周ケチ旅行をし、途中バークレイの先生宅に数日泊めて頂いた樽商大四年の奥山瑛明（テルアキ）君が紹介される。

＜歓迎の言葉＞

病気欠席の支部長代理として、もと商工会議所の専務、関氏（大12）「先生に二つのことを申し上げたい。一つは、太平洋戦争は大変恥かしかった。先生におわびしたい。もう一つは、戦争放棄をした日本は平和民主主義文化国家を目指し、世界の人々と手を握って行きたい。帰国の節は米国の人にもそのようにお伝え願いたい。先生、もう一度十年後に来て下さい」と結べば、司会の金吉さん「八十八の米寿にまた来て下さい」と。

＜先生のご挨拶＞

先生は、はじめ日本語で「どこへ行っても、日本語を使わないのか、

と訊かれた。私の英語を聴くのは、いくらかなつかしいのではないか」と皆を笑わせる。そして、こんどは英語で、ハーバート大学が先生を招いた一九一七～一九一九頃の話から始まり、戦時中の一九四二（昭17）小樽から横浜の競馬場に流されたこと、第二回目の出来事、即ち一九四三（昭18）上海、香港と千二百余名のアメリカ人を集めながら、インドのゴア・南米と廻りニューヨークに着いたこと、を淡々と語れば、満場寂として声なし。（筆者註、ここで英語で言ってくれているのは、先生の深いお心遣いと思われる。これはあとで、お礼のご挨拶を日本語でなされたことで類推）ついでお家族の話となり、翌年の一九四四（昭19）先生の誕生日に、リンカン記念日に生れたお嬢さんのリンコナさんが、先生に結婚をすすめたこと。リンコナさんのご主人がその後二度も日本へ来て、図書収集をしたこと、ご子息のリチャードさんが邦楽（長唄？）に興味を持っていること、お宅のあるバークレイのことなどを話された。

＜乾　杯＞

室谷先生の発声で先生ご夫妻の百才の長寿を祈って乾杯

一、緑丘会より先生に記念品の贈呈あり

一、先生の奥様のご挨拶「朝から晩まで小樽高商の話をしています」と柔和で智的な老婦人

一、テーブルスピーチに入り、色々の思い出話が披露された。

○錦戸善一郎氏―先生の授業の総消しと幻灯の話

○鎌谷勤君―英語をつかんで落第しそうな友をつれて、先生の家へ点数をくださいと頼みに行ったこと

○室谷先生―先日マ先生が「ムロケン、歌を聞かせてほしい」と言われたと、謡曲「鶴亀」を謡う。

○小鍛治氏―昔、先生から教えられたタバコをやめる秘訣で、やめることができたと、先生にお礼を言う。

その間、大黒マチルドさん、西村、両小林、池田、伴野の諸氏のスピーチが続く、之に対しマ先生は教師の昔に返り「あなたのイントネイションを直す」と I can speak English を can に力を入れて言われたりする。

○木田橋氏（元、図書館勤務）―先生は時々私に「そうでしょうね。何々であるべきですね。私ならそうしますね」などと言われたが、これらは実によい言葉で、我々が社会生活で使って大変為になると披露。

○村川大先輩―永平寺の合掌と先生のユーモラスなあいさつについて

○藤学園大学長の牧野女史、童貞さん姿で―「先生はマッキンノンわたしはマキノ」とジョークを飛ばして「学校で実践倫理の時間の材料として、マ先生招待のことを生徒に話した」と、緑丘会の今回の行為を賞讃された。

○次いで拓銀の五味氏、島谷氏、大畠氏、中原氏のジョークの話、小樽のユキナカのことなど

○中川精一郎氏―緑町の下宿が、もと先生のお家であったと話せば、先生は「あの家の廊下に日本国旗を窓掛けに使っていた。そして裏の廊下には米国の旗を下げていた」とユーモアたっぷりに笑わせる

ここで司会の金吉さん、大阪の「緑丘誌」に言及し「マ先生の思い出」の原稿執筆の協力を皆に要請した。

その次に、苫さんのお孫さん毛利彩子さんが英語でと指名され、米国留学中ご夫妻をスペイン語で父母に当る「パパシータ」「ママシータ」と呼んだことなどを流暢に語れば、ここで声あり「苫さんよりウマイ」

○自称旧姓浦島氏、卒業アルバムに記した先生の Evil reverse live の意味を問えば、先生英語で答えてくれるが、皆にはよく解らない。錦戸さんが隣の席のその人に「Evilを反対から見ればLiveだ」の解説で初めて合点。そのあと小河氏でスピーチを終り。

＜マ先生のステートメント発表＞

先生は冒頭英語で「こんどはブロークン日本語で言います」と皆を笑わせ、大要次のようなステートメントを発表された。

「私が日本へ着いた時、私はウラシマだった。二週間いて、小樽、函館、室蘭、札幌、釧路、阿寒、網走、北見、旭川と廻っているうち、ウラシマ太郎と大きな相違を知った。私の場合、玉手箱の蓋をとる必要がないと悟った。どこへ行っても情の深い温い気持で迎えられた。いろいろと、思い出話を言って下さっ

緑丘

全国版

(通巻)No. 58号
(42年度 4号)

(編集責任者)
大阪市東区道修町3の12
塩野義製薬株式会社内
蓁目英三

(緑丘会大阪支部)
大阪市北区梅田八番地
新阪急ビル8階
サッポロビール㈱内

マッキンノン先生 羽田を発つ

リョツキュウノミナサンアリガトウ
ゴザイマシタ

（十一月十二日）

マッキンノン先生ご夫妻が故国日本、羽田空港に到着したのが八月二十三日の晩夏であった。

その後大谷敏治氏の案内で北は北海道から九州まで全国いたる所で卒業生の暖かい歓迎を受け、東京、椿山荘の東京支部歓迎パーティーをもって一応ご招待のスケジュールを終った。先生ご夫妻は故国日本を去り難く十一月十二日まで東京、国際文化会館に滞在され、或る日は仙台方面や伊豆長岡などへ私的な旅行を続け十一月十二日夜九時、JAL七二便多数の見送る中を緑丘会員の皆様にくれぐれもよろしくとお礼をのべられ羽田を発った。タラップを昇る先生の目には涙が光っていた。

（マッキンノン先生住所）
D, Brook McKinon
2008 Woolsey St. Berkeley,
Calif, 94703 US America

小樽支部（九月五日）

マッキンノン先生御夫妻 歓迎レセプション

マッキンノン先生御夫妻歓迎レセプションは公園通り豊楽荘に於て午後五時半から行なわれた。主催は緑丘会である。

先生御夫妻とリンコナさんを主賓とし、実方学長御夫妻、原岡、松尾両先生が来賓としてお出で願った。

先ず緑丘会を代表して金栄副理事長の歓迎の挨拶があってマッキンノン先生のユーモアを交えてのいかにも楽しそうな、嬉しそうな、そして懐し相な挨拶があり坂牛直太郎氏の音頭で乾杯開宴した。

その後原岡先生、松尾先生のテーブルスピーチを皮切りに同窓生の寿原九郎氏、山本信爾氏、坂口栄之助氏など多数の方々から、日本語或は英語で夫々スピーチがあった。これに対しマッキンノン先生夫人とリンコナさんの感謝の挨拶があり、引続き当時のロバのハク製を披露、鈴の首輪をプレゼントした。

商大生による合唱団がマ先生の特に所望した君が代や校歌、行進歌など思い出の歌を唄って歓迎会も最高潮に達した。

杉江小樽支部長の閉会の挨拶、最後に全員手をつないで行進歌を唄い時のたつのも忘れ、時計を見た時は予定よりも三〇分以上も経過して散会した。

散会後も全員が先生と挨拶を交わして夫々懐旧談が続き名残つきない様子であった。

当日の出席者七十五名、近来稀れに見る盛会であった。（新谷記）

マッキンノン先生 母校正式訪問

八月二十九日十一時十分すぎ、大学さし廻はしの黒のセダンが、正門に現われた。玄関への途中、本館から大講堂への渡り口のあたりで、ドアが開く。長身ヤセがたの白髪がみえた、つづいて花模様ドレスの姿。玄関車寄せの前の実方学長、最初の教え子、金栄酉吉氏（大七）、上野彦太郎氏（大九）、金吉忠吉氏（大九）ほか各期の卒業生、教官・職員五十余名の人垣が拍手で迎える。サンキュウサンキュウと先生はみんなの顔を見廻わす。テレビ・カメラがシージー廻わり、放送マイクがさしだされる。学長に導かれて玄関に一歩踏みいれる足どりは、二十数年の苦しい思いをかたく秘めて、「この螺旋階段は変らんね」と、ゆうことだった。

母校車寄せに立って
新校舎の建ち行く
校庭を臨めるマ先生

（右）STARS and STRIPES（十月十七日号）に掲載されたマッキンノン先生叙勲の報道……日本に於ける英語のパイオニヤとして（大谷敏治氏提供）

（左）京阪神支部ご夫妻歓迎パーティーのマッキンノン先生（木村章三氏提供）

Pioneer English Teacher Praises Japanese Desire

By S. SGT. ANDRE TURGEON
S&S Staff Writer

TOKYO—The Japanese student of English is no different today than 50 years ago, according to Dr. Daniel B. McKinnon, a pioneer of English teaching in Japan.

McKinnon is here for his first visit since World War II at the invitation of the alumni of Otaru University of Commerce and Economics, where he taught for 24 years.

In an interview with *Stars and Stripes* McKinnon said that "the Japanese students I met and talked to seemed just as ambitious to have some command of English as when I was first here.

"In those days the Japanese government realized the need and importance of English for business relations. Today the same holds true, but there are also many other reasons," he said.

A graduate of Harvard, McKinnon came to Japan in 1914 after hearing that the Japanese government was seeking qualified English teachers. He first taught middle school on Honshu. Later he went back to the United States for his master's degree and returned to Japan where a position awaited him at Otaru University.

While there, according to Prof. Toshiaru Ohtani, one of his students, McKinnon gained a reputation for his sincerity, punctuality and high standard of teaching.

"When teaching he stressed sound and correct speech. But, he was most famous for his assignments, which required the students to ask questions," said Ohtani.

"Many of his students went on to high positions in business, education and the arts and as lawyers and judges," added Ohtani.

McKinnon described the relationship between teacher and students as one of love. "There was deep respect and an inspiring attitude towards education. This still seems to exist today," he said.

It was this love of teacher that made many of his students decided to make it possible for McKinnon to visit Japan once more. The 77-year-old professor has been here 50 days visiting his former students and addressing alumni gatherings.

McKinnon was arrested on Pearl Harbor Day as a spy. Though later cleared of the charges he was held prisoner until he was returned to the United States in 1943.

During his detainment his wife, the daughter of a samurai, died. They had two daughters and son, now all of whom teach in the United States.

Following the war McKinnon took a position at the University of California at Berkeley as a professor of English and Japanese. Many of his Japanese students visited him there.

For his efforts as a teacher in Japan and his continued relationships with the Japanese people, the Emperor on Oct. 12 presented McKinnon with the 3rd Order of the Sacred Treasure.

母校正式訪問時のマッキンノン先生ご夫妻とその歓迎振り（新谷篤太郎氏提供）

ダニエル・ブルック・マッキンノン先生の胸に

勲三等瑞宝章輝く

＜勲記＞

日本国天皇はアメリカ合衆国人
勲五等ダニエル・ブルック・マ
ッキノンを勲三等に叙し瑞宝章
を贈与する
昭和42年10月6日皇居において
璽をおさせる
昭和42年10月6日

政府は戦前小樽高商などで教壇に立ち，日米親善に大きな功績を残したダニエル・ブルック・マッキンノン先生に勲三等瑞宝章を贈ることを10月6日の閣議で決定。10月9日劍木文部大臣から授与された。（写真…長谷川政夫氏提供）

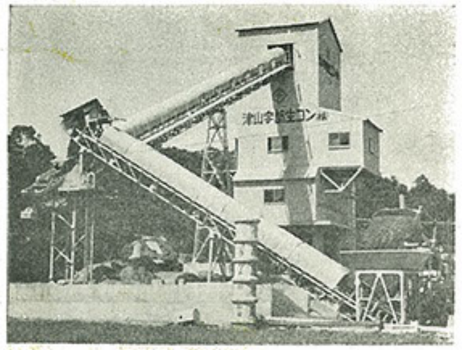
小樽商科大學図書

Though our bodies may return to America, our hearts will remain with you always.

Daniel B. McKinnon

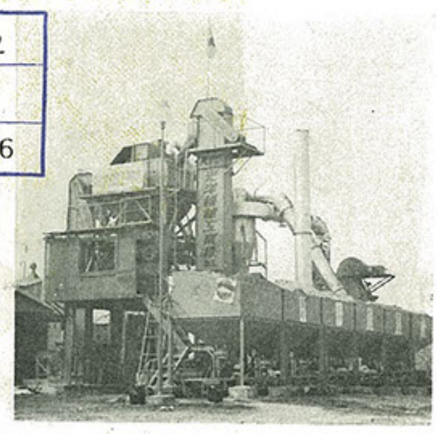
KYCの土木建設機械

KYC砕石プラント（100T/H）



KYCコンクリートプラント（20³T/H）

本社KYCビル



KYCアスファルトプラント30T/H

—製造品目—

砕石プラント／コンクリートミキサー
コンクリートプラント／バックチャスケール
アスファルトプラント／ベルト コンベヤー
クラッシャー

総合建設機械のトップメーカー

KYC光洋 機材工業株式会社

代表取締役社長　奥　村　正　美

本　社　大阪市北区南同心町1丁目31番地　Tel 大阪（358）3521（代表）

事業所　大阪・東京・札幌・仙台・名古屋・高松・広島・福岡・鹿児島

0/2
29
966

0／2
29
966

緑丘

1967 No. 58
奇数月発行

業務出

マッキンノン先生特集号（II）

馬
秦森康屯

大商樽小
誌会窓同

SINCE 1876

結論が出ました——
「★サッポロビールは
最初のうまさが持続する」

●雑味・雑臭がないから　うまさが持続

ビールの味の総仕上は濾過の工程が受けもちます。サッポロビールは独自の方法で雑味・雑臭を完全に除去、味の純度がずば抜けて高いのです。
何杯飲んでも最初のうまさが味わえる————サッポロビールだけの秘訣です。

伊勢志摩観光

緑士会四十五周年記念集会

緑丘卒満四十五周年、何んとか意義ある会合をと、早々に幹事諸君の提案もあって、伊勢志摩観光と決定、東京幹事大場君、地元伊勢在住井上君の並々ならぬ御配慮の甲斐あって左記二十五名参加、回を追う毎に同伴組が優勢となるは微笑ましい限り、殊に今度は久し振りに加来君夫妻と富盛君が馳せ参じたことは嬉しいことで両君と筆者とは二十有五年ぶりの邂逅であった。しかも快晴の秋日和、願ったり叶ったりである。

十月十二日正午過ぎ一行は東西より宇治山田に合流、駅前小亭の二階に勢ぞろい、一同元気元気。

先づ杉山常任幹事の労になる第一号より五十余年におよぶ消息誌集録の美事な製本を回覧、中には時折々の記念写真まで挿入され、これこそ緑士会の尽きせぬあたたかい象徴であり、また会員各自の歩いた人生航路の記録でもあり、まさに四十五周年記念の金字塔である。

同伴組　井上、大場、太田、加来、功刀、中浜、西村、松岡、三沢、小関

単身組　小橋、佐藤、杉山、富盛、宮地

計二十五名（敬称略）

憶えば年毎の全国集会も今年で六回を数う。第一回がコースも同じ志摩廻遊。当時はいまだ第一線に活躍の御人が多く、仲々勧誘の効なく、

向って右より
（上段）（中段）（前列）
加来　宮地　大場夫人
大場　三沢　井上夫人
富盛　中瀬　功刀夫人
小関　杉山　三沢夫人
佐藤　功刀　松岡夫人
西村　井上　太田
西村夫人　中瀬夫人
加来夫人　太田夫人
小関夫人

三十七年十月四日宇治山田駅に降り立ったのは僅かに六名（功刀、神沢竹村、四谷、井上、宮地）だったことを思い合わせ、今日この盛況を見て感慨一入のものがあった。

（拙著「はがくれ紀行」六三―六七頁参照）

扨て中食後貸切バスを駆って先づ参宮。老杉、古木に日本の年輪を偲び、五十鈴の清流、神殿の神々しさに、日本人の故郷はこゝにこそと思うは今も昔も変わらぬこと。六年前は伊勢湾台風の爪跡なまなましく、哀愁さえ覚えたが今は蘇生の神域となり、心の安らぎを感じたのはわれわれ共に同じだったろう。

内宮より鳥羽へは朝熊山（あさまやま）を縦走する伊勢志摩スカイライン。山の頂上に小憩したが生憎の濃霧、晴天の折は国立公園志摩の景観を一望におさめられ、時には富士の遠景さえ望見されるとのこと、惜しいことだった。

鳥羽に到って真珠島へ渡る。三木本翁の偉業を偲び、海女の妙技を見る。真珠館には余りに多くの真珠があって安ものゝような錯覚をおこす。一時間足らずで再びバスに引き返えす。

ところでこゝで夫婦愛の一幕があったことを書き洩らしては相済まない。島を去る時誰れ言うとなく小関夫人が見えぬとの騒ぎ、夫君は顔面蒼白（？）となり、あわや引返して連れ戻さんずの態、やゝあって夫人は既にバスに乗ってござるとの知らせ、ホットした小関老剣士「何んだ！　お前は」と言いながら戻って来た。夫人は照れかくしにホホと笑っておられた。一同爆笑、まさに美しい寸劇だった。

これよりバスは一路山間をぬうて浜島へ直行、午後五時半旅舘南風荘に着く。旅塵を洗って、割当ての部屋々々に小憩後、大広間に招ぜられて宴に入る。正座には再婚後初御目見得の三沢夫妻、仲介役の中瀬君から御二人の結ぶえにしの紹介あり、流石の三沢君も一寸堅くなって挨拶。

会場は六年前と変らねど侍べる女中衆は顔振れや前垂れの染め模様も変わり、名妓五郎さんも既に何処かへ流れて行ったとのこと。膳部は鮮魚の数々、残酷な大名料理も名物の一つ。酒や麦酒に談笑の和楽（わらく）、酔うほどに席に美妓なく、三味の音もなければ老爺連と雖も一寸物足らなさをおぼえ、幹事に無理申上げて奇麗どころ（？）二人を呼んで貫い吾れと思わん者どもが交々立って隠し芸を御披露に及ぶ。

かくて御同席の御夫人方の御疲れも察し適当の時刻に応援歌「立て立て立て健男児」を高唱、来年度は功刀君の世話で浜名湖集会を一決、御開きとした。

このあと尚飲み足らず語り足らざる豪の者七、八名は一室に集まり、各部屋部屋のボックスからビールを徴発し、足らざるは調理場にまで無理を言い十二時過ぎまで痛飲、老いて益々壮んなる慶祝せねばなるまい。

明くれば十三日また快晴、一行の精進を物語っている。早起きは老爺の御手のもの、七時半には朝食をすます。こゝで太田、中瀬、三沢の同伴組は袂を別かつ、何れ夫々のプランに依り南紀方面へ足を伸ばしたそうな。

残余部隊十九名は再びバスに乗り浜島港からフェリーボートで対岸御座に渡る。御座は御座半島（志摩半島の一部）の突端にあり、浜島と共に良港である。共に黒潮おどる大平洋の西は熊野灘、東は遠州灘をのり切る船頭達が両難所中間の憩いの場所として寄港するところで往時は針仕兼（はしかね）菜売（なうり）等と言われた売春兼業の女達が出入りして繁昌したとのこと。

御座に上陸したバスは大平洋を右手に見て、和具や船越と海女や巷説豊かな町々を通って波切（なきり）に到る。こゝ波切は大王岬に抱かれ近海および、遠洋漁船の根拠地として町は繁栄、岬の南方巨岸の上に白亜の灯台が毅然としてそびえている。俗に大王岬燈台と言われ、正式の名は海上保安部第四管区大王岬環視所と書いてある。岬に立てば右に熊野灘、左に遠州灘を控へ、遙かに通う汽船の遠影を望み、遠方此方の岬に散見する白亜の燈台を見ては映画「喜びも悲しみも幾歳月」を思い出す。ガイド嬢も其の主題歌を歌って呉れた。

かくて磯の香ただよう波切の町を後にして、鵜方、穴川、磯部の町々を経て宇治山田に着く。すなわち第一コースこゝに終る。井上夫人は伊勢の自宅へ御帰還、駅にて功刀夫妻と富盛君に袂別、名残りを惜しむ。

第二コース松阪行きは十五名、正午過ぎ和田金に入る。名物松阪肉の網焼（あみやき）と鋤焼に舌鼓を打つ。この前に聞き洩らしたことを御披露申上げれば、こゝ和田金の肉はすべて処女牛のそれに限るとのこと。女中さんの鼻息も荒らく伊勢の国は天照大神様このかた女ならでは夜の明けぬところ、男の奴はこれこそ箸にも棒にもかゝらぬ、との御託宣、まさか牛まで女ならでわとは今の今まで知らなかった。

飽食一時間余、第二コースもこゝに無事終った。愈々関西勢四名を残して東方勢は全員夫々帰途に就く。

関西勢（松岡夫妻、杉山、宮地）は松阪城跡と本居宣長の旧居宅鈴之屋を訪うことにした。松阪城は天正の昔、剛雄蒲生氏郷の築城にかゝるもの、櫓（やぐら）はすべて跡かたもなく石垣のみが往時を物語っている。石垣の精巧なる天下屈指の名城と言われしとか。城跡は全域公園となっている。松阪公園という。本丸跡に本居宣長の旧宅がある。宣長大人以来市内魚町にあったものをそのまゝ明治四十二年にこゝに移築され遺愛の鈴其の他の遺品と共に鈴之屋遺跡保存会に依り保存せられ国の特別史跡となっている。小児科医であり、国学者であった宣長の遺した古事記の麗筆は秀逸にして只々感歎の他なく、その版木数百枚精致を極わめ先人の卓抜なる技に驚歎久しくした。大人の集めた七種古鈴は何れも珍奇なものばかりこゝに遺されている。蓋し鈴之屋の名称の由来なるべし。（神沢重治君著「寒鮒」八八―八九頁にも評記してある）

こうして四人のデザートコースも意外に香り高く、こくのあるものだったことを報告して筆を擱こう。

四二、一〇、一七（宮地記）

異動

栄転

高橋太陽火災海上保険㈱本店（横浜支店）正敬（昭一一）
東京都中央区日本橋通三丁目五
大正海上第二ビル内
小池輝男（昭一一）
㈱浅沼商会大阪支店（東京本社）
小林正雄（昭八）
NHK営業総局（仙台中央放送局）
東京都千代田区内幸町二―二―三
中野祐良（昭一四）
住友海上火災保険㈱東京営業第一部長（大阪本社）
東京都中央区八重州二丁目
高田正明（昭九）
三菱重工業㈱名古屋機器製作所副所長（同社三原製作所営業部長）
名古屋市中村区岩塚町字高道
滝沢中（昭三）
安宅産業株式会社専務取締役東京支社駐在
東京都千代田区大手町一丁目　大手町ビル
小林芳美（昭一六後）
伊藤忠商事㈱仙台支店長（東京・紙パルプ部）
仙台市名掛丁九一　第一ビル内
西条正博（昭一九）
北海道水産製造㈱取締役総務部長（函館冷蔵庫取締役工場長）
中田乙一（昭七）
三菱地所副社長（専務取締役）
清水淳（昭一七）
共栄火災海上保険KK金沢支店（大阪支店）

住所変更

中野清一（大一五）
宇治市木幡南山一二―一四五
宇佐美猪一郎（昭三四）
高松市花の宮町二丁目十四―二五
三井物産㈱花の宮社宅三五
佐藤武市（大九）
西宮市結善町一番五号（表示変更）
竹内宏（昭一六後）
広島県三原市糸崎町　三菱梅林社宅九号
小林正雄（昭八）
千葉県松戸市岩瀬三〇二―二
高木久新（昭一八）
宝塚市野上一丁目八番五号
浜浦英祐（昭四）
東京都大田区東雪ケ谷四丁目二一番七―二〇八
川口久治（昭一〇）
札幌市北三条西二丁目四番地
西条正博（昭一九）
札幌市旭町十一丁目六十三番地
滝沢中（昭三）
東京都文京区関口二丁目五番十四号目白台アパート六一〇号（仮寓）
高橋亘（昭一一）
東京都大田区田園調布四―二三―三　田園調布マンション五〇一号
横山秀男（昭八）
札幌市南十三条西十七丁目
草野義一（大七）
東京都世田谷区新町一丁目二番五号
高田正明（昭九）
名古屋市昭和区川名町四丁目五四
清水淳（昭一七）
金沢市泉ケ丘二―四―二七

思って居ります。結婚以来折にふれ聞かされてまいりました学校の事、同窓生の皆様の事余りにも遠い北海道そしてまた小樽というところ、その中にある主人の学んだ学校の事、私には縁のない遠い所のような気がして居りました。此度主人と一緒に小樽の土地、そして学校を訪れまして皆様方の御人柄にふれ周りの景色にふれるにつれ、今更乍ら主人に対して軽い、しつとさえ覚えるような気持ちです。

卒業なされてから三十年、主人の御友達の御立派な皆々様に御会ひして我々女性には、はかり知れない、その中に友情と云ふものを深く痛感致しました。友情と云ふ言葉は私達は日常よく使って居ります。けれどあの小樽正法寺での御友達の法要、そして天望閣での夜を思い起こすにつけ、更めて、その友情と云ふ言葉のなんと皆様方にふさわしい文字であるか身をもって知らされました。一人一人の御顔を拝見して居りますと、三十年前の学生服を着た若々しい御姿、あのかたはこうかしら、このかたはこうなんではと胸のなかで一人で思って居りました。私共には娘と息子が一人づつ居りますが、娘の御相手には同窓生の皆様方のような学校を思ふ、そして友達を思ふあたたかい人を息子の御相手には主人が第二の故郷と思っている小樽の人が来ましたら、などと一人で空想してほほえんで居ります。北海道にまいりまして素晴らしい所をたくさん見物させて頂きましたが、特に私の頭の中をいつも占めている光景は天望閣でのこと朝の食事の時の光景をバスの中で学生時代にかえって、はしやぐ光景いまは、はっきりと走馬燈のように鮮明に浮かんでまいります。立派な御友達そして誰れにでも誇れる学校を持った主人はなんと幸せなんでしょう。

ほんとうに有難う御座居ました。また先生方にも御会いする事が出来まして此んなすばらしい先生方に導かれて三年間を過された皆様方をちよっぴり羨しいと思いました。都会の騒そうしさからはなれ、まはりを素晴らしい湾にかこまれて淋しいような静かな佇まいのなかで勉学にスポーツに過せるのはなんと楽しい事でしょう。ほんとうに有難う御座居ました。また機会が御座居ましたら是非小樽に連れていって貰い度いと思って居ります。此れからもどうぞ同窓生の皆様の温い友情におすがりして主人と共に頑張って行き度いと思います。

立石市郎

先年阿蘇登山に来熊した曽根君や水前寺を見物に来た宮内君に約束した北海道行が出来なかったことを残念に思っていますが小谷君から詳細聞きました。

九月二十六日マッキンノン先生が熊本へ来られました。熊本城と水前寺を案内しました。熊本城のカスガイを見て先生が私に問題を出されました。立石君よカスガイに関する三つの日本の諺を直ちに答へなさいと私は二つ丈けは答へられましたが残り一つは判りませんでした。

SはQに優先する

わが社は〝最善奉仕〟をモットーにSRQ方式による営業の推進をはかっております

S＝SERVICE(奉仕)
R＝RESULT　(貢献)
Q＝QUOTA　(割当)

第1……お取引先に奉仕（SERVICE）する

第2……その奉仕がお取引先の業績・成果（RESULT）に貢献する。

第3……それにより初めてわれわれの割当（QUOTA）が達成される。

わが社の使命はお取引先の技術革新・生産性向上・合理化に貢献することであり，SERVICEを第一義とし，SはQに優先するを合言葉といたしております。

丸嘉機械株式会社

大阪市東区豊後町41 <(941)-0271>

専務取締役　若山永太郎（S−13）

常務取締役　高野憲一郎（S−13）

昭和一二年卒

東京関西協議会

十月十一日、昭一二卒同期会、東京地区幹事牧田恒雄君が社用で来阪されたのを機会に、関西在住同期生の集いを持った。なほ、当夜は、故上家富誠君の遺児、上家富靖君にも出席して貰い、亡き父君の想い出を話していただいた。

同期会の問題について、次の協議が行われた。

(一)同期会として名称をつける件
会名を会員の提案により決定する。決定については東京地区へ一任する。

(二)『緑丘』を同期会の機関誌とする件
同期会として会員相互の連絡のため機関誌を持つ必要があるが、現在大阪で発行されている『緑丘』の二頁を昭十二卒のために提供して貰う。但し、機関紙である限り同期生全員が講読しなければ意味がない。従って、同期会として一括して講読を申込むこととしたい。紙面提供については出席の蔓目氏も承諾された。（未購読者のため特に四頁を印刷して別送する）

(三)会費徴収の件

(四)名簿作成の件

(五)本部及び全国地区割並びに各担当幹事委嘱決定の件

(六)事業計画について
右の議案については、東京地区で討議の上、北海道地区へ廻附し、同様討議された上、最終決定されるが『緑丘』の申込を明年一月から開始される予定なので、尠くとも十二月末までには決定されることが望ましい。

出席者　牧田恒雄（東京）八尾勝郎、林武、森川正明（大阪）山村太兵衛（京都）

客員　蔓目先輩　上家富靖君

（森川記）

右より　山村，上家，牧田，森川，林，八尾

田中彰

一口に卒業後三十年と申すとこれ人生の半ば小生も諸君同様に頭に霜を見る年配となりました。われわれの青春時代はまさに大動乱期幾多の友人は日本の新しき時代をみずして砲煙弾雨の間に散りました。誠に申すべき言葉もありません。生き残ったわれわれも破乱の人生を経てここまでたどりついたわけですね。一同曇り後晴を語り会いましょう。

昭和十二年卒の新しい正確な名簿を作って、今後の同期会運営の基幹としたいと思いますので、至急左記要領で御送り下さい。

記

送付場所　東京都中央区銀座東六の六　㈱岡福商店　牧田恒雄宛

名氏		備考
先務勤	社名	
	住所	電話
自宅	住所	電話
家族調書	（年月日） （年月日） （年月日）	

（官製ハガキで御願いします）

卒業三十周年小樽大会の写真を紙焼で左記に送付願います。アルバムを編集作製したいと思いますので、

豊中市服部本町五の四六豊中アパート三棟三〇一号　内藤好生宛

昭和十二年卒業 三十周年記念
全国大会に参加して
昭和四十二年八月二六日（到着順）

石川孝一

学校から正法寺、天望閣へと時間の経過に従って私はグングンと三〇年昔の多感な学生時代に引渡されて来た。この学園に学んだことを年毎に幸福と思い誇りと感じて来たが、この日更に深く感銘を新にした。

牧田恒雄

三十年の歳月を感じさせぬ元気潑溂たる顔、顔、顔、唯々感激あるのみです。お互に健康がこの幸をもたらしてくれました。

五年後の大会には更に元気で会いましょう。元気で行こう。

岡田春夫

学校をでて三十年目にあった友達の顔を見て、本当にすべてを忘れて了いました。ともあれ思想や環境やすべてをこゝに「お前、オレ」の学友はよいものです。

長谷川順治

学生時代運動に籍を置いた者が圧倒的に多かった。夫れ丈彼等は活力が旺盛なのだ。一寮の出席者は十一名だ、一つ釜の飯を食った奴と三十年振に会った時肉親に会ったような懐しさで一杯だった。

林　武

激動の三十年を無事に生き抜いて今日再び懐しい丘に登り友と手を振をにぎり、共に語り合った此の感激は生涯忘れることが出来ません。三十五周年の盛会がいまから待遠しい。

白潟良造

有為職変の三十年。恩師同志六十有余名に再会出来るとは夢にも思はなかった、幹事諸兄有難う。

永遠の青春、師弟愛、同窓愛を誇りに思ふ。全員長生きせよ!! 五年後の会合には全員出席しよう。

浜井清一

健康管理は勤め人の義務である。不健康で今回欠席の同志も多くあったことかと思はれる。今後一層健康に留意し次回の大会には多数出席し旧交をあっためるよう切望されます

竹島　旬

母校が小樽でほんとうによかったと思う。全国から参加した。あの盛大な同期会、三十年の壁は何処にもない変らぬ友情、出席してほんとうによかった思う。あの感激を忘れない。

岡田一次

五年目毎に卒業記念全国大会を北海道と本州と交互に開催するとのこと大賛成です。開催場所余り俗化していない温泉地を選んでチックリと懇談致し度いし。自己紹介の時間もたっぷりとかけ度いものだ。

田中正己

物故同窓五〇名。激励の三十年を憶う。漫談に花を咲せたあの芝生の校庭今はなし残念至極。

我等三十年目の顔合せ容姿変れど変らぬ心楽し。福田君の即席詩吟亦懐かし。

豊島保郎

夢にまで見た母校並に小樽の街を三十年振りにこの眠で見て懐しさより三十年の年月の経過を忘れ自分の年も超越して学生時代の自分の如き錯覚にとらわれた。相会する友を見てやはり三十年経ったんだなと我に返ったような気がした。

また五年後の再会を期す。

倉本福蔵

学園は昔と殆ど変りばえがないと印象ずけられた。昭和十一年から二十年迄の十年間、有為な青年が、日本の軍教に追いつめられ、軍教の師弟として軍教の下にたおれ去った。

その姿のように目視されたのは私一人だけであったろうか？そして卒業五十週年を再び母校でまみえん。

五十嵐良一

三十年の歳月のなんと永く、且短きことか。邪気なく、純粋に話合える場、同期の人にしくはなし。

人生のオアシス、楽しく喜ばし。人生は想い出の連続というがオアシスと名づく可き想い出はそんなに沢山はない。

山村太兵衛

夫婦で出席したのであるが、かけ替えのない北海道への旅行であったと終生忘れ得ない感激でした。

今回不参加だった人達とも是非逢いたく思うし、もっともっと語り合ふ時間の余裕が楽しかった。

森川正明

今度の同窓会で、やはり一番感激だったのは三十年振りに再会出来た級友との会見だった。『生きていてよかった』としみじみ思った。だから、正法寺の物故者慰霊の読経の声に予期以上に胸を打たれる憶いだった。戦争さえなかったら、物故者の中の半数はわれわれと同じように、明るく談笑出来た筈である。

戦歿した級友の犠牲を無にしてはならない。その為めにも、われわれは常に平和を希求すべきである。……と、さらに一層深く戦争反対の意識を胸に刻ざまれた。松尾教授提案の『平和塔』建設にも積極的に参加しましょう。

岡本元次

緑丘に学んだ幸福、よき友を持った喜びをしみじみ感じた。

緑丘独自の伝統こそがわれわれに最も大きな影響を与えたに違いない。学園よ栄えよ。恩師よ益々おすこやかにそして友よ元気に活躍あれす。出来ればもう一日位皆と小樽にいたかった。

岩佐　広

恩師や同期生の方々の元気な姿に接しこよなく嬉しかったが参加出来なかった人達とも今度の会には是非逢いたいものだ。

梅原音二

母校の正面玄関前で皆と記念撮影しながら思ったことである。かっては、その芝生の上で寝ころがりながら青空を仰ぎ理想を語り亦港に浮かぶブルーフアンネルを眺めては遠く異国に想を馳せたことであった。

今その芝生の上では図書館の建設工事が始り―既に計算センターは出来上っている―これ正に私共に追憶の集積の中から早く近代化への適応を掴み出すことを求めている現実ではなからうか。

それにしても発展の過程における人間と機械の調和は極めて困難な問題である。三十五周年再会の時は、私はこの気持をもつと確めたい。

須永誠一

三十年振りに懐しい小樽を訪れ、旧友に会ふことが出来ほんとに元気で生きてこられよかったと思いま

新海　巖

八月二十六―七日に地元小樽において開催された、卒業三十周年記念全国同期会はほんとに思ひかげない盛況で懐しかった。昨年秋から本年春にかけての予想では三十人―四十人位と思っていたのに、開催一週間から十日位前にやっと確定人員がつかめたので、宿泊の方で転手古舞したのには閉口した。奥さん方には少々悪い部屋が当ったが御勘弁願い度い。ともあれ三十年振りの再会とあれば、一寸見た「しゆんかん」誰だったか仲々思い出せないものだ。有るべき筈の頭髪は何処へやら、無い筈の「小じわ」がちらほらと。また姓の変った人の多いのにも驚いた。この友にも「ムコ殿」が多いものかしらね。こういう小生もその一人だが。

恩師の方々はわれわれより以上に顔が解らなかったと思う。招待した先生方全員が来られたことはほんとうに嬉しい一つです。

地元幹事として、先般の挨拶状にも記した通り、何もかも不行届きの点が多く、切角遠来の各位には申訳なく思っております。五年後の再会の参考迄に左記して擱筆します。

記

一、開催日前少くとも一ケ月前に出欠を確定したい（会場・宿泊・土産品其他準備の日数が必要）

二、勤務先、住所、姓名等の変更は速かに緑丘会（本部、支部何れにも可）に通知のこと。特に本人不幸な事になった場合は遺族にも平常から心得ておいて貰い度い。

三、三十年振りの再会のためかも知れないが、一泊一夜の語らいでは時間が少な過ぎたこと。五年毎に開催ならよいかも知れないが、一考を要す。（二十七日の朝食の時はほんとにもう少し時間が欲しかった）

四、家族名簿の作成が必要かと思われる（子供達の結婚問題もあるしね）

五、開催時季のことですが、四・五月頃から八月末迄がよいと思う。

六、開催地元幹事が全員協力してやること。各部処の担当を定めてやれば尚ほよい。

七、奥さん方の多数出席を希望する

八、参加費は今回の場合を参考にして欲しい。

九、出欠其他連絡の必要上、全国地区別に幹事を配し、地方幹事が責任を以て自分の傘下のことを取纒め、一括開催地元幹事に報告連絡すること。（今回東京地区の牧田中沢両君の処置、本当に感謝しています）

十、浜井応援団長の応援旗、持参出席は毎回お願し度い。

では皆さん五年後の再会迄元気で頑張りましょう。

須永千代子

突然主人より感想文を書くようにとの話、何から書いてよいやら分りませんが私の見た事、感じた事を拙い文では御座ますが書かせていただきます。奇しくも小樽高商出身の主人と結婚致しまして三十周年の催しに同行出来た事は私の一生を通じて何よりの主人からのプレゼントと

緑丘人物譚 (19)

北海道食糧事業協合組合
理事長
今野吉之助（大11）

今野君は食糧需給調整の功により藍綬褒章を受けられた。彼は私と同期の緑士会員の一人である。およそ緑丘人には変り種が多いが、わが今野君もその変り種の部類に属する人と言うべく而も極く傑出した人物であり、夙に北海タイムス紙が一度ならず世に紹介したこともあるので、道内外を問わず知名の士であることに間違いはない。

同君は秋田県本庄に生まれ、小樽高商めざしての来道が住みつく縁となり、高商卒業後北炭に入社したがハダがあわず、道内の小樽農産物検査所に転じた。十三年たって所長代理となり、戦時統制時代にはいってから日本澱粉統制会社の札幌支店長に抜擢された。昭和十六年食糧営団が誕生、初代小林篤一、二代小谷義雄のあとをひきうけて三代目の理事長に就任、二十六年改組まで五年間、主食欠配時代のいちばんひどいときにぶっかるが、いい体験になりネツカラの米屋の大御所たるの素地をつくり、やがて企業の自由をむかえ、三十一年傘下十四の協組を会社にきりかえ、連合会を今の協組組織にして理事長におさまった。この協組は道内十四の米穀卸し会社と三千の小売店に米を流す配給元、つまり六問屋である。ライバルのホクレンの二〇%に対して道内の配給米の八〇%をあつかっていて、扱い高は東京、大阪につぎ、経営内容は日本一といわれ、従って理事長今野は全糧連の最古参でもあり智将として全国的な顔にのしあがった。

在学当時はトツトツたる東北弁の純トな学生で、別に特色があったような記憶もなかったが去る昭和三十九年初夏卒業以来四十二年ぶりに札幌で邂逅、藻岩山の山上で一時間余り快談したことがあったが、学生時代には想像もしていなかった慈顔に接し感に打たれたことだった。その折仏面彫刻のことども色々話を承はり、拙著「はがくれ紀行」の一篇「弥勒面」に書き残した通り其後私も無理に御願いして弥勒菩薩の面を彫って頂いたが、入神の作は決して余技とは思えず、二十年近くの歳月に亘りノミをふるい、その道の大家大内青圃先生から吉甫の号を頂いたと聞くが大したものである。私は考える。剣豪武蔵は沢庵に師侍し光悦に学んで人格を陶冶し、筆墨、彫刻にいたるまで其の名作を残し、愈々剣の道を極めたと伝え聞くが、わが今野君もその執念のノミをふるい仏面彫刻に心魂を傾注されたところに、ふくよかなる人格が形成され、全国的米屋の大御所に推挙せらるるに至ったのではあるまいか。

今野君自身が言っているように「彫っている時の気持ちは実に楽しく何ものにもかえがたい、百人の人が平和な気持ちになれば、それで充分安心、それ以上求めるものはありません」と。その心境こそ今日の今野君を築いたものではないだろうか。それにしても同君は相変らず高血圧症状尚完治せず、御令室また食道癌の疑いで御静養中の由、命あっての物種、何卒御自愛の上、天寿を完うされるよう緑丘人こぞって御祈り致しましょう。

（追記）御病気中の奥様は薬石効なく十月十四日永眠遊ばされたことを皆さんにお知らせして、そのご冥福をお祈り申し上げます。

執筆者
宮地邦升
（大一一）
日邦工業株式会社
監査役、相談役

あらゆる建築設備の
設計・施工
冷房設備・空調設備
暖給排水設備・衛生設備
配管工事全般
日邦工業株式会社
取締役社長　井藁政市
相談役　宮地邦介（大11）
本社　大阪市西区南堀江1丁目3番地　電話大阪（531）代表 8461～5番
出張所　堺市浜寺石津町東2丁702番地　電話 堺（41）0776番

「外人講師特集号」原稿募集

すでに御執筆下さいました方には誠に申訳けありませんが、このマ先生特集号で紙数超過のため外人講師特集号は正月号に発刊することにいたしました。従ってメ切をさらに延長しましたので御希望の方は振ってご執筆下さい。

メ切　十二月二十日（編集部到着）

氏名	専門	在職期間
F.W.ステッドマン女史	英	明44. 5. 1講師(非)—大 2. 5.31解嘱
ウイルヘルム・フート	商品理化	明45. 4. 1講師——大 9. 2.29解嘱
L. ヒユーゴー・フランク	商品実験	大 2. 4. 1講師——大15. 3.31解嘱
H. ウオーター・テーラー		大 2. 4. 1講師——大 5. 9.21解嘱
H. W. ウイルコム		大 3. 4. 2傭——大 6. 3. 1解嘱
関恩福	支	大 2. 6.25講師——大 4. 8.31解嘱
		大 6. 9 30講師——大11. 7.31解嘱
T. ジョーンズ		大 4. 5. 1傭——大11. 1.17解嘱
H. M. ケニヨン		大 6. 4. 7教師——大 6. 8.31解嘱
ダニエル・ブルック・マッキンノン	英	大 6. 9. 5傭——大13. 3.19兼任取扱 昭17. 3.31解嘱
K. バグレイ		大7. 5. 18嘱託——大10. 3.31解嘱
E. ジョーンズ		大 7.9. 23講師——大 8. 3.31解嘱
N. A. ネフスキー	露	大 8. 5.31講師——大11. 3.31解嘱
ジヨオ・アルベール・デーゲン	仏・独	大 9. 9.28傭——昭 6. 7.20解嘱
アーノルド・ブラドリ・ラウンズ	英 コレポン	大11. 1.19傭——大14. 7.31解嘱
シメオン・N. スミルニツキー	露	大11. 3.31講師——昭 3.10. 1教師— 昭20. 3.31解嘱
関益良	支	大11. 7.24講師——昭14. 3.31解嘱
R. M. カメロン		大14. 9. 1傭——昭 6. 3.31解嘱
F. ケーリー		昭 2. 4.15講師——昭 2.11.25解嘱
H. F. ベンスン		昭 2. 4.15講師——昭 2. 6.11解嘱
F. スミス		昭 2. 4.15講師——昭 2.11.20解嘱
R. P. モリソン		昭 2.11.25講師——昭 5. 3.31解嘱
T. M. フイギス		昭 5. 6. 4教師——昭 8. 3.31解嘱
J. W. エヴアンス		昭 6. 5.12教師——昭 8. 7.31解嘱
Y. パーシユ		昭 6.10.26講師——昭 7.12.20解嘱
大黒マチルド	仏	昭 6.10.14講師(非)—昭20.11.30解嘱 昭27. 5. 1講師(非)—昭36. 3.31解嘱
R. ヘンクル	英	昭 8. 1.31講師——昭10. 3.31解嘱
フラク・ジエームス・ダニエルズ	英	昭 8. 6.14教師——昭11. 3.31解嘱
ラランク・F. フアミンジヤー	英	昭 8.10. 7教師——昭12. 3.31解嘱
K. クレルクス	英	昭10. 3.31講師——昭14. 8.31解嘱
H. メーチン	英	昭11. 6.13教師——昭14. 3.31解嘱
G. R. ストリー	英	昭12. 6.15教師——昭15. 3.31解嘱
M. ダンカン	英	昭14. 9.30教師——昭15.12.31解嘱
W. クロル	独	昭14. 9.30講師——昭17. 4.30解嘱
F. F. ギルボーイ	英	昭15. 4. 1教師——昭15.12.31解嘱
C. ギルボーイ	英	昭15. 4. 1講師——昭15.12.31解嘱
寓乃昌	中	昭17. 3.31講師——昭17. 8.31解嘱
韓樹豊	中	昭18. 1.31教師——昭21. 1.31解嘱
ソラノ・デンケル	独	昭17. 4.30講師——昭20.11.30解嘱 昭21.11. 1嘱託——昭22. 8.30解嘱
K. シツケ	独	昭22. 9. 1講師——昭24. 9.30解嘱
S. デンケル	独	昭24.10. 1講師——昭25. 3.31解嘱
A. G. フーベル	独	昭25. 4. 1講師——昭36. 3.31解嘱
A. N. クレイグ	英	昭26. 4. 1講師——昭27. 3.31解嘱
L. クレイグ	英	昭26. 5. 1講師——昭27. 3.31解嘱
J. ゴードン・マックラウド	英	昭27. 4. 1講師(非)—昭35. 3.31解嘱
レオン・M. ゾルグロッド	英	昭30. 9.11講師——昭32. 9.10解嘱
R. K. リー	英	昭35. 4. 1講師(非)—昭36. 3.31解嘱
S. リー	英	昭35. 7.16講師(非)—昭36. 3.31解嘱

表紙絵について

菅谷重平先生今回は休憩で、正月号に再び登場いたします。

表紙絵は秦森康屯君（在フランス）がフランスへ出発時酔ばらって編集子宅に現われ、墨を持って来い、色紙をくれと描きまくったその一枚です。

巴里からの通信（十一月十六日）によると十二月十二日マルセーユ出航の船フランス郵船ラオス号で帰国の予定、十二月になったら南仏を廻ってマルセーユへ出ようかと計画しております。船は来年一月二十五日神戸着の予定ですとある。帰国後個展が東京・大阪・広島で開催予定。緑丘人の御高覧を乞う。

菅谷重平先生のあとは四十三年五月号から新制作派の尾形圭介君（昭三四）が予定されています。

で、感傷的に反趨している処に、三十年前の「音二」の像がある。

掌て、私は大蔵官僚の梅原君に、ネオ・ビュロークラットを期待した。今また私は彼に新しい財閥の旗手を期待しよう。

ピンチヒッターに出たのだから、次回は正常なルートにのって貰うため、バトンを岡田春夫君へお渡しする。

（昭一二　森川公認会計士事務所）

ゆで小豆の味

七戸真次（東京支部）

〝高商出てから十余年生時代でしたが十余年どころか二十四年も経ってしまい、紅顔の美青年たちは気ばかり若くても、そろそろ薄くなったり白くなったりし始めたのに驚いております。

それでも高商時代の思い出はつい昨日の事の様になつかしく思い出されて来ます。その一つにこんな事がありました。

我々が入学した昭和十六年は、日本が大東亜戦争に突入した時でありやがて繰上げ卒業、校門から営門へと、激しい変化をみせ我々の仲間の殆んどが校門から陸へ、海へ、空へ、と二度と会えぬかも知れない思いで別れて行った時代でした。在学中に食糧も次第に統制となる反面我々の食慾は非常に旺盛となる頃で、何だか何時も腹が空いていた様に思うのです。

私はその頃北斗寮におりました。寮では賄婦さんたちが賄征代にそなへて貴重な食糧は、上手いこと何処かへ隠しておりましたが、最も狙はれたのは砂糖だったと思います。その砂糖が偶然或る日見つかったのです。しかも小豆と一諸に。早速数人が集って真夜中の「ゆで小豆」作りを始めました。砂糖は沢山入っているのだからさぞ甘いだろうと期待しながら食べたのですが、何とも甘くないのです。もっと砂糖を入れても駄目なのです。西村や千秋庵にゆで小豆があったかどうか忘れましたが街で食べた甘さがないのです。店やでは特別な作り方があるのだろうなどと云い合ったりしてその時が過ぎました。

休暇で家にいる時に、何かの時に母親にゆで小豆は甘くない話をしたところ、彼女は笑い乍ら「それでは作って上げよう」と云うことになり我々が作ったのと同じ工程をとって行きましたが、最後に塩を少し入れたのです。我々はこれを知らなかったのです。その味は全く街のゆで小豆と同じではないですか。

私はこのことを思い出す度に、幸福と云う甘さは、不幸と云う塩があって初めて出て来るものなのだ、と思うようになりました。月給が少ない、病気になった、女房と喧嘩したなどみんな塩だ、と自分に思わせるようにしたいと思っているのです。只終戦前後のように砂糖の全くない塩だけの〝ゆで小豆〟にはなりたくないと思うのです。

あの丘の上の古い寮の台所のいろりを囲んで語り合った人達、消燈後の部屋でいつまでも議論をし合った時代、その時は流れ、二度と会えない人達のことをなつかしく思い出しています。死の入口がすぐそこにあることを知りながら、多くの人達の心にふれ、人生の本質を知ろうとしていた頃のことを忘れられないのです。

次の回は多分その時一緒にゆで小豆を食べたのではないかと思われる大阪にいる松沢久隆君にお願い致します。なお同君はかつて代表的紅顔の美青年であり、現在は代表的白髪の紳士であることを申し添えます。

（昭一八　富安株式会社）

老夫婦

白瀬治三郎（大阪支部）

愚妻はもう二ケ月で満六十八才になるが本人はまだ至極気が若く、自分の娘より若い人ともぢきに話相手にもなり、市の婦人学級の世話役などを買って出たりしているが、電車の中ではいつも「お婆さんどうぞ」と席をゆづられるほど一見齢相応の老婆に違いない。私がいわねば一年でも顔に剃刀をあてることがない、どうひいき目に見ても奇麗な婆さんとは思えない。根性は、唯正直一途、世話好きで、若い頃から無駄使いはせず、まづサラリーマンの妻としては適格者だと思うが、融通性の乏しいことも一つの欠点だ。結婚後既に四十二年過ぎたが、其間随分世間並みに夫婦げんかも度々した。でも子供や孫ができ、いつもお互に反省し、老成し、あきらめ合っているうちに、いつのまにか言葉には表現できないお互ベターハーフとなって友白髪の今日に至った。子供は皆膝下を離れて、たった二人だけの家庭になった。毎晩夕食後型の如くテレビを見て九時過ぎにはどちらからともなくねむくなり就床、別にこれという話をするでもなく静かにねむるのだが、それでいて其無言の片方がそばにいることだけで結構安心感というか満足感というか、何となくたよりになるように思われる。これが本当の夫婦と云うものではなかろうか。

支那に居た頃、子供等の度々の病気、天津の大水害、大東亜戦争前後の東京や疎開先での数えきれない苦労、世間並みの嫁姑の不和等々、沢山の人生の試練に会ったが、其都度二人がいつもどうにか心の手を離さずにたえしのび乗り切ってここまで辿りついた。凡そ老夫婦関係というものは幾十年かの長い歳月をかけて積み上げた修養の結果ではなかろうか。天地の大原則陰陽の原理に従って長年来たからこそ、今日の老夫婦の安楽の境地に到達したのだと思う。実に有難いことである。

高砂やこのからだにも帆をあげて

みなもろともに末は爺婆。

次回は金栄酉吉さんにお願いします

（大七）

（まんびつ執筆者）

（客員）松尾教授

（大三）高橋徹男、下吹越栄吉

（大四）八木康之助

（大六）伊東小四郎

（大七）白瀬治三郎

（大八）戸井正三、大野純一、三好長次、増井得三、谷本朋次、郡菊之助、西村百太郎、松本義一、大山謙吉、広岡一男、福田誠、藤居元三

（大九）菅谷重平、奥村義信、小島憲市、奥田直

（大一一）宮地邦介、小橋庸三、杉山昌作、神沢重治、梶川亨司、功刀素重、越崎宗一、大泉行雄

（大一二）田中弥三郎、塩谷精一郎、大久保鹿式、大井義郎、渡辺一夫、小河成美、池田繁正、田中実、穴釜升夫、玉井武、日南田美文、佐藤信雄、若林周五郎

（大一三）古関周蔵

（大一四）畑信太郎、片岡亮一、小武海鉄郎、松原治郎、森下弘、北村良吉、桐田鉄郎

（大一五）増田常次郎、中野清一、白木小一郎、近藤徳弥、津久井七雄、大平善梧、西野嘉一郎、竹内隆、吉田荘太郎、祐村脩平、松村義公、川上貞光

（昭二）黒羽秀夫、牧野吉男、岡田政治郎、堂城不二人、友沢和一郎、小貫武、手島恒二郎、山中晴雄、太田英治、広瀬久一、石田平八、中沢勝平、加藤正善、古川敬止、清水文男、茂垣英夫、岩岡秀三

（昭三）佐竹繁寿、樋山三郎

（昭四）小山健児、湊静男、高橋一男、玉井英雄、宇山慶三

（昭五）池田啓助、井藤久也、吉田友記、北村太治郎、横井七之助

（昭七）八家要、鹿島憬策

（昭八）土岐秀雄、本間広松、小池三郎、高見美雄、会津幸雄、鈴木三七

（昭九）梅野弥太郎、塚越誠、本田正一

（昭一〇）篠崎万治郎、若月雅司、北村匡弘

（昭一一）浅野潔、土屋龍郎、木下春雄、三崎嘉郎、島崎保信、中尾弘、中道良徳、川原俊一、松井要吉、進藤彰、越崎清二、中木平三郎、丸山一郎、紫竹亜津視、秋葉隆一郎、蕃目英三、本間誠一、鎌田正三、木村頼雄、小林啓作、角谷栄作、上野茂、村山重三郎、国安猛、小島典春、砂子沢正

（昭一二）内藤好生、皆川荘一、矢野正郎、宮内美雄、木内武之助、牧田恒雄、本間英作、森川正明、石川孝一、浅田厚、岡田保司、山村太兵衛、佐々木成彰、岡本元次、立石市郎、佐藤清治、山下政道、高橋景則、金三郎、須永誠一、白潟良造、曽根重四郎、大井健一、梅原音次、森川正明

（昭一三）江川裕一郎、若山永太郎、木村章三、山本俊雄、松ケ野寿夫、丸山弥、平木勇三、金垣英雄、柳川憲夫、西谷作太郎、森川正明

（昭一四）井原利勝、大沼誠治、北村幸、谷英純、沼田博、太田正勝、壱岐隼雄、河西辰男、沢村重一、石黒政夫、北条恒一、三浦正飛塚誠一、竹島篤二郎、金井勇、八木安、野村鉄太郎、福地貞雄、樫村久好、尾崎哲平、沢井道成、隈田鐵三、市橋宏一郎、内藤義信

（昭一五）柿本恒一

（昭一六）相原正美、相田正、河上鎮男

（昭一六後）中村平之助、小林芳美、松村克己、山内孝、杉原貢、久保宗司、若林幹一、阿部英一

（昭一七）籾谷真一、長尾昌弘、桑野泰次郎、阿部敬作、越智直行、山田光男

（昭一八）亀井尚一、湊誠、島田恵治、田森誠一郎、七戸真次

（昭一九）高山博男、荻村茂雄、赤津俊樹

（昭二三）牧口富伍、福田和、服部奎吾、北野巧

（昭二五）我満博仁

（昭二九）古内一成

（昭三〇）石津洋三

（昭三一）小田島和夫

（昭三五）佐藤良雄、本前勝支朗、長津行高、猪浦淳一

（昭三六）神田隆志

まんびつ執筆年次ベスト5

先輩・同輩・後輩に執筆バトンを渡して昭和三十三年から今日まで上記のように続けて参りました。

何年の年次がベスト5に入ったでしょう。

第一位	二十六名	昭和一一年
第二位	二十五名	昭和一二年
第三位	二十四名	昭和一四年
第四位	十七名	昭和　二年
第五位	十三名	大正一二年

まんびつ執筆者は年次の面子にかけて棄権なきよう同期の方々の支援をお願いします。

東鏑倉庫株式会社
本　社　大阪市北区中之島5丁目17番地
大阪支店　電話大阪（443）8731（代表）
取締役会長　佐藤栄治
相談役　堂城不二人
茨木支店　青森支店　東京営業所

まんぴつ五人集

次回

中田新平（大一一）
小西征夫（昭二）
岡田春夫（昭一二）
松沢久隆（昭一八）
金栄酉吉（大七）

母校とは

大泉行雄
（横浜支部）

「母校を訪ねる」ということがある。出身校があるかぎり、その出身校を訪問する機会は時に生ずることだが、そのとき「訪ねる母校」とは、いったいなんなのだろうか。わたくし自身は、教師という職業にたづさわっている関係上、往々にして「訪ねられる母校」の側に、立たされる場合もある。

それにしても「訪ねる」母校とはそもそもなんであるのか。ふつうに母校訪問といえば、まず自分たちが、かつて学んだ学舎をおとづれ、そこで旧知の教職員がた、さらには新らしい学校の人たちにも会って懐旧の思いに時をすごす情景が浮んでくる。

だが、われわれのかって通い、そこで日々の学校生活が営まれた建物や四囲の環境は、いつまでももとのままであるのではない。本誌前号のこの欄にも、四十年ぶりに緑丘の母校をたずね、往時の面影を追い求めながら、ほとんどそれが失われていることの感懐を述べた一文が見られたが、いまの時代には、永遠なるべき山河すらも、たちまちその形態を変貌させられるのであるから、人の造った建物の転変など、まったく日常の茶飯事になってしまった観すらある。それでも学校が、もとの敷地、キャンパスを維持していれば、まだしもである。時には、自分たちが学校生活をした場所とは、全く別のところへ学校の移転がなされてしまうようなこともあるのだから、想い出の学び舎というようなことは、母校という意味から切断されてしまうことにもなる。

母校とは、自分の出身学校だと単純に割り切れば、形相が変ろうが、もとの人がいなくなろうが、学校そのものが存続しているかぎり、そこに母校があるといえるだろう。しかし一人一人のひとの気持のなかに生きている母校というものは、そのような形式的のものではないようだ。

わたくし自身についていえば、自分にとっての母校とは、なによりも先に、指導をうけた先生とのつながりである。それとならんで、ともに学び、そしてともに学窓を巣だった同期の仲間との結びつきである。一変してしまった建築物から、めいめいがその胸のなかにあたためている母校像へ、どのようなつながりを見いだすことができようか。幸にそこに、旧知の人を求めることができたなら、そのときはじめて、胸中の母校像に火が点じられることになるのではないか。肝心なことは、結局、人と人とのつながりということだと思う。学窓を長く去って、さて母校を訪れるというときの気持には、なによりも旧師にまみえるとの恩念が、もっとも強くはたらいているのではなかろうか。すでに旧師もなくなってしまった学校を、たまたまの所用で訪ねることがあっても、母校を訪ねるというほどの緊張は、わたくしには湧きあがってこないのは事実である。

それから同期の仲間である。同じ時に、同じ所で、同じ師について学んだ仲間である。何年、何十年たっても、この仲間が集ってかもしだす雰囲気のうちに、その人びとにとっての母校があるのだと信ずる。一人一人のひとの、生活のなかに浸透しており、そのひとの人間そのものをつくり上げているような母校というものは、たんに出身校というような形式的のものではなくて、かっての日に結ばれた人と人とのつながり、そしていまもなお胸のうちに生きている。そういうつながりだとわたくしは信ずる。

次は畏友中田新平さんにおねがいいたします。

（大一一　神奈川大学）

〝初めて知る まんぴつ五人集〟

岩岡秀三
（岩手支部）

遙かに東北の辺陲より初秋の深夜、奥歯の痛みをえつつ釈明やら、御詫びやらを兼ねて一筆啓上致します。

私は昨秋頃から青森県八戸市に来て居り御来翰の宛先岩手県軽米町の方は無人で郵便受函を出しただけで月に二三度一両日宛帰るだけです。但し電報丈けは八戸の方へ電話で廻送して貰っています。他の文書の方は約十日置きに帰ったとき見て処理し、今まではそれで結構用が足りていました。先般、いま電文はハッキリ覚えていませんが貴兄より、原稿の督促と急がねば締切りに間に合わ

ぬ旨の電文が廻送されて来たので、私のために締切れずに御迷惑かけてはと存じて原稿は当分書けぬと御返事申上げました、其後暫く経って軽米町の自宅の方へ帰り御送附下された緑丘誌と原稿紙は封を切って見たが、誌を繙くまでには到らなかったのです。この二三日やっと緑丘誌を拝読して初めてまんぴつ五人集なるものの存在を知りました。さては茂垣氏より再度にわたって繰返し話されたのも之だったのかと、初めての委細のみ込めた次第です。左様でしよう。私は実は緑丘誌を見るのも始めてで、だんだん読んで行くと「年次の面子にかけて棄権なき様…」「今回昭和十一年が一人脱落…」と少々義憤に似たものを感ぜずには居られなくなりました。緑丘誌を見ていないものはそのバトンタッチのことなんか少しも判らない。茂垣氏も私はまん雑五人集のことを知っているものとして、話していたのかも知れぬけれども、私は単なる寄稿のことと解していた、寄稿するからには人に読んで貰える何かがなければと苦慮はしていたのですが……昭和十一年の脱落者もヒョットしたら私のようなケースではなかったかと案ぜられます。

もともと義理人情とかにはピンと来る私です。「飲みに行こう」と誘われればノーと答うることを不義理と考えたものか、試験の前日でも地獄坂を下って行った私です。それが学業にも延いては処世上も大変損した訳です。が左様と知ったら昭二の面目にかけてもなどとは云はせぬ処でした。

然しそれはそれとして、私は十数年前から三十年来の酒をフッツリ断ちました。そして暫くしたら人間は体の運動をせねば不可ぬとシミジミ感ずる様になりまして、私は学校時代ランニングも得意な方ではなかったけれども走ることが一番よいと考え当初は天気さえよければ日に二粁宛走り続けました。それが此数年一粁に落ち、ヤヤ憶劫になって来ていました。年の事はノーコメントなれど只今六四才です。

それが昨秋のこと、私の若い弟妹夫妻共が本業の外にこの八戸市にボウリング場がないと云うのでそれを始めたので私も幾許かの出資をしてそこへ出ることにしました。走るのが憶劫になって来た矢先のこととて早速若い連中に交ってソレを始めています。ゴルフをやる人達から見たら大人気ないかも知れませんが、私は結構之でいいんです。上達は中々ですが、どうやら三度の食事と同じ位好きになっています。丁度よい運動でもあります。現に先般昭二会にて渡道の折には札幌、旭川、釧路、室蘭、函館と各ボウリング場を視察方々ボウリングその物を楽しんで参りました。若し幸いにしてこの御託状を兼ねた妙な文が五人集を埋めることができるならば、次回のバトンは札幌に居らるる畏友小西征夫氏に御願いします。

随想

森川正明
（大阪支部）

「まんぴつ」の執筆者岡田春夫君が目下北京へ出張中なので、そのピンチヒッターに指名された。

梅原君の「友を談る」（前号まんぴつ）を読んでいると、三十年前の薄暗い編集室が浮んで来る。今度母校を訪ねて、大講堂の下に移った編集室をのぞいて見たら、やはり昔の通り乱雑であった。ただ、黒板に、「マルクス経済研究」とか、我々の時代では口にしても睨まれるような言葉が書き記るされていたのが、時代の相違を感じさせ、羨しいなと思い、涙ぐましい感じだった。散らばっている学生新聞の論説を、捨い読みしていたら、「学生一般の意識が足りない」と云うような論説だったが、そう云う点ではやはり、我々の時代とあまり変っておらない感じであった。確か、林健三氏か高橋亘氏かが編集部を主宰している頃、やはり「意識の欠如」と云う論説を掲げて、一般学生にアッピールしていたことを思い出す。

それにしても、今度の「羽田事件」では、学生に対する風当りは一般も、ジャーナリズムも相当強いようであるが、その非難の一つに、一握りの学生が学内を自由にし、そのために他の一般学生はついて行けないで傍観者的態度なのだ、と云うようなことが云われているのが、何故一握りの学生の自由に学生運動をきかせるかに問題があるのではないだろうか。一般傍観者的学生にも、一握りの学生にその独断を許している誤りがあるのではないだろうか。数の上から云って、傍観的学生の方が遙かに多いのだから、何故、その学生諸君がそれぞれの立場から一握りの学生と理論斗争を試みないのか。結局、一般学生は不勉強なのではないか。「緑丘新聞」の論説を想い出してそんなことを考えさせられたのである。

ところで、梅原君の「友を語る」の中に「時間の累積の中で形成された歴史的なものに愛着を感ずる」と云う言葉があるが、これは特に梅原君だけのものではない。悲惨な戦禍の中に埋没された我々の青春に対して誰か愛惜を持たぬ者があろうか。

同じ土壌で発芽した種子が、歴史の流れに流されて、異った岸辺に開花したとしても不思議ではない。

「人間の意識がかれらの存在を規定するのではなくて、人間の社会存在こそがかれらの意識を規定する」と云えば、彼に、それは既に批判されたブハーリンの機械論的唯物史観じゃあないか、と怒られそうだが、優秀な官僚として十四年、財閥の高級管理職として十六年の、その集積の上に築かれた梅原君の理念と、階級政党の代議士としての岡田君の理念の間に、距離があったとしても、それは当然のことだ。だが、この当然のことを、尚、「友を語る」の中

僕の書斎

後藤栄一郎（昭和七年）
（青森 株式会社 角弘社長）

青森市は終戦の二週間前、B29に町の九割を焼き払はれた。

その青森市に昭和二十五年新築の家の一部に僕の書斉兼応接室が作られた。当時は、まだ新しい建物であったが、もっぱら雑事にばかり使われ書斎としての努めも果さず現在に至っている。最近はまことに風采のあがらぬ十二畳の洋室となってしまった。またこの書斎は国道に面し、自動車の騒音に悩まされて静かに読書することも困難である。

書架や書棚には関係会社や団体の資料や、または目次だけを見て積み重ねた書物だけで、名のある書物は一つも見当らない。書物は時々処分整理するが雑然とまた溜ってくる。

最近ひと整理したが、あとに残したいものはやはり学生時代の手垢のついた書物で、読みかえしてみたいと思う気持がしきりである。

そのほか歳をとったら勉強したいと思って集めた交通関係飛脚制度や海上輸送の書物が一部残っている。だがこれもいつ手をつけるか見当がつかない始末である。

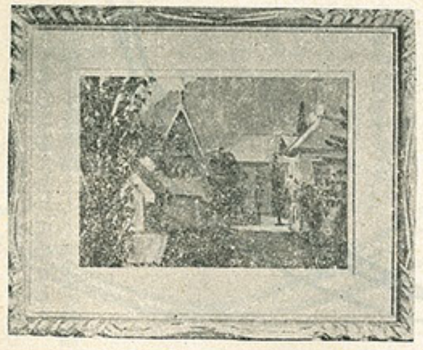
書架の一つには北斗寮で使い戦争中防空壕の敷板に使い三度目の役を果している組立式書架もある。

何も風情のない書斎であるが入口の壁にかかっている油絵が一枚ある。

これは小樽の人の手になるもので母校の入口から校舎を眺めた極めて印象的な絵である。

冬の夜更けに近くの青森港から聞こえる連絡船の気笛を聞いてこの絵を眺めていると、小樽の町の生活がたまらなく懐しくなることがある。

先日この書斎を整理中一片の書を見つけ出した。



浜林教授が私の卒業に際して寄せられた書である。

For mr. Goto
To know
That which befor us
lies in daily befor,
Is the prime wisdom.
——Milton——
I Hamaba yashi
Fel. 29. 1932.

懐しい先生の筆跡である。

三十五年前の在りし日の先生の面影を偲び、またこの書の意味もようやくわかりかけてきた自分の年令をいまさらのように考えさせられる。

次の「僕の書斎」は戸谷太通三氏が登場します。

積水化学工業㈱
チッソ㈱　特約代理店　プラスチックの綜合商社
旭化成工業㈱

田中弥商事株式会社

取締役社長　田中弥三郎（大12）

（本　社）大阪市東区北浜2丁目74番地　TEL㊐6556代～9
（東京出張所）東京都千代田区神田淡路町2丁目19番地　TEL㊐2271・5259
（九州出張所）福岡市奈良屋町2番19号　TEL㊐3391・6022

「緑丘」42年度申込者氏名（六）

（十一月三十日現在）

(あ) 有我栄一、荒木英二、阿部卓治、安達謙、安藤正己
(い) 岩国秀三、伊藤幸平
(え) 遠藤真吾
(お) 大平善梧、岡部武雄、小原芳春、大島三郎、大山謙吉、大隅弘
(か) 河井弘之、加賀保広、風間善一、加藤敏、鎌谷勤
(き) 木嶋正、木全三郎
(く) 栗原軍司、国弘勒之亮、桑嶋喜助、工藤久吉、草野義一
(こ) 小林芳美、小山猛
(さ) 笹原英信、佐藤一郎
(し) 七戸真次
(す) 杉本敏雄、鈴木博
(た) 高木正夫、谷黒正二、竹中正親、高木光孝、田中彰、田崎勝次郎、田中康夫、田中繁良、谷口博夫、高橋正也
(つ) 月館健治
(に) 西田英夫、西山正夫
(の) 野又貞夫
(は) 林与四郎、馬場正治
(と) 豊島保郎
(ひ) 樋口健三、平間義二、藤本孝吉、藤本雅寿、船津皐一、藤田精一
(ふ) 本田正一
(み) 宮内美雄、宮脇音次
(む) 村岡英一、村形庸雄
(も) 森下弘
(や) 矢野正郎、山崎吉郎、山崎政雄、山家利典、山崎丈夫、山本祐一
(ゆ) 弓削実
(よ) 吉沢正雄、吉田荘太郎、四谷宗義

恩師考

渡辺龍聖先生と滝廉太郎

滝廉太郎が希望を抱いて、九州竹田から上京、東京高等師範学校附属音楽学校に入学したのは、彼の十四才の時であった。

予科の頃は、一般学科だった為、及落会議にかかる程だった。田舎から出て来て、初めて外国人に教わったので、無理もない事だったろう。

宿の世話になっていたのは、同校教授小山作之助先生の宅であった。先生は彼の音楽に対する才能の非凡なるのを感知していたので、同僚の幸田信子教授にも依頼して、やっと本科へ進級した。本科専修部の出来は美事なもので、明治三一年七月首席で卒業し、引続き母校の先生となって、音楽研究に没頭していた。

其頃学校の内部では、渡辺龍聖、小山作之助両教授が、又外部では伊沢修二、島田三郎両氏等が、議会へ学校独立の猛運動を起し、それがやっと効を奏して、明治三二年四月高等師範学校から独立して、東京音楽学校と改称、校長心得に渡辺龍聖先生が任ぜられた。

渡辺校長は、学校の改革を企て、内容の充実を計ると共に、音楽の存在を遍く社会に知らしめ、その地位を高めようと試みた。

文豪島崎藤村が、選科ピアノ科に学んだのは其頃で、当時藤村は二七才であった。

渡辺校長は、名実共に音楽学校としての最高機能を発揮しようとして明治三四年三月三十日、中学唱歌の選定出版を試み、同年五月十八日、十九日の両日、音楽学校に於ては最初の、中学唱歌披露演奏会を同校内で催した。

「荒城の月」「箱根の山」「豊太閤」等十三曲が演奏されたが、両日の唱歌中で、滝廉太郎作曲の「荒城の月」が一番喝采を博した。

当時の作曲界は、作曲と称しながら旋律作法の範囲を逸脱しない程の幼稚なものであったが、滝廉太郎の、作法上完全な作曲を既に試み、他の追従を許さない独自の境地を開拓していた。

これより先、渡辺校長は教授陣充実の目的で文部省へ、小山作之助、藤村赤太郎と滝廉太郎の三人を、強引に海外留学生候補に推したが、文部省からは経費の関係も有り、一人に絞るよう通達して来た。

順序からしては、一番先輩格の小山作之助教授が行くのが当然だったが、小山教授は若い先生を推し、次に藤村氏も辞退したので、渡辺校長は滝廉太郎を推薦し、いよいよ本極となって、滝は明治三三年九月、独逸へ留学を命ぜられた。

三四年、ケーニヒ・アルベルト号で、横浜を出帆渡独したが、惜しい哉、同年暮ライプチヒで肺結核の為喀血、志半ばで帰朝、三六年六月二九日、二四才で夭逝した。邦家の為痛歎すべき事であった。

× × ×

原敬、南方熊楠、御木本幸吉の如き世界的の人物を見出したのは、東大総長をした渡辺洪基先生であるように、滝廉太郎の才能を見出し、勉強の合間、浅草のしる粉屋へよく連れ出しているように、公私共良く指導したのは渡辺龍聖先生であると断言しても過言ではあるまい。

千里の名馬も、よい博労でなければ発見できるものではない。

渡辺先生の御著述は尠く、筆者は古書展や古書目録を隈なく探求したが、仲々見当らなかった。が幸い昨年「乾甫式辞集」（非売品）を古書展で見出し、繰返し繰返し読んで座右の教としている。

（体育の日・於白瀬廼舎）
（大一二・神戸健之助）

訂正 前号武田英一先生稿中、先生は昭和三二年九月二四日、奥様は二一年八月に訂正します（筆者）